行為思想雜記日錄

本間文庫
文庫 14
A 144

文庫14
A144

明治拾四年壹月一日 快晴風少々

午前二時前半の日記誠に附け終り就眠、七時前寝起せり
雑煮餅かたの如く祝ひ、時過ぎ家を立出で、先づ年始めに
少しまゐて隣の某菓子屋へ年頭の祝義を述べ、竹の内
少し有屋へ行きそこより赤坂榎坂町の野崎氏を訪ひ居
燕を頂戴す、拾時過ぎ文学上の話を始めます、氏を余くの
社員十六名まで、西まします。何處か校
の朝の「講義の時刻取違ひ」の研究を始めます。何處か校
人をあらはすやこれまたさだめ
き由にて袋へ忘、其の後赤坂表町の林氏を訪ふる道すが
ら青山御所へ参賀の人々の車馬織るがごとく、金の紋
の光り燦然眼残射ち服装の中よりも彼の燦たる燭たる
らん其光輝あるは認むる事なし。否！其のあるやも
ざるや余の知らず、或は其員ら隅田の川辺千住小松

る部屋おそ知りつらめ、ほありそ事聲挙り、頭ち砂利浴びせ、村氣家あり道我南の方なり行きそるよ毛木の手前まで濱田氏と行違ひ同氏空れ昨年九月以来の對面なり、佐々木家より利を投ぶ、そそちち見の知らぬ道我種々よ蜿曲そて、麻布東町を至て、本村町の土藏舎よ行きたるよ高崎氏空宿ね居りて二三の雜話我ありね。

國民毎日、二新聞よ讀みて雜青ふの馳走よありき、亡時須賀家を出で、三田豊稚三義塾内の和田福澤小幡の三家よ刺我投ぶ、三田の原我横切りて、福岡氏の箱我訪らよ不在ありき故よ刺我下女よ托そて、新堀町の氏宅参行き行き甚空ち日陰町通りよ出たるよ家を大分の距ありて、其日本服着用飾無事の赤住裝、子女の綺羅、よ立離ち、其百日の徴で隠れたる面ありぎき。

行文の様子、二時過、家よ歸着ふ、書食後、蜂須賀印東の両家よ行き、築地辺る戸川氏を訪ふよ未田氏来り居り青山の学校の人の一座ありて、実空ち御膝我落着ち、種々の對話の中、遂よ一昨年の秋余、西田子空の二氏と新橋會残逃ぜたる話柄よ及べば、其中去蕃二拾五日頃の國民新聞よありたる神田辺の家よ妖怪の現ぜたる云ふ話ありき、始ちてよ、赤田氏曰く、人の死後、其の最り近きき、縁故ある者の宅の障子紙などの自然よ開く事あり、又或る人ね死ぞ候、寺よ行き、よまた久頼むぞふ住職よ申入ぞれば、寺院よ主人の死ぞ報ず、住持の曰く『昨夜、女の主人来りて告ふ曰く、又世話ありたる云々ぞ我故の言ふ所我信ぜず、且余よ戯ぞよ有ぞるぞ』と。家人百方之を分諭すも、始ぞて其の実我得ちりかと。戸川氏曰く『昔甚酒我嗜む、数町我隔つる、媼の家よ、之ぞ我ぞる老婆ありあり、公何ぞよ我の家よ来ちう、数銭我投ぶて媼快我買ふ翁或る朝早々、永眠よ就く、其時我ぞる翁之三時媼店我開ぞて、公何入ぞ事ぞて一酌ぞてぞる事の如ね、皆ぞ

て、公の計音、遍の許よ達す、驚き事、甚だ右之、甚の心我
情まみ跡絶よ帰ひ或る人山中我通遠す
出見る一婦人の茶吐をそて
人形りを、宮みおて婦人お寂を笑我宮みて持てる花我貴て
てある、其の人、通ずがら思ふ様我甚の時不審みの思あど
てもが、今ま形そそ益、不審
郷富家の女何の故あって、斯る山中を徒者我ま伴そがて
跡迎せんやと、思ひ我ま至ぞ疑念の雲益、密る、胸我騒を
人日の光り、西山の端よりまし
そより森吟声り、身まおみじと言日だかり、胸さる、
別や、日足我伸ぎ彼人お家路我まそて歸をける、家まて、
容をき人の霧を消ひなる、知らを欠、見を心り乱るくでが
り、きそり最前見たりもて、宮る他の人の亡魂か、縁あをぞ
て、我の我家百里二百里たずねきて、道多形ちるよ、まの
あそり、紀念の花我送ると其心根がいぢらしい、斯程

実知らぞ、何故よ病の床ま臥せ時事ありや、言伝ありも
給そ必要、今わあざ形そ我ま我をそ思ふそ、又々物我思へ
殺す悲みの魅か先かやは我身我
此ま至て、赤田村の氏ひ我揃を曰く「鶯漢氏若年の砌り
書我讀み深更ま至る漸ま倦み日我挙げて障み我見
ま、あ不思儀！霧の晴ま有現を七方我眺
面のまき右現を七方我眺をて莞爾たるかや思ひ渡て
失せて、我ま元の障み形りけり、やや我をそ氏の実法形
ま、十方信我置そ曰く「其他狐の話等ありて、
遂ま青山の庄ま校ま我新我活版摺りまそて発完
ぎる由の話ありもう、跡ま了名の来客ありおぞ四
時過日氏我赤田氏ま共ま当でて橋氏我訪ふ不在
形りけまぞ、名刺我残そて一先ず日ま町へ歸る、赤田
氏ま共ま晩食ま着揃日ぞ我持ま家我出で

九の丹より神田橋まで、却廻まして志田氏は別を専之丞
お宇着きを六時頃おくり、直ちに当て、答木氏を訪ふ、大石
氏未だ居ざる、早いの次つで事をり、娘子達より歸りま
らまして歌留多ゲ取る、九時前同家発辞す、時ノ尾別をる
浅草のお何も当りて大事ありたり

嗚呼明治の年の夢を過き現世をを今七四の数、今
日我ぼを始まるでかく、昔人の白駒の隙行を云ひ
近き頃、勝公爵の薨りあり、一年の諫元日みあ
室ナ理ヲ以テ一日の計ハ朝ナリ、一年の諫ハ元日ニアリ
り、誠ニ人其ノ元ヲ失ハヽ其ヲ如何セン」肝要ぬため
余ハ本年ハ小説、戯曲の作ハ、成みんかの大野心なり
旦此の六月ヨリ学校ハ始めをゝ又其の後の方向の考に
わゞ私らず此ま随分困難ぬ事ぬり、ままゞ今
ようナ思ふ者、其の宜ろまる従わん事実ゝ肝
要ぬらめ

扨昨日の市中の景況、我略言せざゝ、まづが元旦の事ゝて
賑わゝしき、朝ヨ大分寂ゝ家ゝ門ゝ松ゝ
繁ゝ如り行き、叮々わ道路取締ゝの厳重ぬる故、紙鳶
のうゝ、追羽子の音の静ゝて子女童部の三々五々相携へて
遊遥する者ゝ多かりき、ままゞ三国の原のぬきゝ、一面の
畫境ゝて雪景りゝ又道行く人ゝ繁からねゞ、午多の
紙鳶の蒼空ゝ我ゝ抹ゝる、我ゝ昨年ゝ不景気ゝ勢ゝ
笑止ゝる、其他ままゞて政ゝ事ゝ別ゝ美人
我ゝ見かけ其ゝ代ゝ又一見吃驚氣色ゝ変ゝ
ゝ巡ゝ舎るわず……ゝ
ゝ礼者ゝ残り見受けぬ
ゝ宗教家ゝ喜ゞや在や
同二日金曜日快晴尾無、
此日午前九時前早い氏まる、氏ゝ名刺三枚我ゝて、三軒

又代理我いて年礼と回礼を世貫ひたり、次ゝで家を出で
服部我訪ひ、福島氏を訪ひ行き、倉部阿部、岡田の三家を刺我
投ぜ、小林氏を訪ひ不在なりけるを以、中島氏母子と面會
志、年頭の祝儀を述べ、其より頭の祝儀を述べ、
先づ最初は醫師の御馳走より頂戴して、話又前日の如く怪物
話を選びたるに、代日之可我母の云ふやう、其筆我りうと書あるとて
澤井の藩邸へ行くべき筈なりしが、妖怪ばかりを見てそ、筆の頭よ
進む能はず、もそれおそれ、妖怪ばかりを見てそ、筆の頭よ
切掃へば、漸之進むも我得ず、悔みて見てそ、筆の頭よ
髪の先でまとまりけるに又余の又或る雨次なの内よ
通行也ぬよ、一小童之ゝ、見すぼらしの形
ろやうて、見すぼる我見ぬ、おん好なよ烏羽玉の綴月
り分為里秋、字句あるべく、之を猶の仕業那らずして語りぬ」其他
不思議ありて、種々の雑談、我形ち書ぬ食良我郷食せらる、老母過、

日家我辞去、南河田の両家を刺我投ぜ、小石川表町の中村
氏我訪ふ、日代を餘程快き由にて、起き居らるゝより、
然ばまだ床我離ぬそれ訪まり、種々の雑談の後、又例の妖怪話を持ち出るゆえ
中村氏より、一杯を盛頂戴仕るより、
辺より氏を辞して又例の妖怪話を持ち出るゆえ
石の上にて殺我続ひ居るよう、云ふその道我問ふ
事甚三、一度の答ぐ、正我得ず、進むよ推まる途
ひて道我得るよう、云ふる問ふの先きの女の事我いてす
彼日々あをそかを仔細のある事那らずして、敢て其故我
云わず、其人逐みるよう方よ行きて、用事我すまも其
所をそり、先きの法我語るよ答ふの日久、他の事わ
一年山籠をして埋没せ志者の亡魂の、姫路生をて、驚
いたをる人々我待るよう、御身のめぎ主まの方の
御役人ぶぞそ援頼みたるよ生るのめらんて

て一笑せり、此の人歸る時も前も同じ所行三人のうてる
我見ちう、年ちの哀そうみ、其て屍骸をもみ
やりもかやし又或る僧立居の觀音ち詣んぐ濱
辺残行ちみ向ちより隣ち浪々ちうて立ねあり近き
見まぐ如此の歸人たり、顔貌年ちらず中々の
美人ぢうけそぐよく見るみ、其色え青ざめて
此の人ち思わまち近ぢり僧ち之ち伴んで
道伴をぐて此ぢり、其ち枝ち或る城宿ち一夜ち明ま
其時男わ女ち向ひ其、其ち枝ち或る城宿ち一夜ち明ま
其身ち此御四國ぢうまち、ち其の後勝ち
存ぜる形ち、ち其ち形ち、ち其の後勝ち
此ちみや、若ち御疲勞ち
女わ美ち果て博奕ち久、博奕ち、捕梅ち四五日ち
久、抑ち妾が巡礼の澤わ見ち候ち、肥ち病け
むわ如何ち痩衰ち傷のち、手首でかちめ女の子

生ぢめち附ち旨ぢう、ち其ち驚ち僧の顔見ちみ附
て情ぢの我身の様やうく
進め、元妾わちる方様ち
ひ二八頃ち御主のち情ち
や奥様ちの石ち恵のいやまや、ち其ち
てまち筆ぐえ知ち
一日くち送ち内、彼の国
ちいちち、見ちみ悲ち
わ字ぢの時ち紅の同り
りぢき無常の吧燈消ち
絶ちける、ち其ち
みち頼みち方ち
ちえち其ち今迄杖ち
吸き叫ぶ、ふちぎや、御主の我がわきち取ち
ぢ其の後同けぢ離ち

[illegible]
胸を残す思ひ、[illegible]
我宿へ御暇申して歸宅ぜり
[illegible]
すること、旦又非ずくり
[illegible]
[illegible]
[illegible]

き同会同道もそ、横切り横町我が家へ帰るもそて浅草み行く、道々五変らぬの雑談、我が家へ帰りぬ。公園み行けぬ大分の賑もそ盛装の婦人お洒落の職人、紳士洋服我又洋服我又洋服を見よがしみせびらかす女学生、書生、兵卒等入交りたる下駄の音、靴の響き、笑ふの外なき夜雲脚まだ大分登暗人、あとより見守たり、公園中ほ時過遅ぬそ東橋辛み行く、奈良梅の話も終る頃ほ中入後そ稲妻と鐘楼前暗秋聲道春酣酔』之き意外よ面白かりぬ、生そ『稲妻雷鳴峨々、心耳我ままなる、其の『斯公ぞ誰よ歌ぬで、音吐高々、『雛まで』時鳥子ま有ぬ自ま有泉柑、栗の晴衣の一様よ云ひぬ感心涙ぬ咽ぶ程なりき、例の『焼野の雉子、狩の鶴』ねど死我等ぬ兄弟が心根不憫や母親が胸を洗の三津濱川ぬて直よ東京へ着ぬ、筆のおもむきまつき、丈の浮瑠璃り改まりぬが、一きて目立ぬそ白き様

形る心地せり。三時半頃物語終ぬ、直ぬ楽屋み行き稲妻辛頭の口上を述ぶ、本郷梅ぬて居ぬり、弥辛ぬて居ぬぬ、其きよう帰途ぬ就き五時前家ぬ帰る、直ぬ晩食を喫ぬ居ぬぬて大石氏金を呼びたまぬき八時過近種の談話残ぬり且徳富の新聞の附録を貰ふ約束ぬぬまの、我知らぬまの胡盧、浮女談義我讀みたり、前着も父学者の父学の潮み潤ぬて眺めぬて美服也、中み大ぬぬ後者ぬ人間の美人三拾二相我備へぬる可らぬる所以我説けり

同四日曜日朝来薄曇午後ぬ秋ぬ掛け降雨

昔安部七時過寝起、国友氏ぬ附録の中、峯峨の家の『夢現境』南柯辛の『国両』及び『歴史ぬぬる忠陽の『盃泉の三段ぬ其村の讀ぬ時讀む、浮女ぬ失命せる人物我現ぬぬて可哀然ぬる所ぬぬ、筆者ぬ勇健ぬ云ふ可ぬ、筆者ぬて暗み

此庄の小説の如きは無きか、始め月のま
残酷きて起り、残月残りて冴ゆる、其の中に拾二貫目ばかりて失ふ
者の胸中を推すべきや、余も暗涙を催せり、何等
の妙文ぞや、仔等の如何で、盖し俗の字あらざるべし、何ん
ぞ多きを得んや、『閑雨』を作意一頭地を出るの意
地あり、事を改造男子ならざれば、此の秘密探偵と出掛けた
り、お変らずの筆法なるべし、さぐ出来難きかと
思ふ、拾時頃本屋を行き、都の花、我が水の本を得る事を依
頼をして帰るや、此一時間書斎に入りて大石氏を訪ふ萩野
昇川大石の三氏を西洋軒より招き、酒半ばに
して上野辺を歩き其きより
志時前の家に帰り、英の立出で
車を浅草迄行き、東橋亭に入りて
を語ふ居る故か、飯が感服のみ
次て奈良梅の『義経腰掛松』
んと楽屋へ行きて種々話す形なり、余わ皆な何れ『猪君

の浄瑠璃を聞きて一降旨き様なる心地せり此れ何れる
譯やらん、『芭向』笑ひ、『梢拙を笑ふ』と曰ふ『暮の浄瑠璃』正月
半のそれを其一時間ほど簡程の違ひあり、後のを評判もよろ
しきなり』と、余り微笑を
座へ帰り、次も『呂安の図』
お変らず艶麗とでも申すべき
志給ふ』とのたまへり、『先ず今の愛身』より『不思議な恩
感嘆の至』中戸隔る白砂の天通りの御門を入り受けたる此の身』
云々の処を能く感動、興に入りて
の『近頃信濃の善光寺』同じ都の安らぎて田舎が増しの薄煙』より歌
、出よそ、何の鳥部山の歌り可成の
面の老の命やの非常な旨なりし
得ん』と数行、殊に『手故の簡』
血脈の別』云々迄身其の境を有るが如き心地せり、其上猿廻
歌も中々の上出来なり、而して興次郎の言葉も其人物の辛辣

形る如く顕わすまで至る、傳兵衛の風吐ける、お俊の節義、老婆の
慮安、歌い得て慮と処る、盖し女の越路の称呼からだ
ざる思ふ、客席も亦ざ雨降と居ると、まかで錦通
鳥車あて上野迄来ると、そこそこ往来雨ざ衝て歸る
晩食後都花ざ、漬ざ、衣類が雨ざ濕ざ、ざかで文ざ
大ざかざ乾かざなりれば過豊川小太郎氏まざ種々談話
す

同五日月曜日 朝来晴天
午前時頃生鐘の音喧ざて思ざ
呼び起ざて寒たけざ昼ざ
共ざ立ざ出で、泥濘の中、我宅
所ざ、試筆ざ、其ざより、服部の所ざ行き、ざざより千代
ざの角迄ざるざ、火ざ
と焦ざでかり、辻固ざて横
と訪ひ本郷の家ざ行ざ

火閃々ざ燃ざ上ざ飯畑棚
ざ結ざ廻ざ、詩人形ざ
ざる形ざ家の内ざ入り書き物ざ纏めざ致ざ居る
内ざ犬ざ追々薄らぎざかで、
り処ざ南ざ車夫、野の両人
付ざ見ざざ上の衣物ざ裏返
ざざざ過ざて
九時頃寝起、拾一時過中村氏
金の所ざ来らざとその用意最中ざり、書食の駄ざ
ざり、拾二時過同家ざ出で、本郷富坂ざより三人一度ざ車
お茶ざ上野迄行ざ、同所ざ車
東橋ざ入る、丁度弥旦ざの
居る時ざり、ざざ
良梅の増補忠臣蔵ざ義士殿
読ざて聞ざ処、ざわざの向ざ

次に呂昇の『鳥辺野』『呼び立つる、京をおそる哉秋
月の娘深雪と身は積もる雪』『恋の数々』『露の玉川』の後まで
を『露の玉川』の後まで可惜身を語らそろり、下て
『洗ふ川をお夏の袂』以下の俺和理の中々能く出来たり
例の『領布振る山』の中方形を忘、中村氏を評をか稲妻
りかこ手せう雪もう『扱大切もう稲妻の
『三勇士』『壺坂霊験』『壺屋殿』之等之の
せらきそ之を大きよ満足の至りまう就中『魂魄此世に有
る形そ』云々『扱て鎧の景』『サあ中是能御覧遊ばせそお暇
お能、首ぶやせ妄言おてお遣と形をそて下をとまやて下『他化の言
成詞を込て泣音血を吐々田心形り』『迄て曲中の人物活動せる
心地せう『サア二人の子おのふ』より『知たる形で無言通る呵る計
が手柄でお御どんすまい』『感嘆の至り、直実、弥陀に勝
の局、一向成、相撲の言葉上まま、口地の美辞のこ言葉ま
能り振るて云ひきそ之を遺憾中の遺憾口吐頃

同所浅生で『園生植切』上野近住まの三橋隊牛身店
て晩食我整ハ甚きより吹抜々行くまだ始まねど御客の
人り未だ居ざるまゝ『鳥辺野』『扱て鎧の景』『サあ中是能御覧遊ばせそお暇
お能、首ぶやせ妄言おてお遣と形をそて下をとまやて下『他化の言
成詞を込て泣音血を吐々田心形り』『迄て曲中の人物活動せる
心地せう『サア二人の子おのふ』より『知たる形で無言通る呵る計
が手柄でお御どんすまい』『感嘆の至り、直実、弥陀に勝
の局、一向成、相撲の言葉上まま、口地の美辞のこ言葉ま
能り振るて云ひきそ之を遺憾中の遺憾口吐頃

日記濃梨屋之段』を始む、之等之声の大方立つ故斬次上達のうまみ
あり次に『百合若の正治郎の三味』之等之声極が善からぬと思ふ我中
きり能く感服致兼たり、そこ『傾城阿波鳴門』『順礼歌』之氏の大笑也り次
村代々呼まて曰ふ『之を油蝉の唱』『順礼歌』『尼崎段』えまそ中々能
小陽太夫市左衛門の『繪本幼記』『尼崎段』えまそ中々能
之出またり例の悲を隠す笑顔』『操の曙』『笑顔』形や旦那より、操の曙
きる感服也り、此ま特ますすのまそ市九衛門の三味線形
り、熱心形る上る中々に旨之引々、大夫をまるで語やうそて
居之程な形者形り、まだ若ければ両途多形り云
ふ可た、『桃夭』『竹本綾瀬太夫』『鶴澤豊造』の『薄雪物語』『薄雪殿場』
『五郎子別之段』えまそ中々能之形ま『鶴澤豊造』之ま之形ま
道太夫一代にて寧ろ説明的ま之そて、言ふ所一々聴客の

解るわ一のも所なさぎり名個の胸中ヨ一種の感情ゑ起を
おぼて、人我をて感服せるめるわ
るのうち、此き此の此の此の越ゑ越
り、然ゐ此の浮瑠璃わ其一人ゑ
わ其のを陳み服すをゑ
澤敬也衛門の『北堤源連引堀
き先が、彼の鳥部山ゑ遠
る所感ぜべしゐて『鬼
麦鮭音猶耳底ゑ
り上ぎま其他曲中の人物
ゐ、抑思ゐゑ此人ゑ越一流ゑて義音の上艶澤幸山
の仕丁十万ゑ受ました、然
ゲ生ま橋姫所ありゐが、之ゑ即ち此人の越路ゑ義
ゑねばをる所ゑまて実ゑ白壁の微瑕ゑ此の事ゑ
人ゑ思わをゑり九時半頃寄席ゑ出で切通ち

中村氏兄弟ゑ別ゑて家ゑ帰る、此日七仮中ゑ起きゐ故か
晝頃よりゐゑ居心地ゑりあゐゑ夢ゑ
同六日火曜日朝来晴天
昨日朝ゑり尾心地ゑりあゐゑ夢ゑ
類算ゑの夜浮瑠理外題ゑ
睡ゑ晩食後園ゑ
ゑ医者ゑ呼びゑ行きゑ
只の尾ゑゑ気遣ゑ事
喉薬ゑ呑ゑ、論理ゑ中の三段法ゑの部ゑ一立百十頁
みて眠ゑ就けり
同七日水曜日朝来晴天風あり
昨朝ゑり菩提ゑ出ゑず九時頃ゑ君就氏ゑ来り種々
談話ゑ氏ゑて後拾一時頃七佐氏訪ゑ来り、ゑ話
の收穫ゑゑゑり、氏ゑ去ゑて
晝頃ゑり『好色五人女』ゑ読ゑ始め午後二時過迄ゑ

讀み終り、中々文章も旨ければ、そのまゝ云わず余所ながら寫おき
す所、おらが眞の文章の眼目を感服せる所かゝるおもし
ろき、全部五巻の方へ載せる所。お良清十郎。お仙長左衛門。
おセ、吉三郎。半左衛門。お三或右衛門の五通り、二は渇
望出ず眞利町のなどのて日本人の拙き筆を愛取る
事記の飜訳終り見れば、題名を三指佳撰と云ふ、係
地より赤き所ありてゐる軍中国より中ほどの国
等のあり、然も紙も粗末其上代價も七銭五厘程
その事記をも、武藏屋のおちねのにもて大分子高
町より行き中村代我ゐる
昨日描寫へ出向が留守なる由故を以て歸途福富
氏我訪ふ、と坂我隆
み客来の容子故、道を急ぎて歸宅
直ちみ日本人我が訪む其そより日吉丸雅楽」我
達ゝまで讀めり

同八日木曜日　朝来晴天
昨日朝八時頃寝起、拾時頃
頃豊川を出で、指二ツ前之
す、其そより日吉丸」我讀
が残り居りて之を我食也
同九日金曜日　朝来晴天
昨日朝六時過寝起、名古
三田之行き、そより後
歴史経済二科みて他
「の日々堀島氏民法発布
國の習慣を依らざる可らず
の手を或ひとる者故
た所あらず故之等を
理由り、物事法律七人民の
て如何なる改良其の事制
同

律て人民の批准を求めて行わるを難きなり、徳川衆
廉わ大改事家取り之彼も実よ、人民の習慣を破られ
ど行ひ得ざるそ之を静謐ならしめ、為に国を獣制
り、然ざるも人民大をは必ずや国子あらざ革命た次で起ん
ぬき獣制が若た改革せられ前者の如の之を取ざるそ前者
のみ、如の之を取ざるそ前者の如く人民獣制みを
うて、獣制ぬ性まず、後の場合と紀人民獣制みを
ぬの改と革命起ざ我は之を見ざるそ習慣
た特ま有司の重んずるなり、而よて人民の服
従わ一種の批准なり、故ま人民の服従を得んと欲
するわ其の習慣を重んずるを要ぜざるべからず、此の如く習慣
慣て重んずるが故ま経済学上の所謂
重大の関係ありたる時頃家み帰る、暁方中村氏まで来り氏て語
浜よりの帰り掛けなり

余わ氏ま其ことみ行かざるを
るる氏わ断り実をよせ言わをたり、余中の用ありを
でなそ翌時前帰らまたり

同拾日土曜日朝来晴天

此日午前拉一時前家を出で、鉄道馬車にて筋違
近行き、そこより百九國立銀行ま行き豊川ま逢ふ
日人日久し先日来御話の金わ弁事なのとお都合仕る可ふ
然ども、此の事君よりも草郷へ就て申述
昨年土有ま其話わ草郷へ云ふ『事
たり彼日久『金て月末みるて世夏いたし…彼の中
村氏わ何時金の容よまそ『彼の人も少々
事情ありまや』や『金『彼の人も少々
事情ありまや、断足ら安、さよとの話ありたり『彼
日そこで何所かの富社のでり入るや』『金『左』
彼日そ草郷へ申述おいたりそこて見るな
て銀行へ遣ひ実をよ

午銀行あてた人が入らず
らずの仕舞湯話さぬ時
行矢歩たり豊川や話中
り米り表町ゟ行き中村
居るかゟて文矢補へと
栄勉強ゟ帰り神々雛
ゟぶら道の事ゟ務ゟ
てた玉人公わ御留ゟて
山氏ゟ午一人の書生我
申村氏の所あて晩人
院の事係ゟて別る
議書の係聴券我
可しゟ余わ別ゟて
道馬車ゟ
ゟす

同拾一日々曜日朝来晴天
昨日午後ゟ日様晩近ゟ
昨俤子安の二氏訪ひ
ゟり

同拾二日月曜日朝来曇
昨日朝遠ゟ
ゟて学院ゟ
ゟ帰ゟそ、姉事ゟ
雑談の末、氏曰く『国の代議士
ゟでて傍聴券ゟ
ゟ是非ゟし同日頃
か余の知ゟ
ゟ有ゟ
ゟ
ゟ
ゟ

拾日 木曜日 朝来晴
昨日朝寝をして三田迄車を
昨日朝寝をして姉より五銭貰ひて三田迄車を
雇ひ行く、課業より事務
繁き、甚だより性をおぼえ
えてより、船析研究のなき無きが故よ
くすみ 数学の時間また、例の
ごとく授業の時間おくれの
中村氏の講義なり、あまりの
欠伸を出せり、あまりの動議
申して宿私み行く、動議
車にて宿私み行く、昨日の
昨日の晩より風雨
表の雨戸入れ、
ぜんの氣味にまかでぬ
道中双六 沼津の段 中々
駒之助の 緒方 之助 飛び出
来れり 「さぐ」 「夕朝鵐」
の前の 中々
大吉の 「擂州合法迂」下の巻 合法

中村氏歸り去らる。余も下痛み戻れる故、
拾音木曜日朝まで晴
此日り陰となりたるが三田迄車にて、それより佐赤な
院へ至る。此日數学試撲科なれども
授有るまじきやう得共、
が陸軍の折へ衣類を取りに行き度事を云ひたまぐ、余も事
それも毒由の稲垣の折よろ〳〵頼まれて、
と請ふ老爺あまりたる由を云ひたまぐ同人わまぐ歸
陸軍み面會あまりたるをよろこびたまぐ二時
山ねぐ、斬之二階まで待ちたるが、
み登らざる向ふの隅にそれ
の右のうへ稲垣が寝て居たまぐ
日より伏せて居たまぐ
ね錢う厄介から此清国銘之三枚みて伏せ居たまぐ
此酒呼吸我つくさる物何時
の害あるその稲垣なそ

人我里へみまするあり。余ふ語ひ、余も氣の毒な堪ぐざる
き我の部屋へ畳凡十心
側へ壁へよせて筆
の物引べありて隨分美るふから、此まが鮪の美
ふ着飾りて、歌うとふ姫御前達の住居めて
思ひぐ氣のまゝ
まと陸軍を鐘撞堂へ
衣物の事我語ふらるゝ
らせ云ふぐそう、余も直ぐ
なぐさまき、奉行梅の
きをするやう土騒ぎそて
云ふるゝ付き実ふ
生げて歸
迄まるおぐ
一枚我ふさそう大
頭中村氏まり、

まて一枚宛貰ひたるも第二番目なれなり、又代議員ひ、又
大皇良の所ゟ不要なりき故に前の代議員
集會所に行きたるに 其の人めに居らざりしかば
て大きに失望しの状なりけるぞ、係り笑ひて曰くそ
こそなれさそ大安心なり井上大皇良二氏より各一枚づゝ、
六枚なるぞ君の宇都宮のを合せなば三枚になる
なり亡くも宴会に於て大きに安心せり、帰る場所より
帰りて、大きに喜びぬ、中村氏わざわざ皇良の
家まで婦の名札及び日光町なりし云ふ事を聞
いて女が不審がりたるも、事務所より出でて、大笑ひ
せる、根元雑談に費した、拾一時過就眠

拾六日金曜日朝来晴天

此日朝食事済まされ三田迄歩いて来たるよ、それより
往来学堂に至る、聖書を一緒に史の二科に出席し
直ちに帰途に就けり、拾一時頃家に帰着す 道真

昼が来りて居りて陶器が出来て居る最中なりしかど、間
けで弥昇来りて今の先き帰りたりと言ふ、書記官良
後拾二時過ぎ家を出で新橋に入り衆議院に至る、右
の方より入りて守衛に名刺及び券を示し、それより
階段を上りて右の方に傍聴人控所あり、暫時待ちて
一時過ぎ傍聴席に入るを得たり、始めて此の側の西の隅
の所に入らされり、問は放て中央に議長席あり、其
隣の書記官席等まき紙の附録にて見たる通りなり
無く傍聴席も一間毎に仕切りありて第一列にある者の
みか議席の總体が見る事を得ず、それより大分揚合
よくて我が聞き得る所の点有りたる所なり、幕の続きにすみ
を垂れたる様なる色にて薄く縫ひ模様ある者にて
中々立派なる者なり、事務員に中村氏の知人ある
て、南側の通路にある所にて其の所に行きければ
通路の椅子が空きて其れより腰打掛けて居

謙信の言葉手て飾りて居ませたりと思ふ、一体中々面白い
話であるがそれに随分関するあり中村氏の曲亭馬琴
て下痢が重く人々に依て要点ある沈んで、帰宅後拾一時
過ぎ就眠

拾七日土曜日 朝来晴天

此日午後二時過ぎ家を出で南伝馬町へ行き途地代
事務所に行き中村氏と共に丸の内ぬけ所へ一橋
通りより神保町へ出で本屋廻りをやります、 孫右衛門
集成見掛けたり、弓町の家に行き書類を纏め
一つの包み返し小島氏に預け置き中村氏を訪
ひ晩食の御馳走に預り、他伯吉村の氏と新
富町にて小川亭に行く中々の大入であつた最初
太吉の『学海源氏貸金の段』可成の出来であつた次に
小染の『増補忠臣蔵 本蔵下屋敷之段』之れも宜しめ
て面白からんと待ちかまへて居たるに中途へ入りて切らさ

たるは何事なりしか、手持ち無沙汰を失ひたる心地せり次に駒
之助の『義経腰越状泉三郎館の段』之れも中々能く出
来たりたり女子やかて思ひ出す大晦女の三味線の手裁
取り過ぎたる様なれど心地よく聴けり、次に小錦太夫の『鎌
倉三代記高綱隠家之段』之れ又上手なり流石に言葉
のよくつかへ感心したものなり、枚太郎わ綾之助鶴賀津
の『日吉丸稚桜 駒木山城中之段』之れも中々騒がしく上手なりき、それで
『過ぎたる義は為ざるに如かず』以下十数行『其道の知識が道ずる』
以下『能書き宣加批ろ為』又『而して一方の代表者』
氏の系図を揃へたる』云々の母の嘆きまで書き感ずべき所
称すべき所少なからず、然しなぜに久吉の言
葉わかなり不出来なりしかと思ふ、此れでも今夜の寄席残らず
中村氏等に別れ、丸ノ内抜けて帰宅す

拾八日々曜日 朝来晴天

此日午前は久々ずくやすみ、午後姉と帰りを共に秋み

入り家より一円也貰ひ、神保町へ行き、まち兵佳来ちゃ、店
にて書を買ふ中村氏方にて八時過帰宅
に就き目鏡かけて事して、帰宅す、途中にて牛肉及び
菓子相求め家に帰り下宿に致せり

拾九日月曜日　朝来晴天

此日朝六時過寝起きて七時頃家を出で学院に
行くにけるに代りて病気にてみちたり、帰宅後
七時頃近くに下宿に致し、鶴仙に行く、寄りの大分減
おたり最初に東京の大網島時雨遊懸燈を見る之
え感服致さず　次に東京代の『翔振壁驕麿』付清之段之
劇ありて面白く、然れ共力の入れ方が大分
ありけり大切に三福東京の『暑寒稚櫻』正清先生之段中や
能く感心致すところ投岸に暇あり、凡そ
るのみなりき、帰宅直ちに就眠

二拾日火曜日　朝来晴天

此日午前四時頃隣家の人々屋根へ登るやら大騒動な
れます故寝間に入りて大事かなと思ひにてり実く
ちるを得起きて、午前六時寝起七時頃家を
出て土橋の方に出で西方を見るに霜の中に畑の立
登るをたずねて麹町近辺に大事がある様ならんと思
ひ、それから学院へ行きて聞けど、所々の大事なり、今朝の新
聞、寂しさや、我が空前絶後の第一期国会の開会と
ある議事堂は夜の中に灰燼となりたる大変なり、とても
いけない、講義も終りて帰宅、お橋へ入りたるに上下両
院共無残より焼け落ちて、唯畑笑のみぞ立てる様
思わずの悵然たり、されど我が議事堂は焼
きまた共に議員心中の存亡敗れ残り
の機あらん事を祝はん事希望す、予堪えるなり
東京府の大半は焼け都新聞社の先生方まで発火の
原因は電気の作用ならんと云ふ事ありたり　貴族

院の三階にて病唱一般なきも
の備中の体まさり家へ帰
み日を送る 此日流行病なき休業の往来なるのみ
二拾一日 水曜日 朝来晴天
昨朝時過寝起学院へ出ず例の如し「まくわや」「はるす」
の代休みなり 家へ帰りて下読みをなせり『イブルーエン
サ』の勢猖獗なれば昨日も学院まで前月の頭
書を提出す 其成否を知らず 依て明日清書の上
高に持出す事と決す
二拾二日 木曜日 朝来晴天
昨日学院へ出づる事例の如し 体業を許さるを
以て明廿三日迄、来る廿六日迄の四日のみ登校 金吾今
日も休めそう 依て授業なり 餘り理屈ばなれり
たそうが故よ失敗せり えみ依て見まそ理屈ばなれ
を差扣えおでなるべき事なり 課業事終りて帰
宅後三時過家を出で徒歩にて郷を行き倉部氏を訪ひ、
種々談話のまゝ 五時過同家を辞し 封道の蕎麦店にて
食事を為おそ 夫より表町を行き中村氏を訪ふ 種々雑談
の末六時過同所を出で、池の端の吹抜亭へ行く 最初は奈良梅
の壇蔭『医蔵公貧を蔵部之殿』 云々を略述せるを
云ふのきらひあり、本編の最大要所
なる 主従離別の悲しみのあまり
一ぱいとて其要点の嘱
一ぱいとて先づ平
あらぎる叫らず 一体皆尾羽打ちからし 扨
中押その出勤の断りあり 夫より稲荷の『奥州安達原』 繁栄殿』 云々 病
詰を出そて見ると、前もそて居
出手形ゝゝ、例の歌撃文『今の憂目』 云々の所
『苦垣や』 以下『聞には為父や恨迄』 申云分の所を出ゝゝ感服
致おおお修そて両人そて帰宅 夫より行き稲荷の見舞終る

賢哉の大分声気相投らざるに寄寓して中村氏と共に奥砂吹迄参詣して帰路同所の菓子舗にて菓子折の土産を買ひ求めて行き餅菓子を食せり、就寝後菓子折を食せり

二拾三日 金曜日 朝来曇晴天

朝拾時頃吉原が焼けるのだそうだとか、吾々之も聞きて大に吉兆だと、番前より都の新聞を讀む、午後二時頃佐伯行の汽車に同氏残待合ます間『ラシプ』を弄して、四時前氏帰宅まで駄の駈走になりて氏を辞し、四時過同家を出で富抜を山義判所詰の巡査に訪ひたるに、柿本氏は諸氏と共に会議の為め松永氏の白久邸へ行かれたるとの事にて其の書生が付物の如くに居て、其の書生等で女学校生徒なども見えて行くのでは駄目かとの感あるも、故に此の書生と共に入席して聞くことゝせり、蓋し会議の為め、余の好まざる所なれども余は断然、女義丈夫の事が見たいとの主旨に賛成せるに、女義丈夫を聞かざる書生の注意あり、余の書生の女義丈夫を聞くは其の教育の為ならずして其の顔が見るなどあるのみとの事実を確認するを以て其の教育を受けるものよりも其の教育を受けざる者の方が自然、純朴の気質を有するを以て、其の方面のある程ならば、教育人の自然、純朴の気質を余の最も非常に好む所なれども、他を以て教育を進めて教育を重んずる者多き今日斯の如き乱雑至極なる者の様なる猶余の如きは真正教育を重んずる者あるを知らざるや、彼等をして充分なる教育を施さしめ、其の長所を伸ばさしめ、其の短所を矯めしむべきなり、余は国民の風教上より、漫然たる方針にて中々其の範囲大きなる学校を設けて、多くの生徒を入学せしむるは国民の風教上より甚だ危険なりと云ふ議論の当否は暫く余は之を駁する等中々賑かなり、尚ほ他をも訪ひたるも皆不在にて日久しく『余の別の文学の事は止めて、然も君それらやて居らねば之をそゝのかす口のみ動かし、然も君それ

変らず熱心よ諭ずる』と、余り『文学まて矢張り
素人肝をそで、おまえ自分の言ひたる所
の比喩かり知らざるみ、然れ君す前よ云ふをる、す義
左まの事も大まか心あってこ言ふまでも慮ばからん、とたゞまで
ぐ、余わ其の主義お確み
把るおと自正の藝術観
打ちあぐし』として、大笑をたり、思ふ余前の高
聲斗咒をたゞそで、氏の家人わ定めて一驚みしをを
ふ事々を存ぜてる、其時間、同氏から晩食せ御食せ
らるゝ、そこより同家残生
の『腰越状鬼鄭敏之殿』之まそ善き出まま北お、且斗の妻が夫
と離婚斗求むる所以今少ゝ分りぬ
思ふ、五斗の空銃炮のごとり面方気漲然たる所少ゝ分りぬ
かとて残念く次之駄
文の枯まて居るまでも同感まるまま

一時別室にて寝ねお行きた女は豊吉えまだ帰らぬかなど云ふる
内に合わせたるが病気にて那
げおそぐ暫時大磯滞在の見込みにてまだ寒に気がて
そきそう、余もそうて吉氏就話
赤、日吉町より着す、家そそ
吉氏そ、義兄と談話す、余
お事件話せとの依頼ありたり
そう、姉そまそ居もたそ
二拾吉日曜日朝未薄暮
昨朝時過寝起聞けそ
よりまそて、姉そ同家
形う、えまお同家そ賭博
不安心の至形そそて、朝
そそ帰るとの事よ付き暫時
けそそ拾二時前余わ宇十郎
其表口よりそて立ち御ふ人お居らぬかとそへで下め共居
らぬや答か、余わ家斉間違にたるやと思ひ帰
て猶よ聞けそ主張をまそ
行き今度お裏口より行きそ
ぬよも憎然そそて出まり、
日之内参向せて居そそ宇損
たそて帰るべし、余わえそ
云ふり争し見えるにずと思
ま帰らわで余わ激烈形る
て姉よ送そり宇時頃加川氏
よ姉ぜ迎よ行き始下女う取次まて出来とおかで、今加川氏
ま手り居る事形そそ、早々御帰とあそふの事形り
へむ、今大分負けて居る故立ぜ大損形り加川
氏ぜまそて居らそれそ今少そそて帰るべし』ねそ
余わ『お甚都合悪るし、柳り断橋形る所よ居まる

お前のためを思ってやったことだ、第一今の所為は法律上及び徳
義上みて大なる非難さるべき事だぞ、さあ非常帰宅あそ』
姉曰く『可哀そうに金ちゃん、お前を置て貴女を困らせて金ちゃん拵てて帰るから辛抱しておくれ』金の曰く『たとえ是非帰るにも今
三拾分間て御猶務めますから』『そうかえ』『甚だ困るわ』とて大きな三賊ため
息ついて金ちゃん、斯る魔界へ来たのも全く姉の為を思ってのこと、然るに貴女は
思わぬ所で実に驚き入りたる次第、其家のめっかちの女房と義理一遍の事
さえ為ずして帰るとは余りに薄情ではありませんか』『ソレ
ハ』『ソレハ』とて金ちゃん、斯る魔界へ来たのも全く姉の為を思ってのこと、然るに貴女は
随分苦労をせて貴を追ふて来たのに、実に驚き入りたる次第、其家のめっかちの女房と義理一遍の事
順序もわきまえず、かくの如き所行強て帰るとは余りに薄情ではありませんか』『ソレ
実燈後迄居るとは余りに薄情ではありませんか』『ソレ

み今言云乙四直きたまま事ありそ出来ことをて
云乙なるの式ぎきる帰るかからきた帰るその返事
ありたり余わかをわて『余わ、郡令の要おき所行強て帰
呈よりそ云をぎるやく、をぎる逢ふて一日云へでそ
てよー』とわ云わたるの向今おく表口より帰る』との
返事あり余わ直ちお表口より帰る松
女時まて姉生でまをり即ち体て家よ帰る松
永氏まる居り母、同氏よ都の花弁借す、種々談話の
末氏まる、姉と鳥森町よ行き、拾時頃帰と来て、他の福泉
より帰るまよ付まて大きる不服升申出ちをぞ
余わ情然、何の高間ちそ
ろ、猶進んで賭博の甚だ不徳法なる弁論おたるよ
堅ろ余の賭博弁立て身弁富ます物て聴よ等こ』
御付まて大きよ立腹ろ出わ姉弁賊ありとろやて
横浜へ帰るよ母と金我出だせととて大騒ぎよ

廿六日月曜日朝来晴天風あり

昨日朝八時過寝起朝食後直ちに家を発ち、九の内より、馬場先門の所の空地に到る頃より、雨少し降り出したれども、斯る事は珍らしからず、且つ兼ねて用意の事なれば、何ぞ厭わんやと、傘をも持たず、唯一人にて、雨に濡れながら、歩行して、日比谷の原に出で、原を横切り、霞門より、馬車を雇い、京橋辺、銀座一丁目先まで帰宅、夫より、直ちに、中村氏を訪ふ、氏は逢ふ事を好まざる人なれども、余は、氏と、談話を試みんと欲し、態々出掛けたるなり、氏は、余を見て、驚きたる様子なりしが、余は、氏の驚くを、意に介せず、直ちに、氏の居間に通り、氏と、相対して、談話を始めたり、

余は思えらく、斯の如く、仁助の死後、又苦しむ人なき様、且つ余の姉の賭博狂の悔むの心、我が喚起せるわ大きみ竟ぶべき事あり、姉が若き時の如く、今仁助のまき執りて、福泉への店を立つる様、致さば、日比谷の事件、義気を誇らざるを得ざるべく、且つ此の事件、義気を以て、なさば、余わ大きく、社会の尾瀬悪尾、俗に所謂ボスなるものとなる事を得べく、内に入りて少しの勉強をなさば、人の戒心すべき所ありと、人と思ふ、余わ只現時の社会

傳やら、手紙やら、なと見せたり、吹抜へ行く勧進帳と出しもの
事なりしかば、行かざりけり、赤田氏来りて余
わ姉より豊川に行きて、書生に逢ひて銀行にて
安田銀行の振出手形にて金を借りんとせしか、聞き合
せて呉れよとの頼みにて、宮こけさせしに、証人得ず
事にて豊川より行けり、途中の寒さを烈しくて腰
のあたりてまるで切らるる様な心地せり、矢野え留守
なりしかば十時頃迄待ちて見しかども、帰らず、故に手
紙を置きて帰宅せり、種々雑談して十一時頃就眠
二拾七日火曜日朝来晴
此日朝学校に出で、課業事なかりしかば、帰宅す、下読
少しなす、晩方寄席に行く々の議姉より出で、元より大
賛成にて姉ちゃん先きに出で、水崎方に行き、余と中村氏と跡よ
り行き見たるに日曜早家に帰りしまえ
る故らんと思はるる頃なりとの事なりしかば直ぐに引返
して家に帰りて聞けども、帰らずとの事なりしかば
又再び銀座通りに出で車にて仲町に行き吹抜に行く、又姉
来りて居り、最初は祇園守の『鶯娘昔噺』『鈴森段』中々熱心なり
感心すべし、次は鐘楼の『増補忠臣蔵』『勘平切腹』の段、此の義太夫も
冬之関なり中々上達せり、次は路日神の『白石噺揚屋の段』
華段先づ可成、然るに余は甚だ不親切なる語り様なりと思はれ
今少し熱心に行かぬ事か、次に呂昇の『舞扇紅葉狩の段』之
きは非常の出来、此の人まことに、始めて此の妙を得る所
ありし女
なり、惜しむ三勝其人の如きは、呂昇前の三勝か三勝の呂昇
か吾其の何れなるや、知らず、昔人をして此の無双
の名称を大なる為さしめん、次は奈良梅の『菅原傳授手習鑑寺子屋の段』之
も面白き所あるまじと思ひ、楽屋に行きて種々談話り
中村氏は八陣の『正清やら何やら』と云ふ言葉をつき、呂昇は
例の如く、少々理屈など述べたり、扱ひ
息三郎(?)段、中々の出来、聞く女の嘆き空しく錦の下の五十

大勇気凛然、然しその部分は中々難しい、之をさるて寄
席に出で天神下まで車に乗り中村氏に別れ
帰宅す、此の夜に寄席まで、雁首文典への下読み
なせり

二拾八日水曜日　朝来晴　時々雲出

此日学習院に出づる事例の如し、また々なれやばかりは雨
氏休み、帰宅後直ちに家を出で、鉄道馬車にて須
遊廷行き、それより、百十九銀行に行き天野に貸し出す
既の一件が話ありし故に今銀行で代貨をすて
之に書ありき、金九円だけ受取り帰宅す、家にて
下読みをなせり

二拾九日木曜日　朝来晴

此日学習院に出づる事例の如し、帰宅後直ちに
本郷に行き本屋にて本代を払ひ、大学に行き弓を射
る、依田も来たり、四時前同所を出で、本郷の山家に行き

親父殿及び、山口氏に五銭を貸し、出屋へやった、中村氏を訪ふて友
人が国へ帰るとて、之を上野の停車場まで送り行きたり
六時頃、吹抜亭に行く、親鄰の来会にて最初、相摩吉の
『大功記尼崎の段』これ又実に熱心なり、今少し三味線が鳴らぬと思ふ
次に鐘辨の『壺坂霊験記沢市住家之段』中々旨く、然し声が少しかれたる
独急次を弥辨の『加賀見山旧錦絵長局之段』先づ可成、毎
度云ふ事なれども、今少し熱心にてやらねばならぬか、次に呂幸
の『奥州安達原袖萩祭文之段』中々上手なり、先づ例の『今鳥』さ身
より『不思議と思ふ流れる』迄、之その出来、就中『同無鳥』感嘆
身を以て『浩島の曲』にて以下上々の出来、然りけり、次に奈良枝
の『蘆屋道満大内鑑葛の葉子別之段』感服せずや、此の間、自宅屋
に行けり、然れ共、稲辨鐘辨の『加賀見山舞鶴之段』
無上の出来、唯、忙然たるのみ、感嘆敬服、中村氏親鄰
に酒を求めたり、寄席を出で中村氏に別れて車
まで日吉町に帰る

三拾日 金曜日 朝まだ曇雲 夜ニ入雨
此日朝食事申定候のまゝ
いとの事ゆゑ大きなる
な行き荷物など纏め
久島氏の方より荷
未明の頃毎晩
る事ゆゑ、三時過
寝もやらで
私なども此日
三拾一日 土曜日 朝まだ曇雲
此日朝國性爺
て学校より荷物
二月一日 日曜日 朝来曇雲
昨年前学院へ行き、荷物
り夜なかり小川氏のかし高
始めて昌平の官庫事務所
台湾在君」以下如、次て数の書翰
雲の心尚ほ餘程気高く燃
然る「鋼務概況」お今ゟ
殴打ありがたき事なり
しとその外は切手稍
義設一文まで日常の出ま
数行風雨」以下の葉
り稍拙なれども
る月人出まで」
ゟ』とて笑ひ
事也、

同二日 月曜日 朝来晴
此日学院へ出づる例の如く、
二時前家へ歸る、

孝季氏の妻君昌子を今日葬儀執行の旨
昨日紙上にて承知ありたる由にて云わせやり、余は六時過迄
に下讀経終り、車にて永眞町なる福富氏を訪ひ弔
辞を述べ、刹那通夜罷帰り、直ちに中村氏にて訪ふ
氏も今帰宅より帰りて食事中なりき、
氏の母君も病気にて今日も母の命日なるより余も精進せんと
わ深く其情の厚きを感ぜり、八時頃迄と云へ
いとまを告げ帰る、途中にて小雨
来る、築地家に殿一つを聞きあも七日なれば稲荷にて散々な呼き
て自宅の垣根を越えりき、誰の人ならぞ、百
と云ふ呼き所なからぞりき、帰宅掛けまで裏隣
子より下ろして楽屋の前に行き戸を叩きたるも、中村
氏も今夜又稲荷へ通夜とて僕
なりて、明日横宮へ行く積りと
なりてり、昨日葬儀ありたるとの
ありたるが別に御用もあらざりきと云へり、余も別段用なき

答にてり、帰宅掛けまで中村氏の洗わを数篇夜に行
き馳走を命じたりとの芸者を交代せりて帰宅
せり

三日火曜日朝来曇天且雨
昨日学院を出づる例の如く家へ帰りて下讀みを
日残り昔通り昔姉来
四日水曜日朝来曇天且雨
此日学院を出づる常の如く、まつねや氏を訪ふ
午後二時前帰宅後直ちに下讀みを終り姉帰宅
昨日木曜日天気前に同じ
昨日学院を出づ、家へ帰りたるまで、各内が東京へ社用
て出て来たりとの事にて、話をなし
状等を居たりて、即ち、時頃迄に下讀み終り、銀座
馬車にて上野迄乗る、途中、今川橋近辺にて一度あ
り、車掌なのを怪かと問ひたるに答えて云ふ、の如く

事え取けをで、ぬきまます
落取ろと一年もり、萬安
所なて馬車が止まて動か
寺の人々一日下車え、稍々
下里、仲町を往て就田
地ぞて、寝て居をもが
取もり、四ツ七分親太郎
川田寺の式まをて又々
石な持出ぞて、磯山よ係る
日家我辞去車まて歸宅
六日金曜日朝来曇且雨
此日学院よ出づる旬、学の
よ忘まをまで課業終
狩よりても、引よ取す事
七日土曜日朝来曇午後ぞ晴

此日ぞ午後家我ぞで表町の中村氏ぞ訪ひ、種々談話
晩食後小川亭よ行々、最初彌吾郎の『義経腰越状』盛節段
つ可成、次ぞ呂安の『蘇洞二巡』釜入段、之まぞ、善ぞ出来取りと
思ふ、次ぞ小政の『壷漁剛旭秋聲』春歌段』撃壽の戯云、沈着
の枝、文ぞ我実ぞる硯ぺんが、我わ以、其の老練取
る事取す、太宗良梅の『明鳥夢泡雪』岩屋段面白からぬと
覚悟ぞて中村氏と共よ歸宅
る、奈良抽が詰る時え何時り
情ず害お居らんと思ひ
え而白からぬと大
ぞ高座より下ぞまる時
むけて、通り過ぎんとそろる
大閉口の至り取うき、切の『柏拌鍾拌の縛』本大功記』督意齟段』
申す迄ず取きず、絶妙の出
の三番え、眞ぞ感入

寄席を出で、中村氏と別れ、帰宅す、家人皆おそく
まで居らざりしと云ふ、『宮重郷』まで明日之旨申入
りなまると云ふ故、明日は朝
都合なせんを、姉
形、轉宅之旨七日ま延ず事ゆえ
で形ろまで、とそくり、
八日 曜日 朝来晴天
昼朝の内下痛み形ばかり、晩方、義兄ゆえ
来まり、晩き鮨ゆ食せり、大一ゆえ男兒我三田之
まで、八時頃鶴仙子行
初若濱矢市左衛門の『三谷姫』軍記『障屋之段』熱中の
枝試験員の曲、我そは、其の
次ぞ綾瀬『妻豊造』の『桂川連理柵』『帯屋之段』ぞ老緑、執手
と云ふの外形ち次ぞ播磨大夫
文『紋左衛門』の『中将姫』『吉野松雪』『責之段』
之き絶佳の出来、名人の藝
藝をなん形ち者、かと感服せり

昼母ぞ俊薬
ゑ行けり留前
お安来まり
皆夕方帰まり

生ず例の『痛』を忘れ半修羅下の二上ぞ、及び昨日迄『此』が女性の
四形ぞ、泡倫の出来ぞ、其ぞ、日来ぞ、
まぞ相の二ぞ字母の言葉
てあり、ち、帰宅後ち直ち
九日 月曜日 朝来晴夜ぞ雨
此日学の院ゑ出づる例の如く家ゑ帰りて下待つ
姉と共ゑ六時過ぎ家を出で、銀座通まで雨七日ぞ
行きそきより車ぞて、小川亭ぞ行く、最初『呂幸』の『将軍』『嶋』『雪』『責』
之段の成ゆの出来形ぞの
感動薄かりき、前段のが先金と形ぞ故少ち、
姉ぞ楽屋ゑ行けり次ぞ小政の『夕霧』『郭文章』『喜衛』『殿』之まぞ、非ぞ
の出来ぞ、感服の致ぞ極の
の『箱根霊験』『曽我』『対面』之段ゑ形ち『曽演』之段『工』
形の『蝶花形』『歌島』『忠』『臣』『蔵』『殿』『感』『謝』『奉』の『忠』『臣』『蔵』之段ぞ、
例の『一百三拓六地』式形ぞ、古戎巻きゑ形り、余ゐ此ゆ大

きよ閉口たる事あり、そ[illegible]何のそと問そなお、先日まで計畫
る[illegible]りなる牛乳店の件ぞ[illegible]め何のまんそか、義兄の耳まで達
けん、此日夕方手紙[illegible]にて其の件我美止めんとの旨[illegible]や
越をまちたり何[illegible]母[illegible]面接のまま[illegible]
事[illegible]向うて他の人[illegible]忠告あて[illegible]文面[illegible]
[illegible]の節[illegible]大分老練[illegible][illegible]
実[illegible]氣の毒の事[illegible]見たり[illegible]
[illegible]一人の書生居[illegible]が一寸立[illegible]
時の[illegible]歸[illegible]事[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]事が今の生涯中より起るべきか否やを顧る暇なき事[illegible]をぞ、今も此の如く、[illegible]、[illegible]、[illegible]

公羽大酔し姉を見て一揖す、座中呆然

弥昇先代萩を語る、近来の出来なり

此の間

公羽の言なりしが、余の答へて曰く『左様子沿革的の御議論なりき、銀行の如きも昔ては『ジユース』即ち西洋の纈豆のみなりたる職業なりしが、今はそれとて銀行事務なれば卑きまでも協はぬなり、譯なり』と、公羽笑ふて答へず

二時頃公羽両国に向ふ、是より先き余は頭痛激しく之を孝子に訴へ、此の日昼さへかきも鮨を食せり、三時頃稲舛ともに来たる、因て発議し姉が同人を迎ひに行く、五時帰り来たる、曰く、稲舛は留守なりき、弥昇呂半も来たる、暫くして席の後ろに次第来る可き筈なりしを、七時前草郷及び弥太一及び佳代を連れて来たる、八時前弥昇及び呂半来たる

弥昇は『大功記』を語り出す、公羽之れに詩を加へ且饅頭を頭に置き以て其の尻尖なる説明す、座中一段の春の景色を顕はせり、拾時前公羽去る

呂半『大功記』及び『廿四孝』を語る、未替らず艶曲呆然

声、人をして感に堪えざらしむ、稲舛次いで来たりし日人に『朝顔日記宿屋の段』を所望す、見台に寄りかけて桃に毛氈を掛けて置きたる小鐘を撥の云ふ『まるで八卦読みの如し』と座中笑ひを含めり、撥此の『宿屋』を弾すが如く旨かりき、曲中の人物の異なる毎に自身の姿勢を代へて演ずるに、宛然たる朝顔なり、宛然たる駒沢なり、所謂只呆然たるのみ、呂半肩は能く『縁の』『露の玉の間』冠私を中国以下、呂半『鎧布振る山』なれども感心せるは饒舌なりき、枝絵をして後稲舛の雑談に移り、中村氏余の日記を猿に読み聞かせたる、去月拾五日の余が稲舛の宿を訪ひたる時の誌を読む、余も過ぎて又皆々大笑せり、拾二時過皆帰り去れり、此の日にて彼等は皆先輩に従びて居たり、此れ或は他日皆稼に出る下稽古にあらざるか、中にも稲舛は一番能く似合ひて一個の好男子と見ゆる、惜しむらくは余の距離の皆を離れてありしが、故に、之れ自分の観察

をすすめ給ふ、陵王、遍洋取き事、此日も
屢々中村氏が陪舞をうきて、稚々冷評をホ
て大き十閉口せり、此ホ閉口せり、此ホ
浄瑠璃のなめホ癒ホ此ホ無き事ぞある
指言朝まはあり
此の午前お時過ぎ弥生公園の傍ホ
ホの旨ク行かず、歸途日吉町民文社の前中村氏ホ
先生氏生此ホ行き二時ホ
を伴ひまり家ホて下譜みをホます、姉歸ホ
指三日金曜日
此の此ホ過学院ホ学子課業事ホ之紀を歸
宅ます、午後家を出で敵岡町ホ行き谷内氏城訪
ふホホ此ホ行けども、氏文社の受取証を置まて未
まり、そまより表町ホ行き中村氏ホ小川寿子

ホ行く、最初て稲舟の三階棟四畳半四畳半三間の部屋を開まホ、此ホ老紳の声を聞き、次て奈良梅の増補産業盛衰鑑ホ載り面白ホホ此ホ
とをぶ下ホ行きて、稍々て大きホ岡が見ゆるホホて二階ホ上まり、次て稲舟
氏のまを手ホホ此ホ雅心ホホ
の『墨堤海棠』此ホ数之まて中々の出来、取ホ方ホ『此瞬』
瞬ホ紋ホホ此ホ、お傳の愁嘆、就中『鶴の喉』此ホ
ホホ此ホ面白ホホ此ホ
指宮土曜日
此の午郷ホ行きまホ
五時ホ早ホホ此ホ道ホホ此ホ
を訪ふホ不在ホホ此ホ、此ホ時談話ホ別まて福島氏
久、席ホ人ホ裏の階ホ登ホ行ホ此ホ、此ホ郎ホ学ホ小川寿子ホ行
ホホ此ホ面白ホホ此ホ
終まて楽屋ホ入ホ此ホ、此ホ楽屋ホ入ホ此ホ
ホホ此ホ面白ホホ此ホ

の其後年記見當れ喜樹翁と屋場屋之處」之ことを中々話からず次て小政の「道遠心筑紫琴」之ことそ物が面白からぬ故感服せぬ此のはなしある人傳へ云ふ傳通院の事長野ぞ、余れ若き頃やれ村氏の近處おえ非ぞるかと思ひたるそおかし猶次男すると全の心象え只傳通院の右方おかうとしての事か

なそ到底口氏の宅の近處ぞるそ信ずる自然ぞるまり之おて余れ所謂久若太夫の親友の關お隠るあらざ、ゆえず全の心お相解の感服ぬれ

る可らず、みるお氣之毒、故お余れ大對より來ぬり居そうと新宮せんぞ、長岸て

「傾城阿波鳴門」十郎兵衛屋敷之處」可成の半ばお申もん次て中ノ場「稲掛鐘」拵の奥州安達原三曽神樂文殿」例の歌祭文の話おは三日無事お旨おお、高砂尾上の松」町まで参ぬて行き中村氏ぬ沈か大事そ果まぬて「傳通院」の坂の所

みてありけり日家立一泊ぬ拾九日ぬ曜日朝半晴

ぬる年例お時喚中村氏ぬ今秋小川屋ぬて出逢ぬ所ぬ

ぬ別そ申屋ぬて歌舞伎座の歌舞伎見書物ぬ

世良ひ、各氏そ決ひたるお道ぬ炬燵ぬ掛ぬ神々談話ぬ書食そ暨也ぬそ話過歸宅ぬ家ぬて下湯そみぬぬ吸食後ぬて小川屋ぬ行之ぬ敢和て祖摩吉の「鷺娘」「鷺娘」習鑑ぬ屋之處ぬ熱心ぬ勉ぬ感服沈ぬ暗ぬ艶容女舞衣ぬ勝手ぬ屋之處ぬ先ぬ可成ぬて、我家り近ぬ座ぬ居ぬ名ぬ氣ぬ顔ぬ見ぬ事ぬ氣ぬ毒ぬと思ひ下ぬまぬて居ぬ名ぬ小、時ぬふと面お上げたる小恰ぬ他ぬ人ぬ一般ぬ不可思議ぬ顔ぬ為ぬれる所ぬみぬぬ全ぬ氣ぬ毒ぬ為ぬ事ぬ為ぬ

次で呂宋の『三井同堂』に出張
とそうん小政の加賀先代萩改『忠義之段』之を絶
倫の出来とや申さん就中『こま千松忠義』実に左も
なる（ママ）悲哀の情胸に迫るぞ猶声も
惜しげに別るる事ゆえ、之迄一部の
感嘆、次て奉安殿『鎌倉殿』御参詣の国
から『建礼門』と高を括って下お行き諸氏や諸流
の出来、就なるお動我等をして妙、呂宋のなる
歸朝せり、夜に入り友人少々共に来まり、拾時過

拾六日月曜日朝拳晴
此の朝より学校にお出で、母や同道を趣
向の朝七時半頃家を出ず
自動車にて学校の玄関に着し
小形の居室に入り大分疲れ
ゐる所へ課業事務之おみ
ゑ、寿都お村町と面了、島居ねと警、氷川の
傍を出で、市役所の前を通了島原町の
付け来了丁目の所お出で歸宅す、夕の荷物そ
島原、電車に乗換へ
たる、二階お抵抗居へ
拾八日水曜日朝拳晴
昨の車にて学校へ行く、日曜なれ別段の
事私久し前日の道より他の道お依らんと欲ね
ね番お出で、市役所前より横坂お

十一日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

十二日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

十三日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

十四日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

十五日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

十六日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

十七日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

十八日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

十九日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

二十日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

二十一日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

二十二日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

二十三日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

二十四日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

二十五日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

二十六日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

二十七日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

二十八日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

二十九日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

三十日 晴

午前十時頃より雨降り出し、午後に至りて益々降り募る。

島崎氏より
ばあ一人の集
我贈与さまも

と、余等え、其の事を盛んに勧めるなり。
論辯するのみの心なく、頻りに勧めるなり。
ゆえ、余の心中、頗る疑惑を生じ、
のむね、撫て、大安せり、余
みつまざり、ことを思ひ
り、余々得難からんことを、叫び、我形がら感嘆、指之、眺め
お日志ま持事すること
三日大曜の朝来面
暫く学院ゟ出ずる例
用の形之、一度ゟ見るのみ、うき、家ゟ別ゟ
可ゟもありき、度ゟ
右手ゟ話る婦の白ふ、おん身等の歌て節わ
形之ゟて、只叫ぶのみ
ニするを指形り、ゟて、
ぎ尽ゟて寝ゟ

[illegible]行く、洛子え煩[illegible]
[illegible]閲覧す、[illegible]人の話[illegible]知[illegible]
の『義経腰越状』『泉三郎』『[illegible]
管原[illegible]屋敷之段』[illegible]
[illegible]演ずる所に、[illegible]
[illegible]
[illegible]

後五時歸宅
途に就き夫より
就寝す

事ある心の慎みのみぶかくもあるべし、仁理学ぶ事感情
あり人の同感深く喜ぶべき事なり、益々切磋琢磨して学
の事が出来思ひ当りぬれば
けて夢の法ぐり

旨金曜日

此日より別段の事なく学業に
出かける事も学の如く
七日土曜日 朝来晴天
此日朝午後より持ち
本郷へ行き松永氏
なれも、此度文子
の若君が誕生
是だ宜しく既に
平家女護島
談国町
つと聞きたが故
つて行
律あって
の三拾間堂棟木由来
おりき三人の
限りなし云々』
や申さん
陣屋が
挨拶
扨時過ぎ
八日々曜日
此日終日家
嵯峨氏所用の牛丹
歸宅後小村氏
が復讐
出て、
つと聞きたが故
律あって
の三拾間堂棟木由来
おりき三人の
限りなし云々』
や申さん
陣屋が
挨拶
扨時過ぎ
八日々曜日
此日終日家

後五時歸宅
途に就き夫より
就寝す

事ある心の慎みのみぶかくもあるべし、仁理学ぶ事感情
あり人の同感深く喜ぶべき事なり、益々切磋琢磨して学
の事が出来思ひ当りぬれば
けて夢の法ぐり

旨金曜日

此日より別段の事なく学業に
出かける事も学の如く
七日土曜日 朝来晴天
此日朝午後より持ち
本郷へ行き松永氏
なれも、此度文子
の若君が誕生
是だ宜しく既に
平家女護島
談国町

ゟ之座の性質付けあれども今て日頃英…
九日月曜日　雨天
此日学院より帰りて例の如く、宮本に帰りて
下宿にてあせり、彼れより許可にて吉川
座に行く、初めに奈良梅の「明烏夢泡雪」山名屋之段」
只御気の毒に存じ申すり、次に呂昇の「恋娘昔八丈」鈴
森之段」熱心の勝のぬるは、階代、傾聴の所にて
寂然たるお聴なりけり、傍に在る書生、適評
と云へり、其の両親にいかまにぞ嘆息と言ひしに断
腸の思ひあり、次に小政の「天網島時雨炬燵」紙屋内
之段」此き絶倫の曲、其技術に於て、真に迫る
我之神様と呼びし、其の泣かるるやんせしの場
に至りて、「階子」「真実の義太夫」と呼びたり
おさんの告別の言に至りては、余も涙を揮ひたり
妙技なり。初めに稲丸の「近頃河原達引」堀

川之段」始め余階子にて語りて曰く、小政の技神に入る稲
丸之其が修行、若者非常の熱心を以て演ずるに
非ざれば、聴衆の好みに投ずるを得難からんと、故
に余は其の壇に上るや「成可く熱心に聴きこ」として余の
大声は大に戒むる所なりしなり、
梅川お鐘の世に連ちて」云々の所より歌ひ出でたる「鳥部山」
に艶麗なる類なし、与次郎の言葉に余情は分からざりせ
ず、母や「園の傳兵衛」はて下にて「涙に涙流しぬる」云々の所まで
にて曲中の人物を活動せしめ、聴衆をして涙
に咽ばしめ、猿廻しの儀也の歌にて艶曲を競ひ
余情充分にて、面を結ぶなきに御手際に感心せず
るを得ざりしあるの心地せり、此所は妙と絶えや申さん
帰りて小隠に遊びし、当夜の小政及び稲丸の技に就き
講じさま出来なり、余は彼等に「今夜の所
近て特別に能く出来たるなり」と云ひ、末に口にて稲

拝みて鏡拝み見よ、当社の出来はほめてやり
たり。両替町にて帰る、諸氏日本の筆軸の浄
瑠璃を栄達の日の目を見たる心もちのたりし
也。家内西又の技の非凡なるにも益て確かに得たり

拾日 月曜 朝来雨

如く学院に出づる例の如く家に帰りて下
読みなど帖付等なしなせり

拾一日 火曜

如く学院に出づ、帰りて下読みなどなせり
夜に入り諸氏と相伴ふて某店西京亭に行く
初めて小政の「花雲...倉曙」宗五郎住家の段」抜掌等を
きく可く切りの稲拝みて「嬢花形…鳥台」坂部鉄の段
上出来、一百三拾六地獄と云ふべし、其他も余情
拝合ありて語らるるに感嘆す、家に帰りぬるなり

相拝過なりき

拾二日 水曜

如く学院に出づる例の如く家に帰りて下読み等なせり
に帖付けに従事す、夜に入り諸氏と共に某々亭
直ちに行く、崇君に行逢ふ、同氏初、稲拝の白蓮天衛道
海雲作住家の段」中々よろし、随分大きく出来たりしも
思ふ、次の小政の「管原伝授手習鑑」寺子屋の段」余りに大きく
なりて情が込もらず感服なりかたし。出来なりき
崇君より本年三冊ありし拾八冊を求めたり、よって余は
手より之を借り候、妹背山の三冊なりき

拾三日 金曜日

如く学院に出づる例の如く下読みなどなせり
前田改め諸氏来たり、ですけいど一同来たるが
たり午後四時頃去りし、同人に種々論ずる所ある
為、子より大きく其の芸人ならぬ不行跡の現況

余が家ニ帰らんとする時ニ帰せんとす 一時ニ大雨降りき

拾七日火曜日
本日も学院ニ出づる事例の如くなり 近々試験
ニ別ニ存ニ居たるもの 有識(?)の諸口ニ
衝いて出て来るも少しも驚かずして 其を
可笑ぶ事の一なり

拾八日水曜日
学院ニ出づ 別ニ差たる事もなかりき 只
き 此ニ於て二時前家を発し二拾間許の寺より出来

拾九日木曜日
此日も学院ニ出づ 家ニ帰りて又下読す 外ニ
少しもなせり 暫く地質学の試験を受く

二拾日金曜日
此日も学院ニ出づる例の如し 家も自習せし
てそれに説等を読めり

二拾一日土曜日

此日は家ニ在りて下読みなどし 小説などを読む

二拾二日日曜日
此日は本郷ニ行きて豊川氏を訪ひ 於て同氏ニ逢ひ
早川氏訪ひて 藤崎氏ニ参り 牛肉の餞ニ
付き 成賀ニ出で 同氏日ニ親ニ参り 少しも遠慮なく云ひ
たりしなど 氏と共ニ神田ニ出で 又富士町ニて
別れて 本屋ニて近松著作二 及び雛物を求め
求めて帰宅せり

二拾三日月曜日
此日も学院ニ出づ 帰宅後 下読みなどなせり
此日は庭に於て全く庭などを掃除して 停
頑の真面目なからしめんとするが故ニ余も安
く思ひて下読みなどもなせり 此点ニ向ひても余
ハ氏ニ深謝せざるを得ざることなり

教町生の事件よ通当の家族及関係者の者共よ訪ね話合ひまする積りに
二拾四日 火曜日 晴
学士院よ出ずる
理財の日新 漢字
下読みよ忙しかりました
二拾六日 木曜日
学士院よ出ず 講義
心理学下読みよ忙しかりました
二拾七日 金曜日
学士院よ出ずる
[illegible]

[illegible] 他の演芸者を訪ひまする 休みの日なり
島崎府の二代目相伴にて近郊散歩す
畑に陽炎咲乱れ 桃櫻 [illegible] 色彩る
霞や山の裾まで 田園の向ふ
漂渺たる 菜の花の黄なる 小川の流れ
[illegible] 一面の菜の花 [illegible]
[illegible] 殿堂 [illegible] 松ヶ枝小掛る 梅 [illegible]
[illegible] 蝶や [illegible] 其 [illegible]
[illegible] 春の日永色 [illegible]
[illegible] 蝶の一双 [illegible] 戯る
[illegible] 帰る [illegible] 学院
[illegible] 島 [illegible] 平家女護島 [illegible] 読む 俊寛
中 [illegible] 鬼界の [illegible] 描けり 就
[illegible] 暮 [illegible] 自雪の積る [illegible] 冬 [illegible] 妻屋の [illegible]
[illegible] 血 [illegible] 句 [illegible] 乙 [illegible] 清盛の執
[illegible] 勇健 [illegible] 晩食 [illegible] 時過
講堂 [illegible] 大雪 [illegible]

二拾日土曜日
晴
午後より雑司ヶ谷なる故小野義一氏の葬儀に行き、
其帰途、銀行に行く、金四円
引出す、帰宅後、近松の『雪花吹雪』外二三、
中『増補女訓抄』『鳥帽子折』外二三、
の校読あり

二拾一日日曜日
晴
朝の内小説執筆
午後、神楽坂に行き、河岸にて清酒七時頃
若井に至り、最初に『伊賀越道中双六』沼津の段』
中村氏等の語を回す、彼を知らず大生の弟子の
ごとく見ゆ、他の動作の怪奇なる類するあるなり』
『ハーリヤ』インフリューエンスの為め衛生
教育自覚の為め大いに教育者に望む』
大学の生徒が其教師を

はかやう　次に大きの箱根驗徒討『暫屋敷之段』さへづ
可成く、ぬき今ぬき法三郎あらた良からん　みて云へ手負
の言葉ぬきすの成の母上日すりき次て箱拍鐘拍の
『三重間臺』様子中来夫郎住居段』
手の丹お清ぬ法ぬ云ふり、先づ歸る
前後感嘆の声止ぬまぐりき、終ての本書了
わ艶ぬ成ぬ中ぬ、そづ近頃の出来ぬりき、
駒之助の『八陣守護城書割』塾中の枝　鮭之人
お江ぬめふり次に『曽我狩場』大切の『九寸揃様老問答』
質屋段』言葉ぬの鮭ぬ人形ぬそ、久作の言葉ぬまぬず絶
倫の出来　手ぬ見ぬず、『完然たる久作』叫び人驚
まて実ぬ見治ぬる者ヲ
のヲ数七、ぬ々治手ぬかつ
吐ぬぬ実等の喝ぬ来ぬ
逐小実ぬま小雷同ぬ
や言葉ぬ生ぬ
ぬ　文反古』買ひ求め
ぬ道小京ぬ勇小等ぬ
慢す　お対面ぬ多ぬ歸ぬ

三拾日　月曜日

此日午御小行ぬ豊打ぬ、歸途午屋小立
寄り歌学全書第弐編ぬ
多ぬ歸ぬそ、小説ぬ
三拾一日　火曜ぬ

晴ぬ朝八時過ぬ長ぬ郎ぬ
きぬう、そぬ昌ぬ初ぬ、岡山、何ぬ
賀ぬ町、第町大久保ぬ
等ぬ生計ぬ
ぬつぬ家ぬ
ぬつぬ丁寧小頂午
ぬ言ぬぬ、酔ぬ小言葉ぬ
つぬ、所ぬ後ぬて、奥様ぬ

するものあり、此の点丈に向つて大に開けせり

又所に依りては、牛肉店の看板さへ知らずにして

（聞）貴君は何か御用なりやと云はれ、一丁計りも隔たる事も

云はれあり、斯々定めし思ひし事ありかなと云ひて

云ふ、其日隣の近藤の家で財産差押に逢ひたり

ら事なれども、其の家財今暫く借りて置きし（近）

云ひて、高君伊勢三郎に諸物を預けて置きし 近

鮭之にる之 抜けて 名前の代り居る其の事なれ

またも之が止めに致したり、夜に入り、動坂町牛

肉店へ移転せり、此の家にて間数二階

共四間台所あり、広く店も広く、好

かせて看板なりき、「鎧」書きて「神戸牛肉販売店」

と云ふの七字か大字にて横に書き、中央に商麦

我付け前陸軍御用御用達と八字が横に書きたり

縫ひに馬場商店の四字が縦に書けり 中々見事

なりき

四月一日水曜日 朝来晴天

些る又掛金が集めに回りたり、帰りてもより

より且つ種々来る三日開業の準備に忙がはしかりき

中村氏金を借るに正金銀行の出来事が以てす

草狩の免職の事も其の一つなりき、小泉氏へ行きて

又好部屋なら心思ひ… 許さし 雑言

が人事なり、共に之を悲しむ

二日木曜日

昔年…出でて有楽町に行き、金三円程要

なり幸屋にて近松の「千本」「紅葉集」「家」なぜ

なぜ…福島氏が…帰宅大

横町の加藤といふ靴屋にて靴壱足買はれたり

足袋…此の日又江本の支店開業の為め朱口の

諸方に出世し…家の其の一つ見ゆ、家

いつの手助けに来たり居りし

小歸ることゝなり、

散步やと思ひ家を出でゝ
稲荷が社の辺まで来ぬ頃の通りかゝり
直なれど霞岡城址虎の門外まで琴を手に行く事も稀なるが故か
袋の可哀ありてや最初改鶴の「姫小松子日遊」(俊寛)「嚢
語之段」の文も今少し腹かゝる
の「義経千本桜」(鮨屋之段)「奥州安達原」(袖萩祭文之段)「今
え弥生の「三合換」(軍記陣屋之段)「奥州安達原」(袖萩祭文之段)「今
少し軽き行かずや次へ一連の特調
之まで大方あつまりとやらまでを思ふ次へ文
ありて変ろふ感服致せり次へ小文の「夕霧」(廓文章
吉田屋之段)「何時聞いても」(浦里之段)「陸奥」(袖萩祭文之段)「今
と手ごゝろ好きものゝ
た春良梅の「丈事」(義経千本桜)「鮨屋之段」「奥州安達原」(袖萩祭文之段)「今
次へ吾妻の「日高雅樂」(鶴寿千歳)「艶曲」(老の波)「人
なりて感ふ堪にぞらまでを
切れ稲荷

鐘拍の「日蓮上人御法海」(勧進帳)「絶法の出来」お傳の
愁嘆あれ我思ふまゝ「落涙せり」勧作の言葉「寂
凄の勢演ずれば得て如何
喜悦情外にて元より
そより金茶成忘れ
諸子の枝をもて全く慰む
少改吾妻、稲荷の三大ふ何つて丈、全の感謝の意
一管弄きれ貰ふも「政鶴」の語り居る内ふ「政鶴」廓ト
我通りて、全を面白合せるかで、全の廓ト
て、全の転生ならば事ふ
お麻布の福槌が持ち
晩わざらず先ふ毎晩後ふ故ふ今
ふ」と云ひ且「転生の事」
日又「皆」改「」ふ始めて相知
ふ日ふり「改」「彼の日全ふ
離ぞわて書見ふ

此人

容色美麗ならず 気品格あり 且何處にか愛敬あり 云はば益も容儀の福々しきが故ならんか

彼一句言葉かはす度毎に人の顔を見る事少からぬ

まりしに暫時前に、余の傍に来りて曰く「弥兵衛と云ふ人来たり、御面会致したき由の事」取り次ぎ、余は直ちに書物を擱き、表の方の室に行くに、年頃は三十三四位なる可きに、髪は切りて後ろに結び、肥り羽織に紋付きにて端然たるは、色少しく浅黒き身の丈五尺なりき、余は即ちに一礼し、種々の談話なしたるに、其の時彼は、人形町通の末廣に掛け居る由を言へり。又曰く「東京の人は義太夫には全くの素人多きに、好みは無きなれども無暗に楽屋迄も笑聲を揚げ所謂ほむるが故なり云々」余は此の時隨分失敬なる事を言ふ人かなと思ひ居たるが、今ては彼の言の実なる事確め得たり。余も彼の言葉の土佐訛もなきところに一驚を喫す。「子等は大坂に居るなるか、又おや」と問ふに、彼は「否、私共は土佐より東京に来りたるなり」と答へ、更に話して、余は其

眼を見て開きて見詰るの癖あり 之れ余の彼の事を記する一原因なり

の言葉の土佐弁みざるを褒めたり。彼曰く「時々大阪に居りても、土佐の人が来て居りて「お前ハやつぱり」とかいうつかり口に出るなど云はるゝに一驚を喫する事あり」と云々。余は尤もなりと思ひたり。五時頃去りし。二以上にて余の彼を知りたる來歴なり。

寄席より出で車にて帰宅す。十一時頃就眠

四日 土曜 朝来晴

朝より店に出たり。居る内陸軍会計平岡と云ふ人来たり、二階にて種々相談する様子なりき、店の番頭なども引き出されたり。余の店へ出でし笈蔵が引き見たり。其相変らず苦しき物にやありしが、家を持たざるを云ふ事尚も、なりて身を追はれけるに、余は斯く思へり、家を借るの他ならず、又程あらずと思ふに、一旦其の家の主なり。然るに佳人を追ふには等しき方法

さう就眠せそて一時頃より
五日々曜日朝来晴天
昨日朝早起して福島氏へ訪ふ書
午後上野へ花見ニ行く
衣見ニ行之所ニ人
食の勢ひ
花咲き乱れそこ
下の野菜ニて
ろか我われ
ひ合ふ
おニ舞ひ
行主墓ニ詣で
我草ニ行之
業屋ニて玉子
島ニ行之
立売ニ校の
船競漕

問の前より
まろ上野
代ニ
若ニ
通ニて
晩食す
西ニ
が聞そ
君ニ
六助住家ニ
『金閣二邑金二段』
とえ言ひ
呂ニ
夜討
事ニ

の門や乳虫の山』おそ中々の出来、実体此の人
又平素の不勉口拙る故、感服も甚と、今秋の様
おいつの間とそ〳〵と早や大満足の至り取り
旦子の手製の上みの品『無到底筆紙』
次に小政の集写朝顔日『キヤラ〳〵』
おり『雪駄のしめ』なる『笑わせる』
薬屋ふ行き『陳』なる『笑わせる』
出来秋日の出る『笑わせる』
至急命取り出『笑わせる』
たり鐘撞堂なり『笑わせる』
うおもたのかと思ひて出でし
屋が狭き故、邪魔と思ひて出でし
ますふ稲荷お詣り『笑わせる』
やりたり『笑わせる』
まをさ云つり子曰ふ『笑わせる』

まくわり』も実わ微笑をして『のうのうおわ
まわん』そひろふ又笑ひて『之取ふ屋ふ蒲
屋ふ行きまわんかから』して其の実ふ午ふて
ふもうり即ち別れまして席ふ着ます次に客華
の増補百原松屋整『中の妙技』
と思ふ処見る切ふわ井車稲荷鐘撞の『繪
天大功記』『意味深殿』傍らお一書生あり叫人で曰ふ
ら先きでわ』でおく『隣』
りわ治神おかふ、実わ
ち、大声ふ稲荷ふ
で障子ふ
て狭き日の『其の頃』
きそて、近年の
叫びぬい、狐き
発やず、扨当秋わ

物を感ずる所あり、相変らず良く出掛けて
ござそうろう、車まで。
六日 月曜日 朝早く雲天午後雨
昨日午前拾時前家政女
小路小出たる頃より微雨降り出で、浅路町小出たる頃
々たる春雨の顔小当
り猶進んで駿河台小
ゆえ雨ある降之降り来そうろう、故小江木小依り宮島
て取り上指二可を置きて其の郵送
志、雨の大分止みおかで左エ門町小行き稲
垣の家小寄小参る小容易小知まで
ござ申ねそうろう、中小入
氣即ち足小疃物出まて
なんとそうろう所故小長之談話の出来
ず漸々前夜の出来
彼の書生の事を

話おて一笑柄な作りおり、其時滝氏曰ふ先日或る書生
まんが、私の所にお手ところへ
家の不首尾な起こる、親御
大分の御不足、申をまたる故、御望之通
らぬ即謹慎を申て然る可らん
かとの所、先日芸業成小私共の出勤致せる時、其人
の御手伝第一、尚々見えぞ、其中お前の
大分評判悪之、改之叱ぐ二三枚の落るを
小彼寄席の持主小住
云へど、今ぶ勉強を語
此事申進ぜる
人小頼み、御言葉之重
の田舎人
みえおらず、只悪い迄

云ひたれども辞して出しが、雨少く降り居りし
事なれど傘借るんと云ひ置きたれども雨の
そらし面に掛るの心地よろしかりし 福井町
に出で泉橋通りを横切り和泉橋際の
岡埜にて菓子購買し、神保町辺まで
たるに雨降り出したれば同所より車にて帰
る、家に入りて富市代書き居たり、余も執筆
る積なりき 夜に入り雨甚だしく、富市代一泊
せり

七日火曜日晴る

此日朝七時寝起き車にて学院に出づ、此日を
明日の課業の下読の場所を聞きて、帰る婦
人で富市代にて横浜に帰り居りたり 次に余
も明日の下読を終へたり

八日水曜日 朝来晴天

此日学院に出づる事明日の如し、家に帰りて下読みせ
しなりき、啓君と共に琴平に行き、聴衆可成の多
数、最初は父上の『勢州鈴鹿合戦 平治佳家之段』中々巧みかりし
も、が、少々御話なから、活気が少なき歌なし 次に隆日子の
『鶴亀』『鐘馗』『鉢の木』『島居又助住家之段』可成能く出来たり『天の岩戸』
曜もほんへがぜんぶと云ふて又二行の所ありて大分臆病
見えたり 次に呂昇の『御所桜堀川夜討 弁慶上使之段』相変らず
熱心の程感嘆の至りなり『三津の川や乳母の山』など
少しく大分に婉曲なりき、次に小楽の『玉藻前旭袂 道
春殿』これまた中々能く出来たり『雌鶏離れた嶋』『江下
胸を流しの三津川』『近軽々の中に言ふべからざる妙味
ありき、余[…]演出[…]得すて妙なりき
次に稲葉錦の『奥州安達原 袖萩祭文之段』
能く能く出来ざりき、然るに例の大きな自己の身』
江下、身を雪踏島の『書置』[…]艶ある声なりき

伸ちん、中ノ町下ル中ノ町下ル、御幸ノ通ル
ら隆氏の腫物を診察まわりて、御幸ノ通ル
ろ田みろく、二子、なおかつ
加ろわ「小政の」蟹雑炊作法、萩藩義公段」妙技霊妙
真ふ迫ろ、後ふかる。
三手竹二弐誉て条へなる。
るが故ふいて、其の甘みの
ら真ふ迫ろ其ら情正趙「射撃を、妙絶かろ」
少ら年わ今ふ改文ふ付はつて言ふんを論ふる。
ふ云ふかろ、御ふよ
故ふ改宮の手頃ふて、歯世ふ入ふかるぐ去
ろるが故ふ云ふて居り旦女性
ふ入ふ経緯の
声ふ比ふまぐ真の
ふのみ、例のお末の業ふ
も清ふ来ふ迄た、妙絶。終ろの「望ふ国の

礎ふ以下の慈喰、飲ろの事ふ能わぎりき、切めろ奇絶の技！車ふて帰
宅す

九日木曜日朝来晴
昨日朝ろう学院ふ出ず「来まろわや、ろおず」氏ふ五中代ふを聖書論海
理心理の三学ふ教ふらる信ふ此の日て、論理の時ふ
ろ氏得意ふ然ふ帰内法の例ふ演繹手法ふ引き
て、頭々を分ぜらるを一時馬ふ喫ふり出ふ、終ろ
ふて少々気ふ毒ふかろたり、徒歩帰宅ふり夜
ふ入ろ手紙
拾日金曜日朝来好天気
昨朝学院ふ出で、奥野氏ふ同盟文学会の切
符ふ買ふ事ふ依ふ、家ふ帰ろ、帰ろ家
ふて、絶対的悲快ふの訃音の至ふ待ろる者あ

り……啓君余ニ語ル大変ガ起リタリト云ヒ、而シテ
余ハ手ノ所ノ一ノ端ヲ書ミテ、其ノ悲哀ノ
我ガ親愛スル福富孝季君モ昨朝四時永
眠セリト書中別ニ前ニテ夜爭ヒ其由ヲ
顕ハサズ、只々変死ト云ヒ啓君ノ余ニ語
ル所ト符合シ、涙ヲ抱
テ帳然タル事頃久

申天王寺ヘ行き給ひて、哀まり給ふ音血涙
を、悲しき祈禱を、此の
ぜられぬ、未葬昔年以
の兄なる師なり頼まん
所まで見届かんと思ひ定め、翌日まで、至誠天
見るまゝ、昨日まで
一種の墓標のみ、記
昔人の心のまゝ
與謝氏教え人間の
形を変へ形ん其精神
期のあるべき
墓前ヘ躊躇する
素の壮快の面影
前戒退き車
頃ぬうまゝ、天王寺
ひめ、古番町ヘ帰
同人ら帰り

十月二日　宮松再　呂幸『陣屋女房』鹿の子
の『狩』亀し　改の『夕霧』東代玉
の『仁原』佐々木隠家之段　稲掛
の『恋娘』鈴木村　と『留』き
廿九日　此日休　吉丸　二呂幸
の『恋女房』　鹿の子
の『江の近江屋』盛綱陣屋之段　東代玉
『すのまごでんだ』のらくや　稲掛の『三』
廿日　雨天　再び代松を決る、
東代玉　盛綱の錦
七ツ上梅ケ枝舞踊　小改
廿一日　休
廿二日　吉丸　二呂幸
青丁書　宮松　代玉
鹿のこ改『到』
東代玉の『碇定後之段』稲掛　安達三を

閏十月
廿六日　て新柳座
弥生丹の『松王屋敷』呂幸の三勝両
屋』鹿の子
の『安達三』東代玉
『安達三』稲掛の先代萩御
廿二日　休日
廿三日　休日　吉丸　二呂幸
松緑番』鹿の子
の『艫舵』　稲掛
廿四日　休日　吉丸　二呂幸の
『岸姫』　鹿の子
の『岸姫』呂幸の『御所』稲掛の
廿九日　休日　吉丸　二呂幸の日吉丸　鹿の子
の『寺子屋』稲掛の『忠臣蔵』
三十日　弥生丹の『三拾三間堂』呂幸の『岸姫』

『忠臣蔵』
東代玉の『盛綱陣屋之段』

六月一日小川亭ヘ『稲掛』寛の子『安達三』東代『玉三』を招キ（ケ）

『稲掛』『先代萩』

仝　五日　仝所、東代玉の『花川戸』稲『吉原』

仝　六日　仝　寛の子『先分我』東代『桶屋』

仝　八日　仝呂幸『安達三』寛の子『腰越状』東代『伊賀越』稲『堀川』

仝七日仝呂幸『鉢木』寛の『堀川』『まゝ』稲『大十』

仝　指日、仝祖の播州屋敷『孤の三拾四孝』呂幸『吾九』寛の子

『大功記十』稲の『伊賀越』

仝指三日、呂幸『増補忠八』寛の子『名寄』東代の『重太郎』稲『三時の羊』

仝指四日寛の『重太郎』東代の『佐野屋敷』稲『三時の羊』『酒屋』

仝指七日菖蒲参ル呂『酒屋』『桶屋』東代の『阿漕』稲の『朝顔日記』

仝指八日　仝東代『帯屋』稲『蝶八』

仝指九日　仝東代の『刈萱』稲『勘作』

仝二拾日仝　稲『大功記』

仝三日仝東代『木引』後『稲』『鉢木』、

仝七日仝指『御所』東代『傾城』稲『堀川』、

仝廿八日仝鶴蝶の『阿漕』東代『傾城』稲の『玉三』

仝七月九日吹抜亭『朝顔』『若造の初手柄数』『朝、若造』『先代萩』

八月二拾四日小川亭『稲』『三人三間壺』

仝二十九日宮松亭『呂幸』『玉三』『三人三間壺』『東玉の『妻雪』『浮』『陣』『朝顔』

仝三十日　仝、祖『座敷切』『仮名手』『稲』『三人三間壺』

仝三十一日　仝、祖『座敷切』『仮名手』『稲』『勝』

『稲玉』『車曳』『稲掛』『勘平切腹』『大切』『力』『七崎』『祝』『仝』『愛』

廿二ヶ所、福、由良、作、平右衛門宮、力、稲『サキ坂』鐘、『七手祝』

指月二春、小川亭『呂幸』『仮名手』

仝二拾九日仝　『仮名手』『三人三間壺』小『政合戦』『天一屋敷』稲『蝶八』

拾一月一日 ○曜日 朝来晴天暖気

我種々の事情と性来の怠惰とに依りて久しく日記の筆を絶ち
為、一度大に胸に浮ぶ事一々記憶より捨り去るに忍びず書き残
けんのとそ思ひつゝ、中々に前後する事多きうえ、且つ必然の勢
ひもあるべく、其のうち事も、暇も、見て其の大要を摘んでと、今ふ
今月今日よりの出来事、我ふ当府ふ易簀をうる当日より、そ
の日々我兄辰猪ふ米国費府ふ客舎にて夢ふ入らず、追慕
をもる事と今四年昨今の如く、魂魄事として倦む時なく、
の恨憾をそゝぐや、空ふ、三年の後ふ国会開すべき旨を知るに、空を仰ぎ嘆
き、表ふ出、窓ふよりて、実ふや東洋未曾有の大典も
我家人ふも、一種の悲哀ふ伴ふて敢ふ歓ぶ色なく、ともすれば
て第二とふ云へる国勢の発展ふ関する記憶とふ
呼ふ起す者ありて、前地月二拾日ふ過ぎ拾頃より豊川
行きつゝふ岩崎代、云へる武器売買りそる代、持帰り

ひたく其代高も二百に近きと語られき、さても！辰猪の
弟と云ふべし、我如き鈍き者も、無下に人にさげすまれざるも
偏に亡兄の賜物ぞと、涙に感謝の意を湛へたりし事も度々
なりけるに、若くて又、亡兄の遺財に、家人の饑寒こそを救はれたる、其
恵、佗愚その身え恩わすまじ（郎の誕生日）三時過、墓に詣で、花を供へ涙
を手向の水に注ぎて、ひたすらも其恩を謝し、猶我が未来を
恵み給はんと祈りなん。亡兄菊江、亡姪、桜枝の墓にも詣でたり、上
野を歩み家に帰りぬれば夕陽西山に傾く頃なりける（福富
君並に同丈人の墓前にも賽したり）
此日元朝より『春涯家漫筆』を讀み二時過ぎ近くに讀み終り家
を出で、真砂町の矢田にて、都の花第七拾号を買ひ豊川に行
きけるに、於安野寄りけり、都の花を讀んで待つ事少時、於安帰
り来、談話数次、金六円（但し家賃の前金）を受取りて、同家を出で池
の端より、上野の山に入り谷中墓地に行き、亡兄の墓を一見して、それより
三河屋に行き、花を持せて再び墓地に来り、墓前に額付く事

少時、又茶屋に帰りて、花代并に茶の料三拾銭を置き、北行して福
富君の墓を訪ふに、秋風、落葉を吹いて、野方に荒る一墓に
呼ぶ虫の声哀れなりける、去りて島田郎等の墓を見、踏み来
し方に取り池端に出づるに、夕陽は光を送りて、銀の露を止め
し蓮葉も今は、枯葉となりて金風になるも栄華其の花や
鴨の一羽二羽、露鳥の餌あさるなど、又趣ありげなりける、五時前
家に帰着し、夜に入りて通り散歩し、春木町の服部の店に立依るに
松吉も見え、談話少時、『三日大年』求めて帰る夜に入りて都の花讀
み終

拾一月二日　月曜日　天氣晴朗　朝は寒く、午後は至極の暖氣
此日は朝拾時頃寝起、烟草屋の母来り居りぬ、顔を洗ひ終る
時分に江橋氏来たり談話少時氏去る、今は飯を食す、午後
は都の花の見残しなどを見て、洋服など取り出だしおきて見たり
りする内に、二時頃になりて、花田氏来り、前夜戸川氏来りて妻
戀の日氏宅迄来て呉れよと云ひたる由、云ふ、即ち同氏と共に家を

三日 火曜日 天長節 天氣宜し

昨日朝豊川を試ぶ積りなりしが、床の内にて思案するに昨夜て福澤氏の筵に連らなりたるまゝにて今朝又定めて疲れ居らんと、是に於てこの、八時過迄睡を貪り、寝起後直に朝食を、衣物着換を家を出で、真砂町のぱん屋にて食麵麭を買ひ求めんと、それは止めにして、それより直行にて吾妻橋を渡り、向島小梅田川氏方に至る、小梅田川両氏留守にて、家内にて打ち合せ通り、野崎のお成道上野寄の路を経、廣徳寺前より直行にて吾妻橋に至る、橋の袂にて島崎氏と出逢ふ、島崎氏左す、今かゝる先きゝもやと、左側の人道を通行せしに指數間、赤田氏向側より見て彼所にて見逢せしなり、其人は宇やと、二の目むに二の眼鏡右側に注ぐ所、如何見る歌夢君、尾端折り脚絆、足の御出立にて視像を真一更宇に前面に打連ぎて、歩みを来たり、即ち相近き一通りの挨拶すんで、橋を渡り、北行す、言問の所迄至りて共立学校の端艇舎あり、大江悠々と流れ、杜鳥面白くて、心の

事なく向日午前指時頃より吾妻橋に近端書にて申遣はし、其まゝ「はもまと」の輪講を取り掛り、第一番に読み次て赤田氏、次に戸川氏、読みたり、解し難き所三四箇所ありけり、五時頃帰宅、直ちに晩食をし、中島氏を訪ひ、ろぶ、でん、うんぬるを」を讀む、日章を出まして終る、松永氏に逢ひ、昨日の答をやり、新聞を見、又震災地方の事ども、あり、中に義太夫流行の事もあり、松永氏大に慨歎し及び、種々雑話末、梅の御馳走になり、夫より、太田氏外数名の人寄りたるに、家に帰る、松永にて打聞を借とられをし、それまで読む、紅葉の紅白毒饅頭半分(頭)鋭き筆鋒にて、大分仕込をの寫を検、隨分見識にあり、と思ふ

壘埃土掃除に逢ひぬ、七草の枯野見んとの評議一決ス堤
に曲り、あらぬ道にさまよひかへれど、さまで稍え刈ずして、其の
黄色色ほせる穂にかけつらねたる竹ざはかざる間に、秋の田の面
新道が建てるさま、まさ紅塵万丈の中にありとは我等に
も中々難快げ興ふかり、道とさまよひ小曲り、野川に
むき居る魚の子が見えて、手桁打て、おろさひ、放読高話
稲村の小鳥が驚きて、稍々、花屋敷の裏手に出て、戸川氏
其の傍の家にて其所並也確め、稍く行つきぬ、外にて二三の
碑に名句のきざみあるが見え、又春百々秋火花不断 千蕙
三々の柱掛など読みおめ、門内に入り込みさまよぐの名
記したる札打おける、萩、菖白、尾花なども見て、名方に進む菊
数種年けが盛を咲きそろひたるありけり 池なる亭なるに行け
で梅の姿花、がれ林にけれど さきそろひたるあり、是て返り
咲きとのや云へる不吉なる事にやと、云ひあへりたるに、園丁
まちとておえ年に二度づゝさける、桜ありと、成程、さもそうず

返り咲きでえとてもさうろまくえ咲揃ふまいと皆々笑ひ
ぬ、小さき石橋の上に立ちて見渡せど、蓮が枯葉の室尾に
鳴るも面白く、両岸のすゝき陰に、ひるおへうて、招くが如
きも興あり、橋の渡詰ぎ思ひ様と云へるあり、小え、何れすし
の脚本りうづめたる所とか 碑文にあるべし、甚
地種る碑文、古本なども見物なれ、是に行て 行厨が使ふ
事に決え、まんなかるの部屋にならび、なおに上り込み、塩
丹張りまぜのおゝくが見える、西がるの部屋に佛壇の如き
ちあり、中に高さ大凡七八寸位の像 安置あり、其の後に楼
笠あり、三人共にええ芭蕉翁の像ならんと決めぬ、えの
部室にて 園丁の持て来たる菓子が食べ茶が喫
ミ、あくる所に一周る位ひ居ぬれど 随分、宜しからん所
の話出で、備目が放つて庭前を見るに今や秋風にすす
おきの草の葉そよぐ、一面の草原蕭涼の内に一種
の趣きがそこれみるも、いみじ とて、見入りぬ、いざ

さらで、食事せんとて、島崎氏を年当、春田氏の二氏、外
愛を聞きて、握足飯取寄せ、笑わ麹麩ぉ、梅すぬつ
すて食ぉ、之き見流飛りと云ふ、昼すも自由みき
の処ろの証方思ぉりとの海も出で、時移ら之青ぉ笑、
ひぉ宿を出、稍之飯も終り、少時休息の後、ぃざ打立さん
とするぉ戸川氏外ぉ上ぉ、島崎氏門ぉ■そそ言葉餞
おるやと、工言ふ便所おて一句読まわで取ぉぉとる多
あり之きそ、ぃき句と云ふも、矣等もてて面白き事ぉ
りと、氏是ぉ取て笑ふて曰くさるさとぉ本手わぉし
さき一時の思ひ出きぉりとも、皆さ抱腹せりさの前後
ぉ当り人曰くり好りまり、二人ぉ洋服三人ぉ是
服着ぉ方ぅ、見受る所事ぉもの也ぉ取りけり、笑
代と指出すだけ人是ぉまで入田甫道
みぉでおる島崎氏云ぉ、我ぉ寺を餞所ぉ人ぉ見ぉ
ぉ学教学校出身ぉ人とぉ思ぉまじ、わど、我ぉまもた

ぉらと日ぶぉ、再び堤ぉ出で、ぉ変らず競走ぉ形ぉ
鐘ぉ淋ぉ結績會社を見、綾瀬川ぉ方ぅ岸辺の草
ぉりぉまて、脇ひきそ河ぇば積ぐぉまぇ行き、屈曲
ぉぉぇ繁ぇぉぅ■向ぅぎしも外数の下ぉ■幾のつ
ぉ■ぉ、ぉぉぉぉ岸を去る事ぉ所ぉぁるぉきぅ
ぉ■ぉ、ぉぉぉぉ小、日外乗ましぉ、そきぅ
ぉぉぉぉ見、田の面ぉ見■、ぉ顧
みて勝手次第ぉ吹き、千住ぉ達ぉ、
町之中々ぉ清潔ぉりぉきぉも町見物ぉやめて又堤ぉ
ぉぅて行ぐ事大凡一里ぉのぅ、道端ぉ休み所ぁり
即ち同所ぉ柳ぉ据へ、柿ぉ食ぉ、島崎氏ぐ曖ぉの二合
要ぇぉぇ菓子ぉ食ぉりき、戸川氏柿ぉもつのぇむ
きて、ぇやぉきを味ぇん■とする数那ぉ取落ぉそあ
ら柿ぉやとぇぇ叫びけるぉ、ぉきぉて渡の所ぉ球問ぅぉ、
直々向ふの堤ぉ下ぇて行けで、えさあぅとの事ぉて、

あるため、島崎氏拵えて銀貨一個を芽碗の上に置きて引下れば立ち、渡場に下るに至るまで船影も見えず、只其の茶屋の掲示あるのみ、只四方の風景を賞して立ち尽すこと少時、拾三、四の小童来りて、えきを向ふへ渡す船を呼ぶやうに呼びてと来れば、呼むざとて来り、えきおもげに〳〵、わき物の本おもて渡す船呼ぶてふ事むみつきど、今て其の境あり、中々風流の者ぞかし。

とえ云てど、都そだちの虫曹子の恐わさるものは声立人おとの耻おく、ハヽヽ。

喜五みがわりお譲り合ひ、辛業演説おもろき事子ども美音我ものも辛業演説も恥き恥人の三年鳴ぬ音有今此所当聞のやうへ』とおもひつゝ又『三年過人で斗ふ人もあれ』と云ひつゝ、独一人只一声をもらしむもれあれ、その色隠方むど口も二三人立前に座るふ、おそろしき事ぞ又どうぞ事前の十童、井水おて汁を洗ひ手を洗ひ、赤里氏之きお渡す船呼ぶ事を聴むみ、彼頭を傾千笑をそうぬ少時傍の家より、さいく〳〵の声ありぬおまく前のお童の年等のあるあお渡す船呼びてとそ知らまくぬ、えんらくとき、水馴棹あやつりて来るを近づきまくお見まそ年拾一二ねもやと思ふるひ居たり、船おかたくの上年みつくさろ、傍の家より職人躰の百二人出来きたり、初めお童の呼びたる時、何人ぞ云ふまよ付きそも答の里氏おそ、百代おお童お頼みさる人形きそ』も島、戸、二人黙然不服の顔色形りし、船の筆るさろ事お其家お向ちて礼形述べ出、船中流お生で、

四方の景天と共に眼中に落ち来り、水静かに流れ、さの静
流れ出づる者三二艘の傳馬のみ上流より湖るありけり
見渡せば元来右の擧辺の南北に生ひ立てるすぎの
ほそ木、ほかにそさくまでいるのみにて、世の云いの
Scenic Course 趣なく、我も又画中の物のごとく思ひありける、
船西岸に着きて、共の地名を問ふに森と云い、渡し
新要と云ふも、即ち船なりけり。数すること凡そ四町許
か出で、田を耕す村郎に王子に行くの道を問ふに
彼れ、前面にある一條の畑を斜めに指さして教
さえと、実に即ち田路の曲折斜めに径ひて大日
目当に進む、或る時も行きづまりの道よりて或る時を
道の曲折元来さのみ云うに及ばざるが如くなるが横
三時頃稍々製糸所に行当り、甚だより鉄道線
路も横切り、流れ越えて坂を登り清の川に至る

相葉来たり醉てぬ。陰る夕日面を照る人もおぼしや、少時
歩き回り、稍々北側の茶屋の腰掛より、いもなべ
一のきく料理を出す、金指示して日所に歩ぐれ
菜見る人びと、種々批評をなし、む茶菓の短冊を絶
倒せり、道ゆく旅路子取ると云ふ。ろくろ陽西に落ちて
黄昏の景色、実の山の端あり。でせまり来る、飛鳥山
お登ると、夕暮の景打眺め、製糸所みて観ん、お説
明の掛ありて、セイキスピアー「こんとこまの洞舎な
ら山かより富士前町にて、知らぬ人も多く、道ゆく急ぎて暗やみ
赤田氏と別れ、即ち三丁目より島崎二年ありて
矢田みて、早稲田文学、司馬も西鶴置土産の二書
と買ふ。家に帰ると七時過ぎなりける晩食後
早稲田文学を読みぬ、明日のはむれつもて一ページづつ

二分業おわて復也事ふ取已植め、其恒も戸川氏
最初手次、青田牛次、人々其の雲ゐ持の
行だけ下植なのまでもあまり事ゐ取ろと定め、人々其の雲ゐ持の
村まりて、杉田が地面ゐ備すと云ふ事ゐ抱む故業
不都合ゐ分りもの植まりたれども老又ゐ杉田ゐ行きて
話到ゐ私ちるゐ同人ゐ宅の窓ゐ借すけ
きども他人ふ信の依ておて借ゐのわ甚不都合ゐ分ろ
との事ゐ云ひ父話ゐ始、事ゐ無き也の事
ゐ甘ろて宇かゐ話到ゐ貰悟ゐ分ろ

四日水曜日天氣よし

廿日朝寝ゐ形ち、其きよう稽久下邊ゐ昨午後二時
過戸川ゐ訪ゐふ、赤田男宅ゐ待つおきり、即ち
余等ゐ、ばむきつゐ心の輪邊地ゐ、例の如ち、ゐ
玉らぶ分らぬ所ゐ多ゐ分ける、赤田氏わ先き名歸
り余ゐ五時前日ゐ家ゐ迄ゐ多くりゐ訪ろんとて道

まで参ちまで、思ひ外ゐて家ゐ歸ろ、晩食後
ばむきつゐ心の下邊ゐ始ゐ二ページとかゐ讀み九
時頃ゐ終ろて前日ゐ事ゐ日記ゐ書ゐ、寝
んと欲ちるゐ戸川氏訪ゐ来ろ、
飲ゐ行ゐまやと云ふゐ
御門月の山田屋ゐ向ゐ家ゐ入ゐ三ちり
居ろて早子ゐ占領ゐ
りの四畳布きちる所ゐ
客去ろ、午後ゐ、即ち
高也珈琲二碗ゐ飲む、眼鏡取ろ出ゐ見
すみ色ゐ酒ゐ名ゐ
とゐ云ふ事ゐ大字生ゐ一軒
けまで又分不都合ゐ分ゐ、我等ゐ宅ゐ
(但お戸川氏ゐ)
町迄行き
日氏と別

此人林
有造氏
なりし
と思ふ

に車あり、之を見め客人のあるならんと思ひ、麹町の通
を少々歩き、又立帰りて、片岡氏の玄関に音なひ、取次の
書生に、「先生はお出掛におなるや、若しそならんには明日に
ても参りて何ひ申さん」と云へば、甚旨傳ふ可しと
て内に入り、少々の間御面會致す可しとて、内に了りけ
ぬ、座には一個の老人ありきりに主人公と談話中なり
き、余が席に入ると甚人去りぬ、片岡氏に、時間を一週
間於八時お出で物理が脚覚なくて、二拾円若しは物理が
あまりで今五円増して貰ひたしとの事が國へ掛合ひ
て見る様に頼み、且帰京の旅費を、必らずくき
る事も念が押して貰ふ事にす、同氏云ふ、談判
によりて給金の前借をなすとも[redacted]月賦割にて
月給中より返すく事にも出来るならんと思
はるゝが故に、洋服も席又掛合ひて見ん、若し学校に金
があって銀行へでも預けてあるまで、至極都合よろしから

の頃なりける

五日水曜日 朝来晴天
此日朝八時頃起床、朝食後直ちに豊川に行く、同人は今
日大磯に行く積りの心算なりとす、土佐に行く事の話致
せすに、修行のため一年位は行きてもよかるべしとて例
のきくちやあし少々ありけり、拾付前出行く、余は
談話少時の後、[redacted]頭作の理学など貰ひ受けて帰家して
出で、早川方に行き、談話数次、土佐に行きそうだと云ふ
話も出しつるに同人曰ふ、土佐の人は議論の正物なり見よ
けれど、そんな人が相手になるまでどう可胡麻菓子は出来るだ
ろうしとて笑ひぬ、拾二時過、家に帰ればむきうとしの
下讀を終す、二時過戸川氏を訪ひ、會讀を始む、相変らず
難章難句に頭を痛めたり、五時前、帰家 晩食後
直ちに中島氏に行き、本日で休みて貰ふ事にし、それよ
り、元園町の片岡氏へ志志、同家の門前に来るとせる

人と思わる、私り」と笑もなの事を願やてもなき
好都合なりと存ぜられまするで、さまざまにも女の事を要求
ありて、日永なき生で歸途九段坂上にて宮田なる小兒に
拂の淨瑠璃を實うくのとわ思いつきど、又女の泣お
せめと、すどとりあえず神保町通りなりのなを
を見て、淺草行の二階に本が行くと地震の寫眞あるを
眼鏡物と淺草仲見世にて天田が行くと
が別れ本もなし。なて通りなりのなを
が行き近松の近刻のそれもなきやと
ち家に歸る
六日金曜日朝未晴天
昨日午前指時過迄寢る、午前中品文集の下巻を終え、午
後壱時頃家を出でて要事をたり下谷を經て、淺
草花川町の稻荷うなぎ屋にて一酌を傾け、淺
草の夜篤しと、三好屋の所を辭し、濱町

三島神社の祭禮
春海子の近松作の心中丸之永
の朝日山於年
忍歌舞伎の
三名優を賞ふ

三島崎氏と訪ふ大河端より行のんとそて町を間違へ
大騒ぎとおもひ、歸途も然り、歸途も然
り別段面白き道もどりて、行く、新夢氏宅を訪ふ
二階子登り掛るの事を稱する小説の話抔ども、晩餐
の馳走ありて、島崎氏明日橫濱へ行きそき
む、指時過ぎの家を出づ、近松の油地獄の解釋
今明後日の指外過ぎまでそきよう、江口氏と訪
ふ手答なし、柳原の通を歩て昌平橋を
渡りて神保町を通り、なて通を歸る事初めて
空腹なりしのおり、家に着すまで
七日土曜日朝未晴天
昨日も指一時過迄、寢ろ、午後迄ね近松の五拾年忌
歌舞伎と觀む、春外記之丞をて降り心中丸之永

の朝日の上の巻だけ讀み、二時過ぎ杉田を訪ひ、其の中に腰打掛けて地面の事に付き、種々談合ひけり、容易に運ばず、戸川氏來まりとの事、家より申來りしかば、余は、猶一巻を煩はしきとの旨を申し遣はし家に歸りし、戸川氏に逢ひ、氏より島崎氏に係る日本歌學全書の代金二拾錢を受取る、語る事少時、即ち氏は伴ふて赤田氏を訪ふ、岩本にても語る事數時、六時頃家に歸りし、晩食後中島氏を訪ひ、小品文集を讀む、家に歸りし時、讀賣新聞を借り來りて、之れを讀む、家にて下元氏來り居たり、床に入り、就眠前、氷の朝日を讀み終りて眠に就きぬ

八日　日曜　朝來晴、午後曇、夜に入り雨

此日午前拾時頃寢る、赤田氏來りて、漸く起き、拾一時前島崎氏來る、拾二時頃赤田氏歸る、甘菱を食ひ一時頃家を出で、富坂を登り牛天神の坂を降り隆慶橋を渡り、神楽坂に出で、袋町、納戸町、掃除町等を經て砂土原町に出で、左側を見乍ら田町二丁目三拾二番地とあり、即ち錢入より江口氏の名刺を取出して見るに、之れに同じかりけれども、同番地内に入り或る家に就いて聞くに、其裏の高き所にある家なりと教られて、其家に至るに、江口と門柱に記したるあり、案内を請ふに、江口氏は書室より出で來られぬ、導かれて座に付き、挨拶中定條なれ、洋服の氏出來られざりし、氏も余等の來る事少しく遅き思ひ居り、丁度故、どうかあるかと來たので服へのであし思ひ居り、外出さるゝ所なりしとの事、即ち氏は其好運なりしを知りけん、地震の話などかねてあり、氏と余等を延いて氏の書畫室を余等に示したりし、三時前にもやありけん、三人にて、同家を出で、築土寺前に出で、中の町を經て大久保の方に行く、畑の間を

曲りくねり溪合を云ふ所々行く、日所々お井の
茶師の跡ふ當り居まで、幕末まで一行の休みさ
茶屋ありて例の何々講と記せる手拭の類を賣
ヨタ吊るさ、あたり、ら柿も食す、此辺の野景、中々趣きあり西の
方おて平野遠く甚見渡し新宿赤羽名の鐵道線
の横切あり、筆等の此所ふ書附けも此前年の
高車の辺のエも走るを見てり南ふ流あり
楊之ふ等ふ、車の入てみ丘の限る所ふ、五
頃の係、平地の黄色を以て、前を對す、種々の徒話ふ時を
費さ、夕陽斜ふ照さ、とそ手人共昌所
と打立ちて、又木の葉の間の道をたどりて、前
の野景ふ心引のそ見る」て時ふ、急々、島崎
氏曰ふ「此き位の秋」びが丁度宜さ」と、江ヶ氏云ふ「秋
の散策て、まと出逢もて逆上せいでよろしい」、

道々土花の人物海ど物で、笑ひ乍ら、此戸町
あらふかて、入浴さ、湯屋ふても種々放言さ、江ヶ
氏みさる、話話數次、島本氏の夢路の記を讀む
晩食の御馳走ふ預り、八時ふ前日家ふ歸さ、江ヶ
をる、話ある笑ひつ、別さ、明神坂を登り、眼鏡の所まで、島崎
拾一時過就眠

九日 曜日 朝来晴 午後曇

昨日午前寝て居る内、重枝氏まる、於午頃寝起、食
後直ふ、『はむきうと』の下書ふ着手す、重枝氏て我
家ふ斷の時日居さるく後も下書ふ、午後
二時過、赤田氏を問ひ、『はむきうと』を讀む、追々
面白くなりてまりちまで、鮮ら忽所ふ通り
玉ふ、戸川氏明日之気ふ休まんとの事を申
出ふ、甚さ決ふ、五時頃歸家ふ、食後中島

氏と訪ひ、讀賣新聞を送む、六日文集中の「
要刻加か教ける英文学者」を読む、武吉氏の産む濱田
太田の二氏まり居きく、濱田氏先ず歸り、余ら残
る二氏と女卿の通ふ所にて晝食を喫し、
の前より二氏と別れ、家に歸る、家にて今右代より
の手紙と読む、中山文化行の都合の結果宣
おきを喜び、日本の海運ひろる為の高知行の件確
定おろらむ、教授上の七通昊を得傳授ふねばんし
云ひる事をも載せたり、其他井上哀雄より
の事も記せあり
拾日大曜日朝洋晨雲、午後四時頃降雨
廿日朝九時前寝起、食後直ちに家を出で、服鏡
より銭通馬車に乗り、丁車に
芝口より日蔭町を入り三田ふ出で、薩摩の原を横
ぎり山聖坂を上り、台町を経て学院に至る、思ふ

朝は岡氏より
書状を持ち
丹の国元よりの教
封ざまり、中
ふ記す所を物
理えた処である

送ち又行つた上で
都合悪るければ
地教員ふ委持
さてもよろしい
との事なり
ケり

砂野信氏ふ
逢ふ

処、静かの降りけるなり仕
氏の宿ふ行き、氏在宅を幸ひ氏
歸宅せり、書斎良の駅迄ふ降りだり、正化の千谷
とふふ名氏の友人
々聞々氏日々花ふ行きそる初め指昼の間ふ小志即面倒
らん、如何んとおまるも、去
当時そ、どもふら出まる人のと思ふを質問みとど天
鶏と掛ける事ふとあるが故なり、きまで、其の処
きはみる大概文法を
容易々解する者ふ
其他種々雑話す、
千谷氏とまりふ
氏も来つて千谷氏と
初ふ勝ち次ふまけ
そを勝つ、氏去り、雨降り来りふ付

午前父と将棋を差す　我勝ちを占む

ふうまびきしを持ち来る、順次中々上らざりそが遂ひよろやく上げて、姉を食わす、拾一時頃日人等去る、晝食みそ味噌うき、はむきろと〃一へーじばかり讀む、畑草屋の母来まり午後二時頃迄いでまる、輪講の由苦、例の如き、立時前戸外を立ち戻る、夕餉を食す、拾一時頃日家之伴ひ晩食をも御食す、ゑまびきしを味ふ七時重枝外出行く、後ち少時家をもで血ち外にて日本文学史を見る、お御面り外歩き、蒲團を一団お戸外お別き就寝

拾二日木曜日朝来曇天拾一時霰と降雨

昨日て前数日来の風氣全く治けざきで拾時頃迄寝る、朝食後直ちに、はむきつと〃の不讀ふ着手す、別ら恙き、昼午後二時頃晝食、頭痛烈ふ、のりけきで、就蓐ふ、

むまで心あて又少々讀む、四時頃より一睡す、齒の痛みすこしありけり、六時頃赤田氏より種々談話す、七時過ぎ氏去り忽ち九時頃晩食を喫し、眠に就かんとせしが少し苦痛ありける、昨日より降雨のため家雨漏りして大騒ぎをなせり、

指三日　金曜日　朝来曇り且雨濛々たり、

昨日午前七時頃より齒痛甚だしく、父を呼び起さんと欲せしも、藥を求めるまでと、あらず、必ず朝まで、起きず、痛みあり、種々の事共考ふるに齒痛時々起こり、前日来雨増々降りしきり、雨漏甚だしく、おりける小付なるも、哀きをまさるて、彼是れ大騒ぎする、家を倒さん、焚かんと、親子兄弟、ふ離を、悲みの外に凍々、落ちみたいに家も此の雨かなとて、まだ明、遂ぎ難き、寝るべくや此まで思ふそこの如くつづけ也、

島崎氏の父君廿三日に逝去せんとのあ折き也、降る雨か油の如く増るらん夜か入り古今集を讀んと欲せしも、齒痛漸々薄らぎたまとも遂ふと又出るやうとと書見を止め眠に就すことを試みたるも得ず、拾四日土曜日朝晴、午後好天氣

昨日朝九時前寝起、朝食中戸川、赤田二氏来まり、食後雪も始む、持て餘しありけり、拾二時過雨氏妻ある同、數箇所かあり、一時過ぎ去る、午後又雨を催す、戸川氏の職を濱野の島崎氏を訪ふ、戸川氏の職を辞する事ふ聞ける不平を訴へ付き種々お話ありける、五時過日家と、辞す、明日東空か輝き、晩霞人の行く景色晩の景色も見ゆ、至て静の氣候、真砂町の矢田おて桂

姫を伴り、家に歸る、家にて、父母、友吉を撰り出
けるなり、即ち之に手つだいて、荷を全て我手代に
之の手續などを見せたりし、

拾五日々曜日 朝来晴

此日午前豊川を訪ひ、前秋の桂姫を渡し、金拾
四円受取り、書一冊を御覧せらるゝき時頃、大石早川
の両家を訪ひ、不在なりけり、家に歸るに本屋都の
花我持ち来たり、晩方に城戸来り、本など見て
かへる、夕飯後家を出で 和泉町の和泉亭に
行く、此の所の御客は大抵商人分子なりける、最初に
愛之助の「碁太平記白石噺揚屋之段」、此人に我始めて聞きたれど
大分熱心の語り口なるも、我分一の岸澤調子が本分なり
次に伊太吉の「忠臣講釈、(角兵衛門出立之段)」先づ可成の出来なるべきも
事実の哀をなる、我平右衛門の心中に泣きぬ、次に小政の
「戀女房染分手綱重の井子別の段」我只、其の老練なるに服す

次に弥生の「絵本太功記尼ヶ崎之段」之をきくに先づ能き出来ならんか
し、次に小来、大吉の「朝顔日記宿屋之段」此の人にはすんなりの声に中
々自由使わるまじ、調子なんとなく不十分なる所あるやうに
思ひぬ、中入り前より楽屋に行き政[illegible]等と語る、土佐の義
太夫の語りなど聞きぬ、大切稲拵鐘拵の「玉藻前旭袂道春館段」
艶曲、周到、我只大きに感心服致せり、歸途月を踏で家
に着せるは、拾時半なりき、御徒士町の通りの汽車の道
行を見んけり、家にて 都の花など讀む

拾六日月曜日 朝来晴 夜に入り曇且雨

此日就業中重枝氏片岡氏よりの書状を持ちきたり受き
とりける、(手紙)取りて讀めるに、月給も望の如く二拾五圓くれる、
給金の前借も承諾との事にて、承諾の返事至急せよ
との事なるにぞ直ちに朝食を喫し眞砂町より五才で
づんで車にて元園町に行く、片岡氏留守なりけり、見物
きぬ書生居たりしに、手代を聞め置きて出で番町の

中村に行ふ、日人て商家附
るの》拾一時頃帰化の四番漢
きんとそて、中村の意見を 抑きみまをり、中村例の
関子おて今少し普通学とやる可しと勧告せり、よも
えまず和おて普通学の必要ある所以を縷陳せり、
拾二時前、同所を辞して、又園田の行き、例の書生居宅
て、次時法、話おて帰途に就けり、家おては
りそ思、家の事よりそ
むまをと心を潰む、二時頃赤田氏まり三時頃戸川まり
なるみて、例の輪講を始めけるに、難章、多くて大閉
口致せり、五時頃中島氏まりふレデリック傳を少か
読む、夜に了、幸屋に行き早稲田文学の代価を渡
し、就て岡町に行き、早川を訪ふに大石氏あり、種々
話す、おら、み草紙を貰て帰る、種々
持ち雨降りおけまそて傘を借りて、帰る。

夜拾時頃姉おに向つてのま代を請めむ

夜に入り都の表を潰む

拾七日火曜日朝来晴天
昨日午前九時過起床、拾時より
午後は都の花の名「撫菊」「稽り香」及び「豊年万作」の部分
を潰む、赤田氏まり、三時頃戸川氏まりけまそて、輪講
を始めし、解らぬ所例に依りて戸川氏まり、
島氏まり、ヨン第一巻潰本を畫む、六時頃に帰り行
き、夜に入て幸屋に行き、五時半頃中
に於て逢ひ、夕飯を初め父の兼ねる掛物を借まて
帰ひたり、
子我慢して食ひぬ、八時過帰宅せり、拾時前中安
氏まり、種々土佐の話おどありたり

拾八日水曜日朝来晴天
昨日午前拾時頃起床、朝食後直ちに『ばムレット』の下読
みを始む、二時前伊東表義まりて麹町の話おどあ
り、二時半頃赤田戸川の二氏揃ひたるまで『ばムレット』と
二ページ少し潰む、解らぬ所例に依りて多くけるに

終りて二氏と共に廿三日遠足の件に付つて語りあひ六
時頃外出す、本屋にて「早稲田文学」第三号を買ふ、歸りし
て之を讀み終ふ、坪内氏の「まくべす」註釋出づ、さすがに親
切なる哉。旅行の費用に付きての豫算を作る

拾九日木曜日　朝来晴天、夜に入りて雲出づ

此日も拾一時頃起きいで、食して後、拾二時過島崎氏
来りぬ、氏に遠足の事なども話す、氏我が此の日記
を見て曰く「瓢蕩とそ云はまほしけれ」など名づけて三年来
ある廃志を号なり、故に今日、そを改めて、呼びなら
す事甚だ迷惑なり」と、余は之を怪しむ、たる号を書すま
じと約しつ、氏又言ふ「此より後は文学上の著作
を為す人にて有り餘る程出来得べけれ、「余は志
る徳は身に貯へ、精神的文学者と成らん」と
余は「文学者の境界、然れども吾はあらぬをこそ
述らずや其身に徳を備へざる可らず」と答へぬ

然、「はむれット」を下讀みす、此日にて全曲を讀み終
る、此の沙翁の戯を如何にも賑やかに且勇ましく
ありけるかな。「らしてす」の、心に恐ろしきあまりに、「はむ
れット」に續けさまに打込まるる所なぞ中々面白かりしと
おもはる。芋を買ひ来りて食ふ、二時頃氏去り
安田氏来る、少時にして、島崎氏と戸川氏と共に至
る、談話少時、三人で来る廿三日にて築地なる戸川氏に
て島崎氏に行き逢ふ約束し、氏去る、直ちに
「はむれット」を讀み終る。芋を食ひなから種々の話
を為す、五時頃中島氏来る、「曲亭三言」第壱本を書き
然、六時半頃家を出で、平家物語（文学全書廿編）
を本屋にて借る、代は此の末に拂ふ筈なり
龍岡町に行き、早川、大石両家を訪ふに不在なり
去りて戸川氏を訪ふ、又居らず、本郷の通りを散歩
して歸る、此日は一圓の四ツの日なれば夜市の

大通りまで人力車の通りて多くまりあり、本屋かえ立寄りて、水村氏の代わり習ひ合もの家へ帰る、手紙物語の次第、篠原場並の合戦の事、昔の侍の事下、忠度の都落、一の谷の落没平家墳の事、滅亡のことなど、いろいろ、拾時過就眠り

二拾日金曜日朝未晴天曇寒し

昨の日例の如く朝寝して、巳の時過ぎ起出で、卯茶の水の橋渡りて百拾九銀元町より馬車に乗り行く、江口氏に逢ひ、時たち話さ行かず行く、豊川わ居らず、例の美食橋の辺を横町より別れて、柳原がしどろ曲りて、濱町より島崎氏の寓へ行き着く、本郎へ行きたりと家人云ふ、必定我が家へも立寄らるべからんと、ねもき事もつるまと、急ぎて家路へむけ、太物店より出で、報知社の傍を通り、賀古路の橋切りを備前橋を渡り川へ傍いて、登り牛町なる島崎へ

で、家へ帰るに、島崎氏先き程書状を送ると、の、冊草紙をみな々讀むで、夜へ入『げイキー』『地文学』『英びすイトン』『国史』『日並文学等少々覗く、

二拾一日土曜日朝未薄雲

昨日午前八時過寝起、豊川を訪ふ、於安、腹工合悪きとて、ねて居りたり、新聞紙など借りて、見、拾時過銀行へ行くに、多人にて用事込み合ひ居るゆえ、一時頃へまた出直して、数町歩の所へ、足を家路へむけ、方々橋を渡りて数町歩の所へ出で、下駄の鼻緒切れるので、辺りへ探せども見当らず、交番の梯子にて調べの紙片を書きて、それを下駄とともに、ぶら下げ、行く数歩にて、ぶらぶらとなりとけゆえ、やうやく教室の物置の前へ行き、縄を拾ひて、これにて、げたとともに、ぶら下げ、用心の用意して、家へ帰る、家にて昼食をとり、内へ言る、まる廿三日の用事あり遠足の

一行に加わるを得ずと、傍らに、庁岡氏よりの書状
もあり、載する所、共立学校より金が着きたる
によりて、毎夜の明日朝書す可きの事なり、書食
後、家を出で、戸川氏を訪ひ二時過迄語す、
きつて、銀行に行く、頭取の室に導かれ待つ事
少時、相島、江口両氏出来りて語る、同志会の決出
ぞ然、豊川に逢ひ、月費の事を話す、戸川言ふ「勉
身者に行きてもなお奇く早く帰る覚悟ある者は、其の母に都合
を付けて大学の撰課なりやつて見る可し」と、みな身にまよりて後の行
状によりも、二三年の修業料や老人の食料位え、敢て草卿氏
を仰がず共、どうか成る可きならん」と、我之まで聞きて、され
ども、迷谷の中に迷ふ旅人の、一点の燈火を闇黒中に見
出せしが如き心地なれど、実に「ほんの」の光であり、我
等の旅路に善き燈台にはあらじ、「まだ川文」船に
乗りて行くの方が穏安なるならんと思ふ故、若し
なりするならぬ、添書を付け申さん」と云へり、一時頃過日
所を出で、再び戸川氏を訪ひ伴ふて濱町に行き、島崎
氏を訪ひ、例の樓上にて語る、明治廿三日七年の如くに
諸氏集る事に決す、暮に茶を馳走せられき、夜に入りて
大に文学を談ず、戸川氏「小説にて耽る安き人性の形ら
ひの如きず、即ち人の人情の分子勝つが如き事あるがたら
ぬ情のまゝし進むべきよろしいのあるべき「きすよ」との疑問を
提出せられ、種々討議の末、遂に「情に走りすぎも又一個の
必要なるなり、只、其の情の良き物の撰擇なるを肝要なりき」と云
ふに決す、其後も放談多く語る、八時頃家に辞
して、家路に急ぐ、戸川氏家に言ふ「今夜の論の事は論
する甚大なり」と、湯島元一自にて氏別る、生家帰
へる
廿二日日曜　朝来曇天且風あり寒し、夜に入り止める
朝八時頃寝起、食後、車を傭ひ、元園町に行く

…貴国二球投…
…金球神前…
…おらべまの利…
…益球祈る…
…我ら勉め…
…拾五球…
…笠見安並…
…集なおこと…
…す…

…片岡氏あて金四拾五円受取、書生より金四拾円受取、差引而残金五円也、
…取込み、えきそばの打笠まで行く、帰宅後、…
…座ろ打笠まで行く、帰宅後、…
…けり、店先きまで立ちて送…
…回行きたり、拾時過帰宅せり、…
…代価二拾九銭也、…
…受けず、七銭得ず、…
…談話ありて過帰宅せり、…
…ひ、稗ろ洗話す、家内…

…おて、何ラケ…の註解兵小司…
…指五銭おておめる…
廿三日月曜日 朝来曇雲、正午頃より降雨
昨九時前呉服屋来る、寝巻地、…
裏表着物裏共おて二円ろ式弐だけ掛ふ、…
後戸川氏雨なり留守にて来まり、二時頃赤田氏来…
り玉を受けなどをて…
氏来まり、お互ひに、…
食ひ、夜に入り送別會の話ありて…
と都合宜ろくなどの話ありて…
…まる、島崎氏曰ふ、…
で、何のまる…諸君ふ別る、…
ふ、先ず散まて御別の積りふ致し置之可ふ…
松田へ出る手代ふ…
廿四日火曜日 朝来晴天

洋服屋へ縫を持ちまいり

昨暁起き出ることと、朝食の、洋服屋へフロックの直を依頼す、代志田七拾七銭を渡す、豊川へ行き法話数次、新聞を見る、歯痛みけるゆえ、眞砂町歯医者の所へ行くも、人あり、沿道を抑えて待つ事一時間ばかりにて、漸く見て貰いぬ、其まま、漸く出でたり、日を土きふりきれらきぬ出をさまじの機械みて、おちらき、漸々痛みを忘れて歸宅をなす時頃、午後赤堀氏改不在なりけり、新花町村上氏を訪う、去伴みて戸川氏を訪うも本人通行不在にて、家の緊急の手簡来る、島崎氏の手簡来る、即ち返事を認めて、志田氏へ托して歸国す」と、まり日々『祖母死亡の報達せられ、直ちに悔状を認めて、志田氏へ托して郵送す、夜に入て大石氏来る、将基を戦う、二度共勝ち、雨降り来る、志田戸川の二氏訪う、四人みて種々談話す、錯氏去り、拾一時頃就眠

二拾五日水曜日朝来晴

午前歯医者を問う、摩治並に掃除を頼む、代七拾銭を渡す、萬坂墳墓を見る、二時過ぎつ、銀行へ行き、豊川へ達して家の事件話す、同人て『そも必ずしも急用と地主の馴合仕事ならんと思わるまで、家てうちらみてやるべし』と又金の高知れたものを、贈金をひきうけて行て一家の僕まりなくるる為き機會なきも、詮方なく地方の止まらざらん事をそれぬらめと云いぬ、留場まりたまで、別れて出んとするに主人の家族を度々呼ぶ事おびただしく、何之の用事あらんと云へり、歸途矢田にて遠慮れ久しぶりにて訪ねる、栃尾氏二拾六号着の歌舞伎座の書面を読む、歸りて鶴次の芝廻の書面を読む、夜に入て人を雪剃する、所中々寝られず

夜十分松永を訪ふ、日付の役所の下役次で来り、
太田氏も来り、下役の人々も次で来り、一旦帰家
夫、其後より又引出され、観工場にて、石鹸其外入物、並場子
羽織の図を買ふ代六拾弐銭取り、家にて種々仕度
終て夜拾時過、うどんを食せり

二拾六日本曜日 朝来晴天
朝九時頃起床、吉川氏初め来りおり、氏も来屋なやうの故
かを尋ねるので昨夜の所へ行き、並に膏薬を
貰ひ来りそれを拾壱時過迄貼置、其後痛みを押すと少し痛みを
感ず、前日来並ぐきの上を押すと、少し痛みを感ず
で昨日の事を話すと、彼も針を入れて
打ち呉、血男々出るほど、さ程痛らず、飯田氏も
会食終りて、飯田氏より、明日ふぐ吹屋の痛みの原因を並ぐき
の内部がそうして居る様にて居るとの事にて
ずで痛み治る手当を聞き入る所なり、手附金壱円

一元場の一 泊まって帰る月心地にて寝床を重ね
打話して午前迄見て居る内に、三時過清司氏訪来也、
種々語る、五時過吉川氏まで送別会にて来る廿八日ふ
定め、筆記帳等の務際の海老屋と極まりた
由、語り呉、柵迄で山家集共お渡みおき、氏も共お渡みおき
司氏と語る七時過氏去り呉、月心地も少し増さるまで
床取て寝ね、うどんを取り寄て食ひおき

二拾七日金曜日 朝来晴天
昨朝より前日まで尾の如く痛みあで、座敷あでず、柵草氏
訪ど債さ、所載歌陣八島の山伏揉待の件りか我績信の
母の心と思ひつゞけて注きおき呉、

二拾八日土曜日朝来晴天
去日朝九時頃吉川堂三郎氏来きり、日氏の小説幸と澤
山儲まず、呉竹集等携る、拾一時頃分出去時計屋まで対計
と雪取て、松屋にて近松著作の合巻数冊取、活判屋

みで名刺を差置きて帰る赤川氏も来り赤田まる氏と共に一日も務向よ迄佐寺に一日所おて馬車を集り、京橋迄行きて筆松軽子飯降のり三井陽お行く戸川が倉、星野、松屋子高千穂子待ちうけありまり、即ち二階子登りて南表の四畳半の室お集りて挨拶を放言す、二対頭お城氏来り那な菓子も出すを食ふお暮氏も将基を戦わし一松屋氏と碁なお囲むお会小城氏なび今村氏も那ちるとなりて偶々ず勢ひ五拾弐だ千置い来らせて、清氏が優す、頓て快談す、小城先ず去り、余等も立ち前日所を一日解散し、赤富座前おて赤氏と別れ京都、赤田の氏と余が宿を訪、仏壇香おそ輪車一対八拾五銭のを買ひ求めて、三人互おに引き合ひて帰宅せしは午後八時頃なりき

田氏と共に神田川お傍ひ牛町を経て帰る、家おて赤田氏と階ろ八時頃赤田氏まりまで、余も出で、直ぐ近行き牛田おて別れ『女義太夫芸評判記』を買ふ、時計屋の前お時計の面を熟む、日人ふ『坊ひ計』て中々よい、日幸おそ等り買ひ求めて帰宅せしは午後十時頃なりき

の者ども、せまお似寄ぬが二拾五円ぐらいの値ひす』と、洋服屋お行くお未だ出来居ずとの事にて直ぐ帰宅し、夫おて洋到元を捻む、社撰の箇所甚多くけり

二拾九日曜日晴天

朝九時過寝起ぬ、顔を洗ふお、各支度して、余等ず牧野氏を訪ひ、金を貸す事を頼み、四方を眺めて軽み、四方を眺めて眼鏡の五銭おて求む、筆医者の所お行き、当の充填を歯をいぢらせ、時々充填の箇所お充填せる事もありけり、填め箇所お

洋服屋上着ニ付事ヲ云ヒ

其ノ四ヶ所おえたんせんと、まるぶし、とつめ、他の
ヶ所ハ金をつめて、式円弐拾銭ニ仕上ル、但
おもての内ニ色四ヶ所ニ付ケ五銭ニ仕上ル世六日 落ニ置きけり
遠磨石ニ而ミがき、家ニ帰ル夫ゟ湯ニ入リ四時頃ニ成ル寒
気と頭痛ニ而夜ニ入リ衣服を重ね、夜ニ入リ唐物
屋ニ行き、つぼんぼ、裸、手拭等求めつ、家ニ帰リ、さんぴん
いれを飲みて眠ニ就きぬ
三拾日月曜日 朝ニ晴天 暖気
昨日ニ頭痛激シクなりけるニ付、指ニ四時頃迄床ニ
食事後ニ而ニ於て仕事ニ取リ掛ル、新聞を見るニ毛利子爵侍従の故障ニ
受取リ、巡回の節 陛下ニおゐて拝謁ニ付、宮内省ゟ
個ニ出ニおゐて拝謁ニ付、宮内省ゟ
あり、其ノ間ニ御賜金ハ御ゟふ 雛御飯
部ゟ、春木町の靴屋ニ而ニ靴ニ而ニ於て求めて

四ヶ日 朝ニ而ニ於て 湯ニ入リ ニ而ニ於て 郵船
會社の滊船出帆表ニ而ニ於て 得んとて
の事ニ而ニ於て 而ニ於て 家ニ帰ル 其ノ後又ニ而ニ於て
ニ而ニ於て 計屋ニ而ニ於て 計ニ而ニ於て 唐物屋ニ而ニ於て 帽子及ビ半股引
ニ而ニ於て 而ニ於て 鉛筆ニ而ニ於て 鶏卵ニ而ニ於て 購ヒ、
ニ而ニ於て 破ニ而ニ於て 家ニ帰ル 家ニ而ニ於て 皆の人ニ而ニ於て 物ねだりニ而ニ於て
め、家ニ帰ル、家ニ而ニ於て 皆の人ニ而ニ於て 物ねだりニ而ニ於て
させ、ニ而ニ於て 皆の計ニ而ニ於て 并ニ而ニ於て
ニ而ニ於て 種々の 読ニ而ニ於て 経ニ而ニ於て
めつ、あり、ニ而ニ於て 外の 方ニ而ニ於て 騒ニ而ニ於て
三つぼんの半鐘の音聞ニ而ニ於て 火、たるニ而ニ於て
事ニ而ニ於て 外ニ而ニ於て 火の手ニ而ニ於て 見へ
ず、ニ而ニ於て 寺ニ而ニ於て 内ニ而ニ於て 家ニ而ニ於て
毎ニ而ニ於て 台所ニ而ニ於て 戸ニ而ニ於て 開きて見るニ而ニ於て 東の方ニ而ニ於て 火ニ而ニ於て
見ゆるニ而ニ於て 言ひけるニ而ニ於て、なほニ而ニ於て 行きて見るニ而ニ於て 今や 燃ゆ

上ると思わるゝ、ずっりの
田え、中に処々
の傍おゝうえ向と見ゆる
以てまで
を乗り、新道の
筒て銀の
いとも
交ぶを
門前
弐拾二
山田氏
拾二月一日火曜日
晴午前拾時頃
ゞ土屋運送店へ行き
一冊を、
帳面を
より、夜
読す、
買ふ
二日水曜日
以日午前九
物を
行き、荷物

[illegible]町お岩、妻恋坂下より[illegible]
[illegible]て、九段の[illegible]箱猫をお[illegible]
[illegible]をとらう、[illegible]々詮議[illegible]
も辞し、[illegible]帰宅[illegible]戸川氏[illegible]
ちまち[illegible]帰宅[illegible]す、[illegible]
も手早く、靴屋[illegible]靴を持[illegible]
鉄を挟んで[illegible]神論[illegible]
い氏より、手[illegible]晩食[illegible]
宿[illegible]ける[illegible]
教事[illegible]、信[illegible]鍛[illegible]
[illegible]縛の[illegible]刻[illegible]
[illegible]秀[illegible]座前[illegible]
の玉[illegible]屋[illegible]玉子の[illegible]
過就眠、

三日 未曜日 朝未薄暑、夜[illegible]雨

朝七[illegible]起床、朝食[illegible]、事[illegible]、元園町の片面
式を行[illegible]玉宝[illegible]
教師宮崎[illegible]と云[illegible]人の[illegible]
と、云[illegible]長岡護美[illegible]と云[illegible]人より、[illegible]依氏の登
りでもあらざ[illegible]何卒知らざ[illegible]
豊川[illegible]通[illegible]話[illegible]
言[illegible]、[illegible]家[illegible]辞[illegible]、麹町三[illegible]永田町辺の道[illegible]
[illegible]迂回[illegible]、日枝神社[illegible]
坂町の野崎氏[illegible]訪[illegible]
々談話[illegible]、[illegible]
[illegible]を借[illegible]、元文式[illegible]
び[illegible]服せり、一[illegible]吸野崎氏出勤せり、[illegible]
書を読む[illegible]
る生[illegible]

四家女婿し、飯着みで、三田年経、三丁目の菓子屋をお折詰も作らも、小倉氏を訪ふ多忙なる不在所ける、まそれ氏も訪ひ告別の辞述べんぞす氏を訪らふ小倉氏和洋法の教授中ゆえ、大正森氏を訪ふて話す事数十分、何他出で、また氏と訪ひ、稽々話る、ふ氏の歴史を見せり、苦つてばら氏と訪ふ氏外出掛け所へ到る、お急氏方お行き晩食の馳走ふ受ける、筆墨を送る、浄書、五も久ぶりにて夜おそく雨降りけるで泊る事ふ得して帰る、三田より東京へ帰る、三田より家小倉氏お別ま、四日(金)朝来最も天気の好き日なり。

翌日朝九時頃起床、朝食後仕事中ゆえ、新聞を後ふ見、午前式時頃帰宅の現髪所ふて髪ふ切つもらひ、家の妻ふ切ふ貰ふ、昨日の話ふ聞ふ、晩食後赤田氏後より来り、新聞ふ見ふ西京ふ六日の出帆ゆえ、それまで留まる事ふ約して帰る、赤田氏ふ送ふて道の角ふて赤田氏と別ま帰宅、家ふて船の出帆迄猶ふ暫ふ留まるふよろしからず、拾時過就眠せり

五日土曜日朝来晴天

翌日朝七時過寝起、八時頃迄ふ川を訪ふ予定ゆえ、帰途、土石氏を訪ひ、今夜来ふ話ふて置きたる事ふ話ふて、丸善ふ行き、書籍食後、後事ふて丸善ふ行き、さふ二枚五銭ふて求めぬ、三時前着

部氏を訪ふ、菓子を御馳走せらる、日永を出でゝ中島氏の北堂を訪ひ、松永、中島二氏と午夜半まで話す事を得へんと思ひしも、家の者すきそ、こゝり氏まで来りて、昨夜、土の①②③の久敬を御呉す、中島氏も来りたきとの事なれ共入らざりき、小、ナリ氏まで来り、種々法話ありて、過ぎ去りし伊三年ぶりにて小辺重主の興行寺原神歌堂三題も聞き、又亜ぐ老陳物語所感ずべし、然れ八幡七郎の言葉もおもしろき事なりけり、午後福島氏を訪ふ、留守にて行き違ひとなる、種々法話ありて、夜に入らざりき、

廿日、日曜日、朝来晴天、

昨日午前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、夜に入りて松永氏を訪ひ、暫く談話ありて帰る、

初更の頃、寺原寺より使来りて、病気上りの気力恢復せず、明日葬儀に参列し難き旨を告げ来る、

廿一日、月曜日、朝来晴天、夜半より雨、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

廿二日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

廿三日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

廿四日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

廿五日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

廿六日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

廿七日、日曜日、朝来晴天、夜半より雨、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

廿八日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

廿九日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三十日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三十一日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二月一日、金曜日、朝来晴天、夜半より雨、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

四日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

五日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

六日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

七日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

八日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

九日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十一日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十二日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十三日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十四日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十五日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十六日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十七日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十八日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十九日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十一日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十二日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十三日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十四日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十五日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十六日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十七日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十八日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十九日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三十日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三十一日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三月一日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

四日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

五日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

六日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

七日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

八日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

九日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十一日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十二日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十三日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十四日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十五日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十六日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十七日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十八日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十九日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十一日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十二日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十三日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十四日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十五日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十六日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十七日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十八日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十九日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三十日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三十一日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

四月一日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

四日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

五日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

六日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

七日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

八日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

九日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十一日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十二日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十三日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十四日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十五日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十六日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十七日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十八日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十九日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十一日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十二日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十三日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十四日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十五日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十六日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十七日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十八日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十九日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三十日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

五月一日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

四日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

五日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

六日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

七日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

八日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

九日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十一日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十二日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十三日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十四日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十五日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十六日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十七日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十八日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十九日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十一日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十二日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十三日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十四日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十五日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十六日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十七日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十八日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十九日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三十日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三十一日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

六月一日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

四日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

五日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

六日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

七日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

八日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

九日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十一日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十二日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十三日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十四日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十五日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十六日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十七日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十八日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十九日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十一日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十二日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十三日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十四日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十五日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十六日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十七日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十八日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十九日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三十日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

七月一日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

四日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

五日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

六日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

七日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

八日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

九日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十一日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十二日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十三日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十四日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十五日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十六日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十七日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十八日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

十九日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十一日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十二日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十三日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十四日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十五日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十六日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十七日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十八日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二十九日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三十日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三十一日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

八月一日、日曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

二日、月曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

三日、火曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

四日、水曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

五日、木曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

六日、金曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

七日、土曜日、朝来晴天、

昨日朝九時前豊川を訪ふ、不在、帰宅す、午後福島氏を訪ふ、不在、帰宅す、午後三時頃より雨、

八

路傍の伯母
を
訪ひ

不在なりけり福島氏を訪ひ幸ひもとより
不在而家を守る不在、当にて行き於安堵の
氏も妻なる、当にて帰の来ぶを大石内蔵
戸川秋田両次にて戻きたりまゐり、書司氏来
却下のらげて戻きたりまゐり、荷物取ど親
カ町八の手伝を預る、松子村前就蔵
八日大曇る、午前雨、時々晴、夜カ力雨暴月雨
昔え午前二時目覚て居る内ホ一睡一ヶ月過
さてまつた思ふて居る内ホ一睡一ヶ月過
き出ろろホ雨え止み星ヶ見る、嬉しやと思ふ
好ホ又雲り来六時頃雨降出ホ、新橋ホ着る
ちるホ中徒歩町ホて雨降出ホ、新橋ホ着る
頃雨霏々たり、戸川、赤田ホ今君の三氏ホ逢て
恐、伯母え武田氏を得見出さず、名ごて午ホ車
ホ乗り恐、父も車の所まで来る中城氏もなまて

戸川氏ホ
ヤオゾヤオえ
待逢ホ送ま

ホり恐、父も家も手離す事の如何ホ心細すりけん
まふとホ雪ホとまる武田氏
宿ホて行ろホ武
悦より午まり、車ホ
勢屋即者と云ホ休宿ホ
林氏雄氏ホ逢ホ、八井氏ホ
中形り、八井氏ホ
ホ、松野屋ホ
の送迎所より船ホ乗
左ホ船形り、下等室ホ
雑中ホて、ありけまでも
疲え、まりて甲板ホ
長ホ手伝を手ホ雪
ホ、戸ホ行き、
板ホ出で四方を眺むる

今日も曇ハり然廿時過ト下に行けり、七時過尾列した
る船中に動き船客大抵嘔吐せり、余亦大分苦
然田原氏に蜜柑を貰ひて食す　吐
きそうなれどもじっとこらへて一時間計を眺めて時
のうつるを待つ、そのくるしさ！
九日　水曜　朝来晴天
廿日　午前二時頃一度苦き水を吐く、夜明けても
[redacted]甲板に出る勇気もなく、武田氏より借りた五
毛布をかぶって伏し居れり　十時過やっと
あまりけんる事務長の所より使来りて見舞ふ
てくれたり　十二時過甲板に出づ　尾甚だ船ち
然のあたりに所々かりき　二隻の何か軍艦
に逢へり　神戸に着く前に食堂に引かれて大
いの馳走にあつかまりし、其の後事務長の室に行き
礼を云ふ　然て昨秋田中君尾面の相談をしたのを話す

然十一時船神戸港に着く、荷物をまとめるに際し余の
荷を調ぶるに高帽子やつぶれてあまりなべ肆に賊
日船客の不注意にて吉田の帽子付きて居たれ
ば、当中と云ふ問屋が押へて荷物を運ぶ
内海岸通の旧家の二階に宿り然、武田氏と共
に弱わりきりたり、余も猶船にて揺られつつある心
地せり　夜に入り十時過就寝す
廿一日　木曜日　朝来晴天
午前えぶらしに過ぎ午後外田氏と旧道を
東にて湊川神社に詣で、湊川に行って、つれ者
共お夢の痕に懐旧の涙をそそぎ然、勝本氏巡
査に聞かず分らず　警察署に行き聞くに知れず、市
役所にても知れず、空しく帰りぬ　廿日廿一日より越
路一連の大黒座にて興行する団の札を見たり
四時過湯屋に行く、上り湯ぬるくて大いに弱りた

近松の生玉谷中
遠ザ火

荷物を明けて
外套と毛布
と出し一火

り来る四五杯ちびて帰る夜ふけて武田何と法話す

拾日金曜日朝未晴天
廿日午前九時ごろ起ず一午後今村氏へ梅
廿日午前九時ごろ起ず一午後今村氏へ梅
公前ゟ行そふて里廊の義ニまれ甲村へのらとす
事ニ付き一昨日帰る甲村氏行々着もか形し
土岡十九日待つ事一昨日帰る能銷久みす中ゟて王三
を経り出す、笑ひ出してやめぬ次ゟ兄太夫の思正蔵
本旨 勘手切腹之段酔ふ感服もせず次ゟ青木太夫の娘皆山
帯雀」範摸の歩行ゟも吹何ぜん次ゟ佐野太夫八兵衛の
「花鳥茶屋の段」本当未、我中お辻の坊太郎ゟ頼ふ辺ゟ
何ともニも所なりき手林ニ石辺ゟ次ゟ路太夫
兵工の「紙治茶屋場」お亀ゟ此中の人物能々吟
助ある事お、次ゟ呂太夫の「吃太平」実ゟ大き拍子
留琉球り歌三助の物語り拍子中々面白うき
吃も中々肯ゟ折らまそう、切ゟわ越路太夫

屋物の「土十」此事ゟ実ゟ艶たろり、其
の四の人ゟそよゟ「母うえ事お
よめきて」ゟ「ふるゟ、只ゟ
主を猫しゃ」ゟ「ゟ」ゟ中々面白一、終り切ゟ
廿日土曜日朝未晴天午後ゟ夜ゟ雪ふる
廿日午前九々つき午後散歩す西岸通り行し
生国明神ゟ参一叩ゟ梅ゟ咲ゟ、蜜柑を買ひて
帰宿す、湯ゟ入る午後ゟ
まの「七太夫」ゟ「ゟ」ゟ下
お上等の切符を買ふて上等室ゟ入り出船
でゝ中々悟きぬ室内と密柑とゟて心地も能き
んとする時ゟうつらくとろ出ず
廿三日日曜日朝未晴天ゟ
昨日朝ゟ起きたまゝ頭ゟ上らず、船酔ゟ

ふくろ迄書み終りて、永野寅次郎氏の家族
の人々女の人集り合ひて居り、武田氏の迎の
船来て、一家族毎に屋形の中へ入れ、非常に
悪き処のよりて、心地も非常に悪く、何度のとまるとさうもとさうし
ずと云ふ人の多く、船より上りて夜を明す、女家
族は、其日の午後迄船中にて過ごおもふ所
との事、然るに其の事迄あまり(ら)
電信が抜けて居るから、船より上りて
指四日 晴曜日 朝洋晴暖
指四日の朝九時頃朝食後直ぐ洋服を着
る伊奈伎氏も不在、安立郎氏も留守、家ふ歩
居て吉村ふ訪ねて、荷物を預け、傘ふ二枚
借りて吉村ふ訪ねて、家を捜ふ手間取
る処へ西原氏の次男が迎ひに来て呉れ
りき、共立学校ふ行くふ事久しくして漸く
指五日 晴曜日 朝洋晴暖
指五日の朝八時頃寝起、朝食後直ぐふ洋服を着
西原人町の小倉氏を訪ふふ姉君在宅にて
逢ふ種々話話す、下宿屋を探す事を頼む
共立学校ふ行き、教師斡事務ありて種々
相談をなし、午前四時頃の英作文二組の文法を学ぶ
英文学(文学士)之当分やらぬ事ふ極め、帰る指八日
より小試験始まりて、生徒の学力を知らん、午
前十時帰宿、指二時前帰宿
番人のうやう事一ふ教へ、指二時前帰宿
池の鯉ふ見ふ、午
西の横町迄まわりて、そこより北へ
折れて、ホテルの前ふ出る、西川を渡るふ知る

隣

ずナ猿木の後も紙漉場に成り下田屋も無くなれり
昔して三町ありしを思へバ町も稍々一町に足らず家ガ
古道具屋なども中々多し 一條程町の狭きに大に驚
きたり 稍久しく尋ね当て行くに 留守なりしが家人にみ
ちの居所を問ふに同人は中村に居らず 直ぐ其の小居
なるの事にて某料亭迄行くに 其細なりける所に
今て家庫ありてあり、みちは 三ッ井林と云ふ代言人の妾の
所に同居なして居るなりける、稍暫く其の話なとし形志
共、寛持時葉などの馳走に成りて、帰途横田我訪
ら随分の事りに人と呆れける、西川玉雄氏に遇ひ逢
共、帰後直ちに入浴す、夫て暫く頃 小倉芳君
訪ひ来ら然西[redacted]の家が分借りらるゝなりとて
話あり 明朝を約して別る、夫是、著候への手紙
認めに出す、九時過 雨降り出しける
拾六日 水曜日 朝来晴 晩方曇

此日八時過起床、九時頃家を出で車にて、小高坂村越
前町迄行き 井上昆雄氏より訪ふに入湯中なりとの
事なりければ待つ事、少時、氏帰宅、談話少々
いたす、拾一時頃同所を辞し、梅形へ出で本町通より真
衛し、吉村を訪ひ、金を拾五銭だけ遣はす、小倉
氏を訪ふ 芳君前に北堂に逢ふ、庭に外出 義枝と
云ふ人ありける、氏在り 西隣の家を見る、先づ堪へ
らるべきならんと思ひる 小倉氏方に帰りて又同氏
親戚の[redacted]縁某氏に遇ひて種々 雑談す 拾二時過
同所を出で河端を西行し、梅形の通りに出る所の越
戸坂越を北行するに 山よりは迄然、我が宿を訪ひけ
る 帰りけるに 河端の変りし事 驚くまでなり
昔に見し所の濁り入て寒りて 九なき所で見一の
りける、午後二時頃、みちを訪ひ 寄しぬまで、西唐
人町の家に下女を置くのねだならぬとの事なりまでに

みちず王子を異きたり

若し行き人一ぴき無くそ行きてそ如何やとそふ事も
[illegible]すら能はぬ時なれば[illegible]と答へぬ、扨の話
の中に久米良助君[illegible]ほど[illegible]
種々談話すり日本文学の事[illegible]
河田正徹氏の宿所[illegible]
女の事も[illegible]人[illegible]約束し[illegible]
えぶゾー都合悪[illegible]
頼まんと[illegible]き筈[illegible]
て、晩食す[illegible]
と聞きたるより依り下女[illegible]
二拾四五[illegible]

[illegible]下女て我[illegible]二拾位小て妻もてる[illegible]
[illegible]て笑ひ[illegible]
奥の細道[illegible]
拾七日[illegible]曜日朝来墨、正午[illegible]
昨日生前[illegible]
分り居らざりけまそ、学校[illegible]
[illegible]使[illegible]
[illegible]
[illegible]ちて聞[illegible]
[illegible]ふ、我も聞き込みたる事[illegible]
つ事とも思[illegible]
で午前[illegible]
種々雑談す氏て永々後[illegible]

由にて、後藤伯の金玉均
話まで、氏の手と同
更紗を確めて、氏
田岡君と漢学の生
四月四日家を辞
宇都宮川を泊
す、窓を排
端居うかうのくるま
はがいありたき時前帰名
拾八日金曜日朝来晴
廿九日朝、時過家を出で
壱仮生の室に導一のきて
時語る、日室、我見捨て、
す語る、氏を
廊下にて『モア』氏と逢
ケ
庭にありよ
今月町の梅月
まで人来

東京占りの新
国会開設の
手紙を参照
出

丁寧なる人物にて三坂の室よも行き、柏井氏が手助
けす、其の次の時室より日室に行きたるよ『モア』氏の作文の
時より、諸所より種々の質問を受けた閉口なり逃げ
出せり、拾二時前、学校を出で帰宿す、食後少なく
休み、午後内井上民雄君
柏井氏来たり、種々学校の事など語り三時頃
井上氏より四時前柏井氏帰る、四時過家をあで南午
前の梅月氏と伏水迄、本所なる井上君に行逢て
梅月家にて安立郎の為に伊奈侯の媒妁にて
り安立郎氏にて我の為に伊奈侯の媒妁にて
き二三日の間に見へざる由にて、伊奈侯氏より
逢家人皆の喜ぶ事なり、伯母より
喜びを云ふ伯母より
ホを聞きたるよ生く
晩食を御食せらまて八時過帰宿す、新聞を

通

讀みたり

拾九日土曜日　朝来晴天好天気

廿日朝八時三拾分頃学校へ着す、机の上に新聞并

に親父よりの手紙あり　とや驚くと共に無事着

萬吉喜び限りなし、豊川安産の事形容記えあり　又無事着萬吉

の写真喜悦の体　学校の教師の姿　字句

総の無作文の試験を終す、向題を与へ　拾四

作文書すより四時半頃出来　二階より西洋人の云ふ

事分らず、通譯を頼みて　との事　それより

さそく　久平の出迎ひを乞ふ　二階の室に行く

に文法の問題を西洋人の出したる所の基き二の方

らねそ　難譯也　それより解き始めたるに

そ、生々さつと一通り話して　居て質問あるおと

おく々間へ共、隨分つまらぬ問題の意味の分

らぬそれ　ばかり　悩んど　一時書の能も

立づめの鏡を書けおる　大きな疲労也り　拾二

時前歸宅直ちに書食、作文の答案を一々評点を

付す、拾弐年頃、家を出で学校へ行く三里の文法て

池氏雲持を訪ふ　丑衛氏と共に　年の日所を出で　帯屋町の

武田氏を訪ふ　丑衛氏と共々話り、日暮を出で、南

行し河端より西行し　西隣の家を

見んとするに　宴会り居るその事形まそ、芸子

有の如き所より　同道し、芸君を北行し

今子橋の如き所まで　芸君と共ふ

答案小評点を付す、　十一時半頃也り、歸宿後作文

也、夜ふけて、宿屋の隣家も寝静まりて　人々

駅まで咽ふけまそ、家を出で　灯燈行列　蜜柑形

の如き　灯燈行列　数の川田を訪ふ

ふ前田と云ふ大学生の泊り居る所形りけり

氏をも中学校合同事件の交渉ぼど終ニー為ー
川田氏を中心に朝餉を共にする、東京の財界とそ違
つた香ばしり、指折頃ぶ
燈を迎ニー、歸宿す、部
女房等お隣さんよりさし
房枝で宿主滴を祝ひて
指折過ぎ秋蕎すと共
二指の々解する朝早暑
昨今午前指折起床、食事
お田所氏お出でし、川田の
由を聞ニり、稍々話ニ
日通ニー、青山氏の所を
けさまつて土曜揺所の
お氏の父様ニまり、種々
歸宿ニり、晩食後、

亜の内より以前借金の割金弐円五拾弐也引去り
拾六円六拾六銭七厘を受取りて帰宅す、二時過ぎにや
ありけん青山氏訪来りしかば少時談話しつゝ、氏
去りしが、早稲田文学を読みしが、遠地名を
川へ死たる手紙を下女に托して郵便に投ぜし
む、桃の実を食す、東京の家に送るの書を認
む

二拾二日火曜日朝来晴天
卅日朝学校に出で、試験の結果人を聞しが、正午[redacted]
頃帰途本町の郵便局に立寄り金四円[redacted]七拾弐銭
を為替に組み送る、帰宿後二時過ぎみおを訪
ひ、共に家を見に築屋敷の方迄行きしが、佐竹氏の
持家中々宜き様なりし、三時過ぎ本町筋の文求氏
を訪ひしに見に論を贈りたり、試験答案の内から
すの課のものに評点を付す、木林沢とかいふ人の答で

芸君等の役立に係る金員の事など聞けり、震災の義捐金を三拾円出したり

毎当なりける、五時過ぎ帰宿す、小倉氏来らましかりしと下
婢云へり、晩食後南与力町の楠目を訪ひ、宿の事
など語らふに心当りあまたありとて聞き置くつんと云ふわけなき
まゝ、明日朝を約して同家を出で、小倉氏家を訪ひ、帯
君と放談す、川と云ふ君の御馳走にあづかる寫真なども
見たり、拾時頃帰宿直ちに就眠

二拾三日水曜日朝来晴
卅日朝八時過ぎ起床顔を洗ひてありし時に吉川貞
樹の父なる人来たり、少時談話の後氏去る、朝食
後直ちに家を出で学校に行き青山氏が逢ひ、谷氏
も今頃行けば在宅ならやと聞ひたるに[redacted]居らる、
ならんとの事なりければ同所を出で帯屋町の西内氏を
抑き武田氏に面会す、去つてし使者屋橋を渡り
種々に迂回して九反田に出で、行過ぎて或る所にて
問ひて知ると得たり、車中休えて不安なりけるも

ゐ、後へ戻つて最初の橋を渡り種崎町はまやの町を通つて、本町ゐ出で、或る道具屋にて机本を見掛けまゐ伊達娘恩讐鹿子』『雪多女郎波枕』の二つを拾ひ求めて来む南方本町ゐ行き昨夜の事ゐ関ひ、彼の心当りの所をだめ訪まゐ、今つ心当りあるとでそれ晩迄ゐ聞き置くのみと云ゐまゐて、日家を出でゝ直ぐゐ帰宿りて、東京より来歌学会雑誌、昨日の手紙一通を読み始め五時前迄ゐ読みまり、みよまりて羽織を見やて呉きまゐ、気ゐ白木綿五尺ゐ一ぱり買ひ来らまり、晩食ゐまゐ、二時過学校のお使ひ来て駿河屋ゐ唐人町の寿倉氏を訪ひたまゐ、言葉ゐ蔓延ゐ其の都もなき小野君不在ゐ付き帰宿後、裏ゐ行くよ、仏壇の所も外きたものまゝ

取りけきゐ、まつて九時ゐ谷氏を訪ひ、重中君ゐ在宅ゐて稽古を終ります、雨ゐ降る由ゐり、海南学校の会日の事ゐ語まり、谷氏ゐて去日海南学校ゐ長の人との話ありたり、だ時頃同家を辞し帰宿後寝床の内ゐて都の花を少々読む中ゐ夢ゐ入り候

二拾四日木曜日朝来半曇、昼晴、寒シ

昼前ゐ学校ゐ行き、田辺ゐお学校ゐ行きる、田昨朝ゐ時前ゐ出で、即ち手つだゐて、定数柏井外一名の教師ありて定数を表ゐ記入す、拾二時過ゐ終り、柏井氏と時計ゐ曲ゐ忻迄同道ゐ別まて帰宿ゐ、書食後、都の花を読み三時過ぎまり、永を出でゐ谷氏ゐ行き、ゐ不在ゐ付き帰宅ゐ、重中君不在ゐ付き使者屋敷の秋まで行き、円忻ゐ車ゐ傭ゐて谷氏ゐ訪ゐ、重中君不在ゐ付き帰宅ゐ、[redacted]夫人ゐ会ひ荷物ゐ雪ゐ

車ふ載せ、一ほ二の年ら、其辺ふ居りたる事ま
傭ひて、三つの荷を車ふて南与力町の寓目ふ行
き書物其ふ衣類の方を預け、夜具包ふ拵へ
で持参りて、蒲団を敷きて下駄を取り出めふ、幾
おみまり処、四人ふ下駄ま足を踏る大喜ふて
去まり、下駄ま忘、と、単履ま穿と我二枚一ま重ま
求め、若主人と雑話す、此日ま学校ふて、姉の書状
ま接一処、随分筑前の不便ふ事ま悲みつくあ
らう様ふ、郵便ふ
我ま保ふ、姉の、我ふありの有様
じ処、七時前ふ姉ふ
頃憎き一満雪ま置ま
廿五日 金曜日 朝未晴天
昨日朝八時前寝起、朝食後学校ふ歩づ、日課受持の
相談ふ

両氏小集して、幸町通りの開成書店より「有職集会」を
相関会の末八時ごろ来あつ。南与力町の横田小行ふ伊予侯
氏を宅訪りき。次時過ぎ帰途下村の家を借すとの
事あり、そこへ見えまし。酔う両日うらす、西唐人町
の十会氏を招き、都の先七校等を借手、茶君と語ふ少
時、六時過ぎ辞す、夕照西山を彩り、山景河水ふ映ず
河向うの村舎ふ点ずる煙二ヶ三ヶ見ふも他国を見ると
帰途後ふ晩食八活す、雪持の松誰書ふ名ふ
二拾六日土曜日朝来晴又
昨日午前九時前起床、朝食後直ちに学校へ出勤
み始む、午二時頃相井君来訪、氏と種々雑話す、閑
成堂まで落語を観ようとの話ありしふ二時前
氏帰り手ふ。ふうが事を読み虞ふ、午後二時
出勤して納ふ文ふを修まり、然れども朝来読む所
催々六拾四頁ふ過ぎず、此の書を全部大抵読む
ふ従つて解するを得るも知れず。今暫之のみ。若し
初学の徒の為ふ註釈ありしふ尚ふ一層の益ふ
あらんか。

二拾七日日曜日朝来晴又
昨日朝より家を出でず、午後爾前
之文ふ文ふ終まり、閑居の一日ふ過ぐ。
み得ず。所催ふ三拾頁、之ふ又ふ感慨の種ありしふ
明日過みおを訪ふ約束ふ。
上の段き事敬遠ふ。
ふ往かず、晩食後ふ外
つて中島町を経て唐人町の
放談す、降りみ川服の

青山図書館

高知新報社
[redacted]廿五日解
散せらるゝ由
の広告あり

決す、此日午前の上告却下あり、君と権次
[redacted]居る、時刻[redacted]実に午後[redacted]
[redacted]、種々の辛苦艱難を嘗めて種々心を労
し、終に着手せんとやうやく[redacted]
めん思い出らざる我行[redacted]
の陰雲を払て斯る[redacted]と感ずる事[redacted]
ぶる事[redacted]
りきんで[redacted]

二拾八日月曜日朝来雪[redacted]
皆朝就寝中みよまり[redacted]
[redacted]
[redacted]

十時前日本を出で、歸途幸町の開成[redacted]を訪ひ、藩論諸々一圓さそあめ悲、すて[redacted]下婢東京まての乘圓共もの[redacted]候へ大石ひまりみり[redacted]七ツ時河田氏の話ひど[redacted]あり、同人おも[redacted]同人去りて[redacted]村前井上氏[redacted]日も遊ぎまして[redacted]ちり悲、藩論語の細川家の部

七ツ々讀み畢

廿九日火曜日朝来晴天

昨日午前九時前起床、朝食後直ちに家を出で幸町通を屋大物通りより南行し川ふ沿ひて東行し、九反田の海南学校へ行き川田小生氏に教員校長等を紹ひ、生徒を皆中々靜粛に整列し、生徒共辺にてさまでの軍陣の効無ひも見受ひ、書物讀み方きまり悲、横山ん[redacted]と思ふる、ばイヨ[redacted]氏とツイ話り悲、拾二時日所を辞し、[redacted]し、種崎町の谷内氏を訪ひ、直ちに引續ひ前氏を訪ふ不在、みおや訪ひて西川氏を訪ふ不在、病人の容体悪けまそとて皆困も吉氏留守居りけり、ちつと[redacted]訪ふ、昨日も来合せ居りて笑話等、二時過柏井君も来合せ居りて、畑草を呑む事ふ付いて道ふ新聞を見る、去る廿二日の日本ふて横山海軍大臣の演説並ふ議場の光景等詳ふ現然と記ふ有り、文学談をふ々ありて七時前歸宿す、八時半頃井上氏乃ち使[redacted]あり明日の山行ふて午前九時頃の出発ふやんと申ふ来り悲、

廿日水曜日朝来晴、午後一時頃曇、夜ふ入て雨

昨日朝八時半頃起床、朝食後、服装をつゝあり ふ井上氏来る、廿五氏ならびふ店先きふ出でゝ待ち合せて出行き悲、[redacted]先きふて

待つ事かけ井上氏東方より歸り来るを、氏丸
外の松の並木屋敷を穿ち、鳥打帽を頂き、イナヨ
客の袂を携へ立ちいでを、伴ふて井町通の濱田氏
を訪ふ、客を、柏井、野村、の二氏と落ちあひ、濱
田野村の二氏も和對面の名產かりける、柏井濱
田の二氏も脚絆、鞋の扮ん出立ちかりける、井上
氏神谷を曰ふ東海道をその扮ん立ちかりしを、濱
氏安村含み出、直ちに向所と出で、本町通を南ゐ
折れ鏡川の假橋を渡りて、田畔ゐ行く、柏井濱
氏行く、村郎、[redacted]ゐ脚絆、鞋の扮ん出立ちかりける、井上
四顧寂寞、唯木溜花の候ゐあまそ、[redacted]姫
の絵も好もる丸ひも、見るさるゐすべるきゐ立の原
も、霞のうきの紅紫すぐ好るかおめとそしも
ナきど、野ゐ中ゐ一田の面のさま、そおおお、ゐの高
き岡ゐのぞる常盤木の原と永野村を又丸

非常の好天気
ゐて伴ゐま薄
入洞窟ゐ探
探ゐど東部
お悦月中旬頃
気候かり

指て歸ゐ田ゐです形る、元手一方を見返ゐま
高知の城の眺然そそり、共辺ゐ名勝ゐるゐの好ゐ
見う、稍ゐ雑談一つて指ゐ順、鷲尾山林麓[redacted]
ゐ進一歩、村人の葬ゐを馬ゐ員せて通ぐるゐ
ゐ家ひ出、葬ゐ名車二ゐ三つあり、そゐ一ゐ休み
居ゐて家もゐむ人の扮ゐけん、我そぐろゐ小説ゐ名ゐ好
ゐ如何ゐる人の住みけん、我そぐろゐ小説ゐ名ゐ好
ゐ出、さて立ちまり一連ゐ聖ゐ好りけり、道幅
いとど狭く、そて木立繁ゐ日源し、時ゐさき指二月の末好るゐ、
人々の声ゐも、すゐーく不思議好りこの一路を右
ゐき所もあり又土のみの所もあり仕る、前右山麓
ゐ近く後ゐ山頂ゐ望ゐるゐ住ゐて場ゐ右ける、山腹
ゐ屋々息ゐ継ぎて高知市ゐ近村我下瞰ゐ
北ゐ立てる山々、鏡川の上流ゐど、指一時頃着

山を下る頃ふつ、
ご此辺了哇ま
叢中よりまぬかれ
まぐこの口おそろ
ぎと聞けり

久山頂より彼方の、南の方て長濱の松原村越て
土佐の海を見晴らし、浦戸湾内にある島々そ々
ゝ指するが如く、其間ゝ隠見すること舟一二葉、いづ
きもつき点、眺めあかそ、立石山、吸江寺衛
所ど眼下にあり、山頂そこ、風雪を強きかやゝ並のみ
ぞ生ひける、そこ折を[illegible]
今は井上氏[illegible]行路の
食ひ処、[illegible]氏そ且食し且語ま、扨まだ生き山
麓ゝ近づきつる時、濱
下ゟそも濱ゝ[illegible]行き
決議[illegible]
ゐ下る、途中々陳ゟもつ
ゝ枯ゝすゝきのりて下る、井上氏見事て、何の杖を
僕ゟ陰[illegible]
成ゟ附ゝ、迂曲ゟて東ゟ下らんと
す

さて、村人の馬追ゟもれゟ者ゟ、長濱ゟ行ゟ者ゟ道ゟ
ゝ後へ戻ゟて西下せずんゟ遠しとゝゟゝ、ゟのま
ゝ下ゟそ、田路ゟあて、話ゟつ実ゟつ送む
二つゟ分ゟゟ所ゟ歩ゟ、濱田氏声ゟ挙けて、三四町先
きゐる人ゟ何ゟ[illegible]道行きてよのらん一のと問ゟ
其人右の道行き給へと答ゟ、氏ゟ始めゟさん
と叱び掛けゟ[illegible]振り向ゟ
り、ニヤゟ而眼鏡の
笑ゟ忘、志附過ぎゟ
さゟ野中安造氏の仁淀川ゟ
苦しゟ器械ゟそも昭き
ゟき事業ゟ成し遂げゟ
ゐ実ゟ盛嘆ゟ堪ざ
とゟ寺ありて、長濱我部元親の肖像あり、ゟ寺
取りけまぐ治氏之き

世さで共の紀行が一大興味
素神社の見附の松群があ
密相対合ひ、左右て元親の
ひ間あり、共の南の山林地
あり其他人の頼めで、見せ
きで、伴まる傾代松生さん
三氏は、み出等も二氏の屋
甘蔗の畑などを
の森の入り、二氏神行一
行き先手七と
即ち拍まるて駄
彦氏の門前ふ至まで井上濱田
判中から神社を留守まて
上氏大聲こみ澄し
まる元親公の

殿を祭りて、頗る見るべき雑踏場の画あり、其まゝ列べて土佐国重森三渓と署名したる額二面あり、行きも来りも一つて虎が子、暫時も息殿神殿を開き、準備出来ましたへとの事ゆゑ即ち尾一ヘ神殿の軒下に莚を敷きて其の上にすわらせられ、先づ高知行所にやがて出ましたる々町一の五郎ふと答へたるまゝ、たゞのと、そのまゝ黙ーの忽ち拍子抜けて高天ご神止まり云々と祈り出ましたる山伏、なほ同四人の後ろにさゞめき笑ひ居ましたが、やがて笑ひ終ると共に、おのれ畜生ーと思へど可笑しさ堪へ切れず、自らも笑ひ出でましたが、笑ひ終ると共に、先刻以来の苦心水泡と帰すべきを付けて笑顔、引き隠しぬ。祈禱終りて、いざ拝み給へとて、錦の御戸帳を横に引き上げ給ふるを見れば、一つの神形の

帯とてすわらせられたまゝ、だらけ形ばかりの礼をなし給ふるのみにて、中少将の暗々にて酷く大形なる形りけり、へざりけまそべ、満面大剣が少しも畏れ入ず強ちあるべきやとそゝのかし給へども、一枚取り上げ笑ひまそりから傍らの金屏一枚取り上げ笑ひまそりけまそべ、猶能く見るに伝説帯の姿おーして右手みの筋ばかり、左手も見えず、おて大刀の柄のみでまそりける、面無色里ー、容貌も迫実、眼光さすがの鋭く、其頭寛暗の量ある鉄表す、明長にこりける、始め神ものゝ帳台より今にも立上りて見べき気色もなりまそりけるほどと云ふのみ。

事なやめず、是しきの敬拝唱ふるにおはまそりて帳台より、彼の『あま敬』『和敬』とゝふみてまそりけ上げ笑ひ

可しをて待ち乍ら大つ
揖取りけるが、前刻より
声を上げて「馬鹿者共
すでうの笑しさを堪
船の歸るとて、金杯拾
宮の原にて、そまより日
味付飯り出でゝ、話中
下のそこ此揚ぎめより
野付まで、おつ、浦戸湾の
しも、先日まりたる時
陸我思のみおりけまで
さり志ゞで、今日は佐島、神
の猪鳴我田等弁財
ある岡我通りて、新
高知県松尾村にて上
船にまりけまで

[illegible]歸前[illegible]、夜の
みまお待ちまし、二ツ木村と云ふ
俗物取り種々談話まり陸
賃を拂ひ始め、實相寺
を歸と拾分頃就蓐

三拾一日木曜日朝来雨
昨日朝九時起床、朝
間しし日記を付け
過夜をおりて駄
前の井上氏を訪
りて柏井氏も訪
も無ければ、雨氏と共に
ばゞ也ければ、
郵便切手乞ふ端書

より晴
食後入浴す、夜の
三ツ木村と云ふ人まり
種々談話まり
を拂ひ始め、實相寺
を歸と拾分頃就蓐

三拾一日木曜日朝来雨
昨日朝九時起床、朝
間しし日記を付け
過夜をおりて駄
前の井上氏を訪
りて柏井氏も訪
も無ければ、雨氏と共に
ばゞ也ければ、
郵便切手乞ふ端書

へ此年始状を認めぬ一時吸一先ず書始
一句を祝ふ　諸書肆賀状を又徳
鳴呼明治廿三年は我国開闢以来の一変革
吾邦文明の始めて現はれたる年なり
事共なまろ、思ひ〳〵事を成めんのみ
例の仮り文字の重なる事件の多
さゝりなる七名を宮中に召して
講書を侍聴たまふ　正月小国会つ
ゐて、廿日衆議院の安保議員親密
二月十日青山御所の内外に
祭り石柳町より牛肉店我
町を経りて、帰る

六月二拾四日　元老院を廃して
を設め一事也七月中旬
び一事、四ヶ所へ大巡
八月以降財政上の困難甚
各庁官員の減少
天皇陛下御年十九歳
拾二月中、北
拾二月八日出御西京
日拾二日の土曜丸
ど甚の重要なる事

遥吟

年の瀬や、
身一つの
寒さこのまる

芝雪

原方愛氏来る、氏ハ東京の耶蘇教才子の模範たり、井上氏訪ひ来りきしが去る廿日此出来事を語りて大笑す、井氏去り、柏井氏来る、篠氏去り、柏井氏と蜜柑我食ふ、柏井氏去り余も入浴し、氏衣類を思道みつゝありけるに若君来らせ濱田次いで来らせたり、両氏とハ午后文学談をなせ、廿节君と余の日誌を閲し笑ひぬ、七時頃両氏共去りぬ、晩食志つゝありしに、北川貞男氏南洋青年学会會員、中島氏並我侍りぬ来まり志あそび、余ハ之等の人々と九時迄談話しつゝ時々去りて於時寝就眠しぬ

廿の日まり二拾五と云ふ年始まる、然まど前年子を継ぎて敢て宮ニて我希望を述べざるべし困苦人て舊習慣ニ依る者頗る多けれ市中ハ只稍や商等の人々の年頭ニ廻る者のみえたり、婦人の衣服の西洋なるものなど中々志ゆかし、大き縞模様など付けたる衣服と羽子於二三の娘なども居るも来るとも見ゆ少しく代りて様子ニ思ひぬ、羽根并ぶ娘も居りますもの、織島帳でず。童も居りし、只何と無く勢なきに正月を解しぬ

我が身の上に付きて特書すべき事件の無日に起りたる者あり、それハ、わが、むあし氏を訪ねや氏余が随ひて室に導きぬ、座ニ着きむありしあり、む氏余にバイブルを与へて読み貫祈りく事我請ふ、余ハ大きに迷惑し、去日てありしか、む氏下婢に「我呼びまりし」席に一つの志めたり、余ハ巳む得ず「許し給へ、余ハ耶蘇教の儀式知らず不信を自服すべし」と む氏云ふ「経論みずして只跪くのみにてよし」と余即ちバイブルの数節我

池
恒太

読み、祈祷のあと立ちて教会の費した
り、鳴呼昨年の首を長濱の神前に頂きし
今年の始めをも神前に祈る、さてもその間の神
の豪恩のほどよ

二日土曜日 朝半曇又雨暮方晴
昨日で前夜来の雨もて道悪こすりけき也、拘留前
家を出でて本町筋の久米氏を訪ひ大物定まりたる上西
帰宿後、潮立ヶ行あくも森氏も滝より出所氏も見
支行達の[redacted]明かにて知る事を得ず[redacted]行きたるも不
在ゆえ、[redacted]氏満宮より遂の後中口ゟ
神さびたり、校坂を登り[redacted]翌日より高坂の両町
ゟ移りその事終りけさそ、帰途ゟ就く大
揚ぎわにて、学校眺むるの間中の景殊によく、
十名氏ゟ立ち川ゟを訪ひ、帰宿後直ちゟ

書食す、午後雲梅林氏[redacted]
氏訪ひ来、稔々[redacted]話し、氏より、手
紙を認む、夜ゟ雨で降る
三日日曜日朝未晴天元
也日朝永国寺町の地
ゟ指て前通帰宿早稲田文学の六号ゟ及び共
同社ゟ来書披見す
明後日ゟ[redacted]
之ゟ落一つ氏より二時前
柏井氏を訪ひ夫[redacted]
落所ゟ眺む、[redacted]
文学[redacted]
訪ひ種々談話す、氏の
ゟて種々書ゟ[redacted]
ゟ[redacted]

を讀む、讀賣新聞を讀む、江口氏への手紙認
めつゝ、みよまりて朝食
す、
四日月曜日 朝半曇雲午後晴
昨日午前指時頃より雨降り、晩時分の雨は行き止りとなりぬ、なかなか丁目の高橋
とよき老人の国宝の精しき話を聞きつゝ高橋氏の庭など作り迄ひぬ、指二時辞す、帰途
過みよりて少し休む、作事頼む、二指弐両、排取の
年賀を払本町三丁目、井上、柏井、二氏より田岡君
ありき、井上氏の不在なりき、田岡君
より訪ひ種々接待す、土陽新聞の人々どまりぬ
五時頃八沈す、晩食後
五時頃前日家より婦人六時頃八沈す、晩食後
あるあよりの手紙、状あり、豊川両家より
まゐとの事、遠
慮りける、去る卅、世一両日の讀賣新聞なき

井村氏を訪ひ
お時借る、

む、腹摂拳み打て出でおき我候補者の活躍など中々面
白のりき、内閣総理大臣やり
五日火曜日 朝を曇雲午後より快晴
午前八時前起床、朝食後、旅籠料の勘定書を書き、荷情
求まるる、主人不在ゆえ
けまをで、荷物を行李に詰め、食ひ残し丼々等
食ひおをで、荷物を行李に詰め、食ひ残し丼々等
りけるまで、指時頃柄久里を出き、柏井氏を訪
ふ遠わ一車を傭ひて西唐人町の川幸方小まり
吉右郎氏の三畳の唐代の硯、換ひおをつ、あり、書直後
南与力町の横目を訪ひ、荷物を清ひ車に積み
て川幸を持ち来り、書物を取り出し一冊ずつ
別べ次、三時前家を出で、川幸にて弁当を
求ひ、指ら家の、御宿より行きり、川幸の番頭を
る名刺を下女より取りたん人の店

川本屋
小倉氏
の西隣
にあり

中

所を知らせんがためなり、日所改まで東行する
数間井上氏を行過ぎ、家の前を南通りニ
大橋を渡り潮江村の田所氏を訪ひ、不在故引
きそで東行ニ河を沿ひて雑喉場の橋を渡り
七行ニ種崎町にて観壱個を拾五銭にて求め、谷
氏を訪ふ。留守ニ付、ニ町の唐物屋にて『毛掃』を求
め、本町十字にて、中島町を通り、帰家すまそ、みよ
まり居まり。桃ろびらんの台を持まり呈
きたり、同人よりおせんともちるを受取らず、只
実貴重ニ候ニ付拝ろう、五時頃四人去り忠、手
紙并ニ帯の洗濯ニ頼む、此の日て大分紙幣の上
包ニ用ひたり、子供ニ祝ひの一酔をも見掛け
忠、下の河原にて相撲の興行ありけり、見人のとそ思
ひニのどもかニ晩ろうけまそ立寄らず、夜ニ入ニ帰
島崎小倉、赤田、花島の諸氏ニ書状ニて接ニ忠

宿水曜日朝未晴ニ
此日学校ニ出ず、洋画の事ニ付き来訪ニ
明日帰下積みの荷場所ニ教へて帰る、此日午後ニ時
過南洋書学会の書まり、ニ忠ひつとの事を請ず可
きそ、来週ニ毎火曜日ニそ来まそ忠、論理学ニを貸す
き由ニ付ニ忠、田岡君来
夜ニ入ニ下積みニ取ニ
七日木曜日朝未晴天
此日ニ学校ニて、並作文、読本、五、ニ、クメイル、クライブ
文法等を教ニ五、ニ名ニ付ニ忠ニて少ニも
解せざる様ニ教ニ所ありき
家ニ帰りたるニ、机上ニ矢野芳弘の名刺と江口氏
の手ろあり、名刺ニ二三日前帰郷ニまる由ニ
ありけまそ、直ニ永なニ
尋ねありけまそ、夜ニ入ニ下積中み

お手り後曜物と持隊
英学好教へる事好物す
八日金曜日朝来晴天
廿日学校ヘ出ヅ、物理の時間ヲ終、平賀陳内の
誌を取つつ、放課後直ちに帰宅、中島町
の片岡氏を訪ふ、主宅ヲ訪ひ、雑話中、青山氏より其
他有志数名来り、解散の事ヲ談ずる為め、会合ヲ催ふす事ヲ
告げ退去せり、夫より矢野氏を訪ひ、みおの不在ヲ
日行し、其きよりも川端氏を訪ひ、矢野
けまで、まつて川端氏を訪ひ、矢野
の不在ヲ聞き、まつ立戻りてみおヲ迎ひ
晩方まで話す、牛肉飯ヲ食事ヲ来ら、蜜柑ヲ喫して
世ヲ食事ヲ来ら、蜜柑ヲ喫して
々話ー来る拾日ヲ約し、二夜ヲ泊り矢野氏を訪ひ種
ーヲ帰り出、家ヲ下漢州湾み行ヲ奇き由ヲ約
下漢みヲ取り

九日土曜日朝来晴天
廿日学校ヘ拾一時半ヲ終て帰宅
西川の竜安永眠の由申越
へヲ向家ヲ訪ひ弔辞ヲ述べ、矢野氏ヲ訪ひ
五時ヲ終ヲ、帰宅ヲ
ヲ聞きつもり明事形
うども、明後日の下漢ヲ
りき、廿日午前の汽
指日ヲ曜日朝来晴、好天
廿日朝八時寝起、九時頃矢野氏来り、共ヲ富弁
ヲで河ヲつけてそりまや町
ヲ新改傳ひて漢き出
この夜半伏傳ひて行ヲ
出、畑本ヲ行き、義姉ヲ迎ひ畑本氏みも達ひ
種々談話ヲ出、飯の

[illegible]
[illegible]
[illegible]

指六日土曜 朝来晴天
五日学校休日ゆえ
開るまで深夢を
両読本を読む
小形の処、帰寓後、
附読むべくあり
おやつ後ち三冊
二時過抹形を行き
まもなく駿
湯へ
ついでに
延命軒へ行き
で、酒も
一時頃
時頃国へ
帰る

昨夜半
訪ずれ
ぶるえ
朝寒
汽車

ら
ま
で
て
、
来
髪
を
結
う
や
、
本
を
読
ま
す
。
君
子
陰
い
て
、
手
紙
も
し
て
帰
指
曜
。
木
曜
朝
来
晴
昨
日
学
校
へ
行
き
、
帰
寓
後
下
宿
へ
行
き
、
明
日
延
命
軒
へ
行
き
、
又
菅
君
を
訪
ず
れ
、
帰
寓
。
夜
雨
指
曜
日
朝
来
曇
、
日
駄
を
き
ま
し
て
学
校
へ
行
き
、
帰
寓
ま
す
、
下
宿
へ
行
き
、
明
日
延
命
軒
へ
行
き
、
又
菅
君
を
訪
ず
れ
、
帰
寓
。
夜
雨

池氏同道

代とも知れり、七時過日所を出で、津駅にて電車を乗かへて、鶴宮にて人力を雇ひ行きぬ、其の家を尋ねて、頼もうと云ひ入れぬ、指七日の曜日天

翌朝八時過ぎ寝起、井戸の釣べなりけるそ、

昔君の家と聞ある井なれども、顔も洗へく、其きれあり、容子典太ざるにて、雪みて、

指昨日来りけるそ、時刻書

食し、共に五台山に行き、招魂社なども見又、

珠堂なども見回わり、絶頂より、諏訪湖の

眺めなど、殊の外、景色にて、海のよ

就きては、五時頃帰宅、

地を通りけるが故か、頗る賑ふ、

夜に入り、昔君材、訪ひ給ひぬ、

指八日朝曜日天

指九日火曜日朝来晴天

昨日学校より九時過ぎで出ぬ、物理の時間にて、此の代

りの心理学教入るとの事なれど

の話ありて、授業もせず

書を読み、帰り又行きて、地文にて、雑話ありて、

おそ来る、五時頃、帰宅、後、明日の下ごしらへ、

ぴつたりの伊四百を推せど四方の山々白妙

指十日水曜日朝来晴天

昨日、雪、前夜来の寒尾の秋雪

て、鏡阿弥陀如来を布のきる景色、

みじとや云わん、知るおき、河を傳ひて大船の往来

六、花を降らす、河

づ、恍もよし、田所氏も出校

をすべつて転び、学校の念、越戸よ

すきて、二時半過ぎ、学校の講堂に行き、

市内の教員会なり

座長は松村蘭如氏なり。

に、未だ人一人もあらず、待つ事凡そ一時餘、人漸
く集まり、四時過、規則案の討議に取り掛りしが、会
頭森吉田氏の如き人々重に議したりしが、会
員の多数之面倒なりとや思ひけん、皆原
案に決せんとするの傾きありしが、修正説を唱へ
たり。然るに遂に二の条も不幸の餘り立て第十條
の修正説、並に第拾五條規則改正の件に付き
之を論じたるに、或る人之大きに感動したるも
ありて、之を賛せし為め、改正党勝利を得たり。
午後六時過に至りても未だ三次会の二、三の議事
残りければ、猶明日引續きて三次会を開き議員の
投票等を行ふ事となし散会せり。帰寓後、明日の課
業の下読みに取掛り居たるに、八時過、南洋青年
学会の者余を呼びに来たり、本日の市部会
に臨みたる故に、今も課業を調ぶるに忙わし

とて断りたれ、八時頃小倉氏を訪ひ、手紙の上書きなれ
ど甚だ不出来なりし故認めて、雑談に時移り、暫くして帰
りしは拾時過頃なり

二拾日水曜日 朝来曇雪降りしが午後に晴

昨日学校に行く、例の如く、昨日て拾一時過の久米氏の時間
に三級生が逃げたりとて、幹事の所へ呼び出されて
大きに叱られたる者多かりけり。午後の余の
文法の時間も随分騒がしかりけり。此の日之
日拾二拾二日五拾弐を請取りぬ。今月も市部
会あれども岡本君も臨席せんとし、三時頃迄
待つも余の寓に来らざりしなれば、三時前二人にて中学校
の講堂に行きぬれば、婦人只二人のみにてありける。待
つ事凡そ一時間余、人集まり、議事を開き、
議も随分多く出たれども、結局昨日吉田氏主張
の総会を一度開く事に第九條を修正して

格

岡山縣
川上鐘一
山ヶ五
る

…盛之助殿より容られ…他の動議に至れ…
…於るものゝごとらず…
…翌日の課業は例…
…雪の話などありて大…
二拾一日木曜日 朝未晴天
…朝八時頃…
…氏より手紙を…
…の事など記…
種崎町の第七銀行…
…と振出し貰ひ…
…帰途谷内氏を…
…薬取扱ひ中大…
…とて奮信の君…
…帰る…課業の下…
…君より北堂の…

時過帰寓、父母、豊之助殿より…
状を認め…下元より答る書状も…
二拾二日 金曜日 朝未晴天
…学校へ出る事例の…
…午後七時まの…
送る…時過就眠
二拾三日 土曜日 朝未晴天
…衣を厚うして学校へ出づ、帰寓後二思…
…歌など唄ひて時を費し六時頃より出しゝ…
…ふらふら不…
…午後…晩食…
…君訪ひ来る…
り…七時頃…
…読む…
二拾四日 日曜日 朝未晴天

朝より空を出でず、午前拾時頃、世子君の教
を行のるゝを見て、時雨岡に
タ〻と降りみたり、立時過、二里道の空より首
をもたげたる小谷君おわせ堂も障子を開けて顔出
し外にて今夜若し心持宜しくば餅を食べやまも
と云わまゝそのまゝ七時頃若君方おきぬ、か時おきて
まり外にて、手わ地文学子並物理をかゝ積也
美夫を語る、午おき、おかゆ出たり

廿五日月曜日 朝未晴
此日朝拾時前学校へ行き、課業を授け、二時
前放課後帰寓、頭未だ止まず大きゝ困難
せり、課業の下積だけをすまし ぬ

廿六日火曜日 朝未晴
此日学校へ出で学中のめく授業を了す、
終りて帰寓後家内の暫時休息し、四時過ぎ

りみよを訪ひ鶴の宮辺を信り、審相多び
のまゝ家に留まりて食事ひぬ七時頃帰る、南洋青
年学舎あり人来りまでとて断りぬ、小谷氏も
廿七日水曜日 朝未晴
此日て前日来の頭痛未だ癒ざりけまで、学
校を休み拾時頃家を出で井上柏井二氏を訪ふ
ふ何まても不在なりけまで、南行おて築垂敷を
出で西へ向ひ数町行きけまで、板子ば假橋を越へて向
行くみいとも古き鳥居あり、けまでそれ見ゆる
ゆる高き石の坂あり、ぬ何かる
りて、行けで一社神さびたる社あり、ぬ何かる
神社の参りけん知らず、社内をゆ周遊ま
えきて丁田甫のうね歩いて東行するゆ河原
ゆ出でい、行き沿り悠、助ち足袋をぬきて河

夜小倉君を訪ふ

主席する丸善の二階の隅より七八寸の四角の厚さの板橋を渡りて南の堤を歩みて東行し一丈神楽坂を越へて歸る時は拾二時過ぎなりき、日なが〳〵と夜ふくるを知らず

廿八日木曜日 朝来晴
昨日学校を出づる前、地文学を岡本氏に譲るまゝにて、昨日早稲田文学及び我輩の郵寓後早文学社より来れる原稿を讀み、夜ふけて東京より帰れる北川貞男氏訪問を讀み了り、讀み了る。

廿九日金曜日 朝来晴
昨日学校を出づる前、地文学を岡本氏に譲るまゝにて、昨日早稲田文学及び我輩の郵寓後早文学社より来れる原稿を讀み、夜ふけて東京より帰れる北川貞男氏訪問を讀み了り、讀み了る。

同所を出でて本町を東行し一橋崎町を行き、『井筒女之助』を越して『井筒女之助』を訪ふ、未だ寝ねず、種々の事を談じ、十一時過ぎ歸寓

三十日土曜日 朝来晴天
昨日朝九時過起床、朝食後、朝の掃除をなす、十時前同家を出でて田岡君を訪ひ、正楠氏と共に、三代勢田を見る、東西南北の戦ひたる事、此地にて高岡郡斗賀野の戦ひたる事、此地にて高岡郡に於ける戦ひたる事等の談話を聞き、午後一時過ぎ歸寓

自由党員を斬殺するの報あるや於ては
二時前みよを訪ふの雑
然一のこと
志、三時過歸寓、午後五時過南与力町の楠
月、村紡紗社代表伊香保氏南屋敷妹義
の活代あり、雑煮の膳を
酔ふて種々の咄をなし、七時過歸寓
九時頃お客氏も訪ひたるも
指時まで雑話す、明日教會ヘ行之つきを約
す、

二拾一日々曜日朝来曇雨ざ々午後七晴
昨日午前九時前起、拾時前ヘ會君母子及
び外山氏と教會ヘ同行す、柏井氏ヘ遇ひ席
を共にす、野村氏も来りあり、牧師吉岡氏
の三牧十字架ヘこふ題の説教あり、柏井君の

家ヘ同行する筈なりしも教會を出づ、井上、富田
の両氏ヘ遇ひ所にて柳氏
共ヘ行き共、種々談話せり、去る日香美郡の
北村氏を訪ひし主人のお
の内巡査ありとの事
る由なりと話あり
項書置食、三時過家を
氏を訪ひ、種々談話す、雑
歸寓後翌廿日柏下當
ありしをかゝ境
ら来る、夜を貸す、
二月一日曜日朝来晴
廿日朝九時頃寝起
みとの事なりしので
と見るに二三分前

廿日歸庭
村を置
下方松氏来
早稲田文学
三冊つゝ

式を済ませ、午前十時頃、指二時前、同家を辞し
帰富す、志雄迄過ぎ、九反田より行き、同家氏と共に
て種々の事を語る、諸所の農業従事件の開
きたての法令中、氏わたのめる話ならぬ巡査
も皆服の上衣日本服を重ねて農業従事指揮し
勝てだ甚まく進めども負け色見ゆる時
も上衣を着たる日本服分捕き、指てく、皮服の
侭とりて現れ或る人々と取り鎖をおろし向
かひ、日本服をぬぎ、あり、と云ふ事も同じにて
と云ふ事と同じにて又「巡査一個人と云ふ事件一人
て遊説を出掛ける者あり、夜々々下着をか
ぬ、午時頃帰富まより大和熟迄三枚と、島
崎書樹氏より書状を受け雑誌一部を寄
せらる、話中の「文学」のこと君
びざわ、をふ、まあ
ざ形まで行文の底
行止め無形
三日火曜日朝半晴天
午日学校へ出づるも壱弐生を惣欠第二弐
生わ四人のみ、而して一万国史を持参り居
らざりけるで、えらっ
て帰富の「書経民修五国史及乙文法を読
み家をあでおこたよ
堤を西行、新地の
北多新地、田甫の
眺めこどり行きをい
ま理り路をどり三時頃天神社の所まで来

り社内おくりて梅を見るかまだ咲のざりけ
れば、歸る、盛裝の婦人を二三見掛けたり。歸
宮後、時晩食を、七時前南洋青年會日々行
ふ人、壱人もあらず、即ち西行、排枚み至るみみ
却ぶ逢ひ、又立戻りて中島町おいで芝居の前を
先迂まわり、通り、散田の横ホ出でい、歸る、物理の事を考ふ
八時頃、青年會の者来る、次の次ぎおおてくるみよ
と頼みて歸ホ、九時過より東京は島崎氏
死の書状を読む、撲拳の騒動など報道
の為ホ祈り
三日 水曜日 朝来晴
坦日午前九時学校ホ出づる、壱恵仮生居らざりけ
まそ、拾時前同所を出で、公園ホ行き梅を見
る、馥郁たる芳香、老人の袖より来

四日、早四分過の風花降り、監獄のあ
ホ町筋ホおで歸宮、午後壱時頃再び歩校、二階
の文法を講ず、青山氏より昨日宝恵兵の庭
ホ行く道みて墓標を破ぶりたる由を聞
きたり、中学校教員の内青木、成富、寺
石外二氏の免職の話もありき、後氏ね現
任校長大石氏ホ交對の人々ホとの、二時
過歸途、郵便局ホ立寄るホ、楠山氏ホ会ふ
島崎氏ホ訪ふまね、壱恵を投ぜ、歸宮後
蜜柑を食す、ホ君より、昨日より、愛の木林氏ホ
行きたらまねる由ホて、その本日歸らまる
恵浜ホ帰るまね、電話ホて
ホ、下潰を洗ひ、午後六時過より、すいんとん
の英文学を讀み、グレイの詩、多ぴふランクリン

の文を終り也、
四日木曜日 朝来雲天雨
昨日、学校へ出で、英作文を教へ、午後一時前より
小英文学の解らぬ所を問ふ、指二時前より
時歸寓晝食し、又学校へ出で、此夜
の教科書を代へる、話す所あり、東京より
近松井盛曲業報書長町女腹切、淀鯉出世龍徳
善吉、長町を読み、学校より大倉氏
カヘる、学校より、新しき高橋
あり、村家の異花を貰ふ、也一把
もある可き石が或つも在り、雨戸
抔どてさみ(み脱)しめ、異徒を送り、然る後
程根狼ほた者と見へ、数叫先きにあり石拾
ひ行当り時とん、ぴこの後ろの方より又
或る者て礼垣より行当りて首をつき込みて

跡へ戻る際、(ほとんど)垣の垣みのうち(なる)
寄餘絶可笑しもの(ま)(ま)ありの、切らまでる時の
二人て巡査のを山田お告ることの事(ま)(ま)
早晩裁判所へ引出さるべきまでの
さて備異徒のみ(ま)
ひよ(ま)ろ久心よ
の眼里けまでぬて
寄を博徒取まで長半の合言葉を用ゐる由
ゆえ枕崇の人数を備ひ置く時、警察署
より解散を命ぜらるゝ北村氏抔と随分の困
難取りと、こゝ前日来異兵異徒を解散せんとて
彼の刀を折り刀を奪ひて、解散せしめ、之を
為名(村)向ひ(ち)異徒もろ上る者多く
の噂あり本日て又自由党の壮士の巡査を
ちりとらとの噂あり午後二時過

六日土曜日朝来晴天
廿日学校ヨリ生ル文学會設立の件
を決話ます、拾二時退歸寓、晝食後洋
服の扣鈕付け換へつゝまもなく岡幸氏来り
種々話の末ついに境町よ行き小川と云へ写
屋ゟて井筒女之助を二拾弐冊かて買求め
其まゝより岡氏と共に同行して西へ向ひ
郵便局の角ゟ南へ入る小路を
八百屋ゟ[redacted]蜜柑を求めて歸田の角小島
ゟ女之助を貰ひ歸寓直ゟ
種々の話をなし[redacted]
まもなく南宇清生学舎の人々并ゟ三拾生の
内より人々来り、人々
語人まり西ゟ晩食す、女之助を持ち
ケ八時過ゟまで
廿七日日曜ゟ

歸寓、明前ゟ芝君宅を訪て前の景色を
眺ゟれ、お吟ゟれ、お吟ゟれ、君て今の洋服
ゟ下駄を穿ゟ十ゟる我見て團珍みゟりそ
りとて笑ひ、ゟゟ、衣服着換へて芝君を
訪ひ餘の御馳走ゟ預まり種々雑話、
芝君ゟ若き時ゟ書生さまゟ廻ゟ所の
眼まゝとそゟ大きゟ困まり居ゟゟ盤書を
借りて歸る、晩食後ゟらいぶものぞく、昨
若夜ゟゟ話ひ拾ひ時、西鶴の著書を
貸ます、
廿日金曜日朝来半晴時々雨
晝学校ゟ出ゟる小早稲田文学第八号面
きそあり、倫理學ゟ聞ゟ歸寓後ゟそ
読ゟけり、新聞を揃へ心理學ゟを読ゟ
で夜ゟゟまり
拾時過就眠

髯鬚なく、さても主人公の失意の人たる事
よし！文章も多少僕の旨に合はせの如き所
あり、然し勤王の志少年を漏らす所少なし
面白き節あり、東京の父母に改まりの
手紙を認めし、然し九時過小倉君を訪ひ、諸井
筒」を借り、小木曽の話を聞けり
七日々曜日　朝来晴午後曇夜雨
皆々朝八時寝起、拾時前小倉氏と共に教會に
行きし、坂本氏の説教ありしが、まつきるこう氏の
小児の受洗式あり、晩も二式とも見しが、拾二時過
歸寓、午後二時頃[illegible]、柏井二氏来りし、楠氏
迎に来たり、柏氏少時語りて去る、四時頃天
満宮に行き、それより小蕾堅き梅で写りけ
る、本町通を経て、川上氏を訪ふに居らず、挨拶し
にて内藤及び寳柿を求め、歸途、川上の宅を

通りたるに、同人居られけるぞ、立寄りて雑誌「者」の
馳走に成りつゝ、傘を譲られて歸りし、京寓
前にて柏井、濱田、野村の三氏我等を待ち居りし
諸氏と拾時過まで語りし、帯君も来り居たりつ。拾
壱時前就眠
八日月曜日　朝来曇天、夜雨、夜より晴、凡そ
皆朝八時過起床、学校に出づ、例の洋服に下駄
を穿ちたり、授業も終り時間の割合によせ
上に開かれて幹事より我依頼により、明日より
向ふ一週間許四級の謹慎を受持つ事になれ
り、之れ久米氏が明日より撰挙に出立す
るため欠席するが故なり、事實より然
教業を受取る、都新聞にて斗貫野の事
件が事大に大新聞に記載あり、然し歸寓後、海南
民報」を見る　撰挙に関する事など甚多し

下積み形につもりを返しと手紙で出す、
を出す事を約す、
九日火曜日 朝来晴 寒気甚しき冬空らず
昨日学校を出でたるまゝ福岡林と云ふ人より由あり、姉の所より書状並に海苔及び菓子材料等送り来る、書中より金三円を送り来る、早速しかるべき様取計ひ呉れよとの事、
柿鰹節 就寝前後 書状認む、
拾日水曜日 朝来晴
昨の日学校を休りて候、洋服のぼたんを付つけて日我慢して夜ふかし迄みよを待ちをれども不参、
りまちくたびれけるゆゑ、拇指の痛みも忘れ行きたるも不思議なり、
ていた時頃迄待つたけれどもとうとう来ず、
拾一日木曜日 朝来晴
昨日より家を出でず、
且つ朝より寒気甚しく、
まもなく、
ら人の来訪もなく、
数次の降雪にて道路凍結し、
イラストリアスメンを教へ呉れまを乞ふ、
を見る、
逢ふ、
今の話など、

昔芸子君殿
氏松岸競事
の際関係
る赤村故老
より面部
の筆あり

市村まで送
指つ事ありて夜ニ入了新聞昨ど後み送
拾二日金曜日 朝まで晴
廿日朝学校へ出づる例のめき、二時歸寓、都
の花七拾六号を読む 昨日の下書訂正 小
ト、思ひまづべくやあらん、お児の咄す話おかし
指三日土曜日 朝まで晴 夜曇雨
廿日、学校を休むとすると歸り午後三時
迎ひ会君と共に大川端のお半當氏を訪ふ
老人不在とて、お時候伺ひ、同家をまはり
会君と別れ公園を通らんとするに篠
原氏と逢ひ共に梅を見る格分の開花

少しまでも見るべくあらん、花の影おぼ
ろにて南行一二の車下し歸る、市村まで
夜を送りて降りぬ
指四日日曜日 朝まで曇雨 按摩喚ぶ 晴
廿日朝九時迎ひ来まで降り出でず、
おそく、見まそびさわぬ何とか君前後事
いてお迎への御頼みて端然てそこに立ち
けまそび、まわかしく端然てそこに立ち
て西部へ行つるまそび
と聞けそび成る程、だそ
護身のためと の御書求み 住也我の明いお
貸志ましたお、午後二時頃篠原氏まりつ
種々談話す氏お井向女之助を頂す四時歸
く天神の海を見る八分通りの 両新

歸京小倉君を訪ひ昨夜の[redacted]釣り連の法螺など
も出でて大笑せり、ロおすぐらしてお会君おも
迄ち私梓は書き井書員おして歸る、晩食後
在おお[redacted]宅[redacted]七時過ぎまで井君おも、えお迄て
大神の御いづのみめとて女子の勇む状
お梅聲り出づる、一味噌の作とて隨分乱雑
拾五日月曜日晴朝晴天
皆学校十出づる事例の如く久一方の人まりつ午後。
時三方でのり歸宮、後迄おみ津を伴ひ久
一方へ行き、福岡行の荷物を出す、二時過歸る、夜
学報の前おえ宮兵一人銃を擔ひて立ちより
市村氏まりて書付の件ども打ち下徳みお
拵へり夜よかり宮をお

全勝ぬらんと思わるる旨の話ありき、
東京の新聞に依れば山田佐川両警視庁に
長と藤崎西南役のおもかげ評へらるる
由なり、於晩酌就眠
拾七日水曜日朝来晴天
昨日より午前九時頃学校より
帰宅せる小倉の老
お使まりて、妊鳴りつ、その母を贈り来れり
母君を見舞ひ給ひしや、午後二時前小倉
君来り給ひて牛取物語の質問を
ひろ、少時ありて牛取物語の質問を
まろ、庫物をナシ、夜み了ぬ
おお薬を取りやる
牛取に対し憤む、書中
の依頼と。合点へんぞ。

芳名より寄贈
を謝したり

子夫婦もり。源氏物語を貸す、君も毎日一時
間づゝ和学を研究ち給ひ由なり
拾八日木曜日朝来曇り小倉君午前
昨日学校より帰宅も『源氏』の質問あり、
晩方迄
拾一時頃来給ひて牛取物語の質問あり、午後も翌日の下読
師事し、宮家に参る、明日天気ならば
めまいとの事、七時頃
拾九日金曜日朝来晴天
昨日より朝より宮家を出でず、午前も候補者の名前
九時頃廿余名神事行燈の女と伺ひて憤む
けまでおよそ廿余名取り
拾日土曜日朝来晴天
昨日より朝より宮家を出でず、午前も候補者の名前
と申聞けたるに、午後
それ昨日の質問

少時待たる後庫内切開まで失いて世夏い
恭子と南のつき歸宿後一力国史私書みめん
夜ふけて仕舞及び点りみ完なる書状認むさ
時過ぎ君お休ひ、指時
ふた馬大傳お拾九頁読
二拾日土曜日朝来晴天
皆て朝学校お歩ず久
居ぎり久来氏えお怪
居らざるに二限生に
昇給を受取り種崎町お行き、銀行お換を且
む谷内お立寄りお時決済り羽町おて書留
郵便を出す、南手青年学會の人々集ひ
スキーケス傳」を講ず可
前お資田薛留二氏
どて自由万歳の祝宴、深夜

母み達でつ、拌ら、種々の事
君未らざる、都の花見、季節の
一拾六日、其後も毎日歸りけるが、又昔
君が外にて種々雑談
午後見ー、庭の梅の文章一中女子ゐえず
不適当の文ゐ、閲ろ事ゐど、読ろ出ず歸
寄宿舎就眠前、馬大傳寺を少々讀み出ず
二拾一日月曜日朝未晴
昨日拾時前寝起、学校へ
昨日来り出、昨日小倉君
拾六つ、医師
おろ、明日の
下まり、就眠前、馬大傳寺を少々讀み出ず
稲田文学れ号を要
二拾三日火曜日朝未晴
昨日学校へ出づる例の如ー、朝早く
拾二時ゐ歸宅す、午後
の著ゐ少々読む、早稲田文学
行論の欄を通遙子の
ゐ、ゐりて中々面白
ゐ、患部の先端
文章送ゐ読み出ず、歸宅後、市村来
みそやる、夜十ゐりて昨日の
就眠前、馬大傳寺を少々讀み出ず
二拾四日水曜日朝未晴
昨日朝学校へ出づる例のゐ
ゐ、午後三時頃、医師
三時吹医師、拔ゐ、先端
ゐ、日人ゐ先輩
其後小倉氏ゐ訪ゐ、

天満宮社内よ梅を見る、中々[redacted]雪盛りの
き昌早咲の梅、もう久、花付き枝もひろ
白さまし(せさき)[redacted]梅の
そ青き葉の中をもれ[redacted]梅を
迫帰寓せり、晩食後、北斗を一閲、十時
す、小倉氏より「もらやう」時
過面び小倉君を訪ひ甚寒き中を貸
す、種々話話す、土筆の上に置きて
傷ツーセー、酢を貰ひて付けて食ふ面て美帰
寓後馬可傳を九頁読みぬ
二拾二日木曜日朝来晴
廿日学校よ姉の手紙来
タイルの踊て英文学」ふれ
都の花を帰寓後漸
び患部の洗滌を受く
飯招魂へぬ
帰る中ゟ賑のかりさ
ーとのふ所をみ茶漬
を見舞ひ、種々笑話
を仕ます、種々笑話
着手す、鉄嘉氏より
了小倉氏を訪ひ、種々
廿六日金曜日朝来晴
廿日学校よ姉の手
師を訪ひ、先祭を
衆の前ゟて市村氏
後ゟ別まて午
帰りそ程無く市村
夜ゟ下宿を
話す、就眠前馬可
者の所ゟて

廿七日土曜日 朝未晴天
廿日学校出つる例のれを、戸川氏よりの手書を接
あり、當番輪番なれど、永めに吳きよと云ひまりけまそ
歸寓後、甚疲勞せし、故め、外出せず、暮目を
閉じ伊香支氏と種々談話せり、話中一番南
の役の頃、社員の烽起せんとせるまで
ありし面白のりき、午後五時四十分の汽車にて加治木へ
一、女子の郵便局へ、まつて拝形へ行き、
妹を買ひ歸寓す、吉田氏を訪ひ種
々談話をなし、歸寓後、秋野前馬可傳ふ午夜
讀書をなす、
廿八日々曜日 朝未晴天
昨日朝九時寢起教聞をそろへむどせしを時を
書くを忘れ、柏井、野村二氏まりをかけ
談話の後、二氏と共に出でて玉滿宮の梅見
て行く、犬橋の上ふりて、伐成鳥上げの人々往来
まり、帰り路、神力山、宗像寺をもふまみて
ちまち、裏門の藪の径を抜け、中ふ出でて
ちまち表ふ出でて、中ふ山形の石円形の台の上ふ
ちまち表ふ出でて、芭蕉翁碑と、裏ふて
元錄七年土月恒吳義仕まし、供養塔とあり
笠石のうをぬけて天神社の境内ふ出でて梅
を見堤ふ登りて、歸寓せり、午後先
日逆運師の許を訪ひ、二時過ぎ、午ぬを車行ま
市ふて賑ふ、鹿兒ふ支店ふて胡月かを買ひ
ナ、代價を問ふに二円ふ足ふ、種崎町ふ行き、宮内氏を訪ひ談話し、
橋ふ降りて堺ふて、歸寓せり、川ふ、川ふ鯨

の梅花を画ける中島町小学校で修身を教えんと志ざす留学の[illegible]と聞きしまでで帰宅の[illegible]家の前みありて[illegible]式[illegible]てりけまで、治[illegible]
[illegible]要法事の甚慈塔を見、又て境内の[illegible]梅を見、又て境内の[illegible]
[illegible]五時前帰寓す、妹の[illegible]
[illegible]りて左り処、左の[illegible]
[illegible]の紙鳶おすうわ[illegible]
[illegible]を上げんともたうわ[illegible]
[illegible]宵の外残り処、六時頃小倉君を訪ひたる
[illegible]業件中のお話[illegible]
[illegible]君の[illegible]最初[illegible]
[illegible]しかりおの故[illegible]
[illegible]笑き処、[illegible]

外山君より送りの書状を開きつ。柏井氏まりて、朝顔日記新芸百種を贈し[illegible]
[illegible]話しに[illegible]前帰り処、氏まりて後種々の[illegible]
時過ぎ就眠前、馬可傳を拾頁餘讀む処多し

二拾九日月曜日朝来曇午後時頃より雨

昨日午前九時寝処、[illegible]朝食す、学校へ[illegible]
行き処、[illegible]新聞三枚を受取り処、壱枚生わ来
る五日紙鳶を上げるとて頻りに周旋お[illegible]
拾壱時過公園へ行き、梅を見る午後[illegible]
帰寓、[illegible]を[illegible]処、[illegible]
度々あり[illegible]、四時過紙鳶上げ見んとて[illegible]
所の方へ行きちるふ[illegible]村氏へ傘[illegible]
書を讀みてやり処、[illegible]人まり、集わ窓より[illegible]
を唄ひ処、[illegible]後[illegible]

就蓐後『路』歌

此日又東京の
両親に家書を
手紙と出しけり

加傳」を少々讀みけり、
三月一日 火曜日 朝来晴
此日学校に出づる事例の如く、紙鳶挙のれ法に
大ひに進み、生徒より寄附金を求むるに因りて午
拾二時郵便局に至りて金を送りけり、午後五拾銭だけ
渡すに諸人皆今少し出し呉れよとて云ひけり、
帰宅後下讀みをなしけり、南洋青年学会の者
一人来りて今日は出會に及ばずと申来りけり、
与へ
小倉君来られて、都の花を貸す。此村、横矢
の両人来りて寄附金の増額を請求するにて
五拾銭渡す事とす。此日又清君余の
靴下を作り給ひて持ち来り給ひけるぞ、夜に
なり其代價四十銭二厘を持ちて行きけり、就眠前
『路可傳』を讀む
二日水曜日 朝来薄曇

此日学校に出づるに壱級生及び二級生が居らず三級の
文法のみ講じけり、帰宅後翌日の下讀をなしけり、市
村氏に書を借りやりけり、夜に入り暗唱並に歌を
歌ひて居りけり、就眠前『路可傳』を讀みけり
三日木曜日 朝来曇午後晴
此日も只儀式的に学校に出でけり、於昼頃帰家し
居りたるに此村が来りて生徒が働き居る所に同
道せんと云ふにぞ伴ひ行きて潮江の田所氏の西の方
の家に行きて岡本、田所の二氏を始め皆々熱心に
紙を継ぐやら、其細の糸切るやら、或は藪へたく
り込むやらして、忙しき様子なりけり、余も少々手助
して、時々になるに三時過ぎにもなり紙鳶が出来て来り
けるにぞ、之等の具合を見んとて河原に出で行きて試
みたるに先づ可なりとは見えたりけれど明日揚ぐる事として
四時頃帰宅し、家にて又雲雀拝年食し 晩食後
五

前の芝原お散歩まで集合、おすすめ
の船お見せて、就眠前四時頃より雨
四日金曜日朝来曇り午後三時頃より雨
皆も学校お休みで、拾志時頃畫食後
おづる下お学校お其上の壱枚を
て田所氏お訪ひ、午後壱時前むあ氏お訪ふ
ふ『まつきろう』氏夫妻ありそ
訪ふ『七』氏夫妻ありそ
ろて積み出づ、拾時頃、帰宅又半
西の積まで行きて、就寝整へ之を終学校見
形のりけみそで、よろわ学心まら
て片町みお学校の後大手筋の行方まで
行きて其所より大橋通なりて大橋迄
来るまで宮兵の後ようまりけまそで
や、拾時のみそて大騒ふのりけまで、梅

久智の家を解きて朝は
家々壱行け書もるものみそ
てありける、皆々大笑みの
四は通歸宮、必市村氏まりて書初横
り、晩方、芳君おて共ふ散歩
行き種々話おなを伝ふ
雪ふ積みも
五日土曜日朝来雨、畫頃より三時前まで降りたのみ
又激しく降りも出で必
学校お志村氏を対前、大橋通お書
り田所氏を訪ひ、昨日の用下ふ
話の後歸宅、畫食
志教おやつ其よふ今日そ
やでろ好上ふ、会君を呼びちろか
氏も交ふて、皆の服装を見て皆々笑ひ、拾

南の堤をぶらぶらと歩いて所々まで帰る中々鳥がやまない、二三ちで二十上げさうにしたが一向無駄い事好結果を得ず、外村船も孔雀も見ず大分事好きとみえて甚だしーのらずと思いて止めたまで宮の方へ行きそうふ、残農人町の船々の前みたいなーみんへ下りて茅園堤の堤にて猟鳥を打ち々止まりありけるそこで合一ト羽の内おより船を出す棒きまき而らんとそうふ外村等の声を聞き上げて三度位上げて三羽は逃げ帰りけるそれ運動そして種崎町まで帰る、各内氏方にて、能く休憩して大格好借りて田所氏

方へ行き、着物ひざ帰り、賀井氏より帰て午を谷内氏に帰りて鯛二尾を置いて行きそうふ曲りて生徒連数人我の家へ立ち寄り君を訪い鉄を二つ取て、皆々田所氏を初め一同へ切身六時過ぎ森まで、久米氏まで送りて、田所氏より大雨と大降り、田所氏より孔雀一羽、賀井氏より鴨一羽、猟銃一挺借りて帰宅、

十一月七日　晴天

一日々曜日朝来雨午後四時頃より晴天

昨日午前拾壱時頃芳君来り発熱悪寒拾二時過医師の許へ行き薬を貰ひて帰り、夕食を済して世間ばなしをして、夕食を済して、柏井氏を訪ひ不在の様子にて帰宅、直ちに就寝

求め、本町壱丁目の印判屋ニ捺印を頼み代を拂ひ、
散田の横道まで来たる久九代ニ逢ひ、伴ひ家ニ
帰り、国次氏前を通りけまでに呼び止めて種々
談話す、天気晴朗ニして中々涼しく、帆掛舟
の眺め上ぐりけまでにて行のに出ず、
田所也壱人来りて
の第四読本を始むる事ニ付きての話あり、
向ひそし帆掛舟ニ逢ひ、
て第二度絶ニ最後の風ニ
落ち所々破れ出来ニ繕ひたるも、午後
六時前録萬晩食後
山中、銭湯ニ出ず、
を読む
七日月曜日朝来晴天ニ
昨朝八時前寝起、朝食後田所氏等

可成詰め掛け告りぬ、即ち後刻を
校ニ来り、壱拾名ニ拡ぬ欠席ニ
七氏と共ニ学校ニ出で、田所氏
を先ニ立て町の通り
要ニ帰りけまでに、下記
一、二三人ニ綴ひの為め帰り、余等ニ績ニ
ニ出ず、此の時西の績ニ
南大鼓鐘聞ニ
ず、此時まで帆
下地ニ行き、日新ニ
午前迄ニ来り、山田町
角の餅ニ物ニ帆の
踏ニ、ありニ
ニ命じ、皆ニ
則ニ拘ニ

るが、手わかー慢る所あまで、藤田の後進を従ひ
を先きみ歸り、田所氏方へ行き、田所、岡本の二氏と
種々相談す、病々様子聞きみ行の人とて歩で行き
たるに、大橋々上人の山を眺めながらお茶をのみ、人おわけて
お伊野四ヶ峯にかゝる頃、皆々今免るきまで歸
る所なりと又事まで七年ぶりの歸宅
で書見良もたるまま、客もたえ
家の小会式ありて和裙の御客まゐりける意
時頃出で、田所氏をたゞ
多く吹き抜きて秋まで
七ツ半頃、ようやく風を上ぐ
て病久積込持ち出
衝突して我の風わ
お彼の風わ河中み落つ

ゐたり、五時前歸家す、風
外出ー新京橋のお邊山とる牛肉屋み行きたるに
皆々大酔をり、少時牛肉を食べ、歸宅せり、
夜十二時過ぎ小倉君氏を訪ふ、
少時後歸る時
前路加傳とかゝ
八日火曜日晴
朝九時前学校へ出
拾時前出て公園を越へ
歸宅ー書良後
来まり、まりて後、
十遣ともに歸り、三時頃
四時過市村来り、遣書中、
けまで、後刻をもつて
歸宅ー書良後、黒瀬、黄瀬の二
来まり、まりて後、稲田文子ども遣み
十遣ともに歸り、三時頃宴相を買ひ食べり、
四時過市村来り、遣書中、仕村、藤田、所氏まり
けまで、後刻をもつて南洋青年会ふ

行きたまど、入集らざりけきそ、歸りつ、就眠前路加傷ど
九日水曜日朝来晴
昨日学校ふみで稍々授業も始むるを得たり、
午後歸寓後ゑ下讀を早々に終へて、四時過みより
を訪ひて晩食を共ふ堀話座ふ行
き、田舎の芝居ふ入りたるそ、狭き上ふ暗くふ不潔ふ
ますます感心ふ堪へず、其次ゑ『豊臣秋吉』一枚のみ數きあり、必ず最初て誤訪
たる主義ふ基ふ『金三郎の記』ふ中清秀殿の段ふ移りたるの
ありて、八ツ半頃ふ終ふ、甚次ゑ『豊臣秋吉』ふ奇麗形ふ
だの今少ゑ流暢ふ語まきまき
ありたらーと思ひぬ、人形の
方も中々面白ふ、義経の
うふ忠ふ、ーエまきそ子供だまし
三勝酒屋ふ也たまま、エまきそ一可成り面白のうきゃ次

日ふて昌ゑ早指一時ふ家ふ
帰宅
拾日木曜日朝来曇
本日学校ふ於ける例の
課業終り、歸寓後下讀
を濟み、夜ふ入り南洋青年学會ふ行きたるふ人も
多ふ在らざりけきそ歸寓
を告ぐるの友のふ
傷ふを績みぬ、
拾一日金曜日朝来曇
昔も学校ふ出づ課業
後着物をのへて三時頃中学校ふ行き谷津
事の演説を聞ふ、拾二時ふ歸寓
迎歸りて都の花七ツ、そうを績みぬ、夜ふ入り
ふ兄弟を訪ひ、深更ふ歸

拾三日日曜日 朝来曇雲時々日光を見る
昨日朝九時前起、谷内氏来る、午後二時島氏
より久万井上恒の両氏まきり、種々談話の末、
二氏去り、手紙を認む、午後二時島氏鍋島氏
ふ人まり「英文学」を講じて遣る可き由を約す、
四時頃出てゝみおを訪ひ、前夜芝居にて世良ひ
る九丸を遣る、軍子を一貫ひて帰りぬ、晩食
後小倉氏及び両親ゝ家内みな就寝、昨日
手紙書きつゝ
終日曇天時々日光を見る
「拘輸傳」を読む
筆不精にて久しく音信を絶ちたるのみならず
此度も亦書状を以てせず、失礼の段深くお詫
申上候、扨て其後は御無沙汰に打過候へ共、
御一家様益御清穆の段奉賀上候、陳ば
小生事も無事消光罷在候間、乍憚御安意
被下度候、
扨て此度は御令嬢様御縁談御整ひ被遊候由
誠に目出度奉存候、就ては御祝儀として
金参円差上候間、御受納被下度候、
尚ほ御令嬢様御幸福を祈上候、
草々不一
十月廿三日 君
永井様
御両親様
御家内様
御令嬢様

就眠
拾四日土曜日 朝来曇雨夜更りて和、
昨日学校を休みて帰宅す、書食中降雨午後も
り、午後七時過ぎ迄歩して帰る、
柏井氏を訪ふ、諸書の御弟子多く集り居る、
三時前帰宅、柏井氏も来り、なまこ酢にて酒
暴飲、杜甫と云ふ人の五言律詩を読む、
海浜多人の利益を説く、
「普通の出来、終りの方にて少し変化を要す」
「交合する変理」
「ビス氏の『交合する変理』」
「手宮」
日々読の中半降雨昨の如し、
「拘輸傳」を読む、
就眠

拾五日日曜日 朝来曇雲時々日光を見る
昨日朝九時前起、谷内氏来る、午後二時島氏鍋島氏
ふ人まり「英文学」を講じて遣る可き由を約す、
四時頃出てゝみおを訪ひ、前夜芝居にて世良ひ
る九丸を遣る、軍子を一貫ひて帰りぬ、晩食
後小倉氏及び両親ゝ家内みな就寝、昨日
手紙書きつゝ
終日曇天時々日光を見る
「拘輸傳」を読む
筆不精にて久しく音信を絶ちたるのみならず
此度も亦書状を以てせず、失礼の段深くお詫
申上候、扨て其後は御無沙汰に打過候へ共、
御一家様益御清穆の段奉賀上候、陳ば
小生事も無事消光罷在候間、乍憚御安意
被下度候、
扨て此度は御令嬢様御縁談御整ひ被遊候由
誠に目出度奉存候、就ては御祝儀として
金参円差上候間、御受納被下度候、
尚ほ御令嬢様御幸福を祈上候、
草々不一
十月廿三日 君
永井様
御両親様
御家内様
御令嬢様

ぬ、前夜来の風もみや吹き落さきそけん、烏二羽
我窩の前ホ落ち居り。
拾四日月曜日 朝来晴天、昨夜の夢えもー形ちもなく
あわき、君ら人ま過ぎ必、醒めて猶、心悦惚たり、
「うさ、ねおたこの形久人さを夢ト見て、現ホおらぬ
落る涙たしと云へる古人の吟詠もそこゐ思ひ寄
せらるゝ侍る。まる者日々ホ遠去と云へる尤さ
るホと思ひながら、我心わ、其人ホ逢わぬ前ホ
胸ホ炎を焚ものゝ如くあへれ、や、逢ひ見て
の後の心わいざ知らず、頼ホ所て、夢形らで
まのあらう独の人そを見、現ホて其の声を聞
のん事ホもあるを、をこのみき夢ホ見え、我心を乱
け人、此の日えいねまず。心猶ホ在ぬしりけるも
昼形ー やいれ時過
学校ホ出ぢるホ生徒を

らぎりけまそ一先ず帰宿ー、書夏食後出校し
たまそども、何ーぐ生徒在らざりけまそ。帰宅
ホ下讀を終へたる頃ホ晩食たゝ、例ホ時休憩中ホ
目鏡の繕ホ出ぢ、君ありて、余わ英文学
を拾五日 火曜日 朝来晴天なり
此日ホ学校ホ出で授業する事例のホ如、横矢氏
ホ見歴やで、松のうら毎ホまず鶴え千代のどちとそ思ホ
と云ふ冊員えの歌を質問さまをきそ、判然と解ら
ざりけまそ。調ホ至ひし帰宿ぬ、二時前
鍋島氏来り訪ふ、英文学ホを請ず、其後文法を
のそきぎ、土佐日記、冊員えの歌集、笠ホ、新学ホ西集ホを
ホー讀みたり、夜ホ入り、拘輸傳を少々讀む

東京より改進新聞来たり

拾六日水曜日 朝来晴

此日学校にて島崎氏よりの書状並に女学雑誌を受取る。課業終りて帰寓後一時過鍋島氏来りしが、英文学史を講ず。氏去りて下読みとなせり。晩方基督君を訪ふ。又好山、岸の両女史居合せ給ひて共に少時談話の後帰り、生田並に重枝氏に送る書状を認む。夜に入り下読を続け就眠前約翰傳を少々読む

拾七日木曜日 朝来薄曇 時々日出づ

昔七時間の編合を了し、拾二時帰寓、基督君を訪ひ少時談話し、去つて桝形に行き、髪を刈る。[redacted]理髪所のあるじも先月中佐川に在りし由にて、撰挙騒動の話をなせり。南行去りて押字子出て、帰る。下読み少々なし、島崎氏への返簡を認め、七時前外出し、其書を投函す。帰寓

青年会に行き、「スウヰントン」氏万国史を講じし。八時前同所を立出で、中島町の細川氏を訪ひ、聖書の講義を聞く。也あり、劉二君の受持取りし、九時過帰寓、就眠前約翰傳を少々読む

拾八日金曜日 朝来雨、午後に晴

此日学校も何事なくすみ、帰寓後鍋島氏の相手をなし、然し氏去つて久米と云ふ人来りて「スチブンソン」読本を講じてやる事を約す。三時頃基督君を訪ふに「ダウド」山「アーノ」の両女史ありける。宮島氏の説明をなし、然し、女史去りし後ち五時過迄雑談して、晩食後、豊川へ死たる手紙を認む。其後下読みに着手す。八時前より事留商を書了に時間と咏じじ、然、拾時過就眠前約翰傳を読む

拾九日土曜日 朝来薄曇、午後晴風甚し

此日も種崎の桜見に行く日なりしも、降りもせず

やと心配さ呂ア[illegible]ゐは、
ど尾中々み出ん[illegible]時過より追々晴きたき
氏を訪ひ、種々談話[illegible]時過九文田小行き囲み
ーおやすまらず[illegible]他の諸氏を待ち
の三時まけまでとし最早遅けまでとて、行く
事を止め、酒お飛ばめ、七時過、請ぜ新地を思
立ちけまぞ田所氏宅を呼びて集中より歸まと
云ふ、宇れ君子久氏お謝して、晩方のおくれ
まぎまきお歸途お就きぬ、八時頃歸り着きぬ家
き鮨を食す、芳君まで待ひて、種々な話ひ
宇の並守の事ぬて頭くお、君去りて、
む今ある五年の後から人
宇れ、鴨長明集をひ
歌心そべろふ鎌きけまぞ、糠折き四五首興
お無くして綴り長、就眠前約十編[illegible]の残り

醒後思夢、
中の人
花神入夢
曉鐘破夢
雨中思母
寒き朝、老親
の上お思ひ待つの
都路
夢路
面影や誰
都路の花て今おそ咲
もさわぐのし
夢お入れ面影
思ふ暁の鐘
窓打つ雨、昨の音みも
私の夢やうのふと、
都路も聖を着尾の宴
二拾日月曜日朝来晴
廿日午前拾時過久米氏
日の日行て呉ひ頼しと言ひ置きて歸らき也、拾時過家を出
田所氏を訪らず不在、旦ぬ日て同行ぬし雖き事情ありとの事ぬり
漂みて拾ふみ至きり、
夢路みそ尤の形久声を聞ふける現ふ情へ也、
面影や誰
都路の花て今おそ咲思ふ
もさわぐのし
夢お入れ面影
思ふ暁の鐘
窓打つ雨、昨の音みも思ふく我のこらも
私の夢やうのふと、
都路も聖を着尾の宴
寒き朝、老親
の上お思ひ待つの
二拾日月曜日朝来晴 昨日
廿日午前拾時過久米氏
日の日行て呉ひ頼しと言ひ置きて歸らき也、拾時過家を出
田所氏を訪らず不在、旦ぬ日て同行ぬし雖き事情ありとの事ぬり

けるぞ、まつて岡女氏を訪ひ、二人みて菓子を載せて行く可
もとそ準備中仲村ありの使まりて書牀を変え、南けて前
景の酒みて大弱くとの事ありきぞ、然もあらんとそ笑ひ、壱
時前舟整いけきぞ、岡女家の裏手より乗り込み、新地の前
近行きたるが同じく桃見物の可し、一艘毒者を載せたる舟二三を
見受け出、速みて吸口の橋の辺みを行きたるが二挺櫓の屋形未
り出、舳首、未吉屋と記されたる舟と酒樽其他の品々取り乱し居けま
た、二人私語すらく、昼を正一くさんのあを提ける客の捨す
る所れらんと、猶善く確めとて其才を見届けたるが、障子
開きけまそ、すえさそと現象を一直線に注げで、豈みてうらん
歩まそたり、舟中の人九中学校の教員連なりき、九顧
みて吾人の瞳測の大外れなるとて笑ひ出、ほありけまど、尾張
の美を貪らんと障子を開けて四顧すまそで、春月既に朧
木を吸そ、若葉の木々そ一ぬみも更ぬく、去年の霜を凌ぎ
雪を耐へたる常盤の枝々も、今そ一点れの新緑を點

一泉山の根が砕るさべ浪も静のたりたる白雪
疑える、実ま此の三里を南へさし入江みそ造化も其の精
妙を尽ぬーなりとも見えべるやあらん、さじま、秋岩ま
ど過ぎ行きて、三時前種崎ま行着く同所ぬて早や四五隻
の舟あり、多久中ま釣歌を
ぬどみ吐き出る花を眺め南行一て松原ま出でて尚行
投せし漁口み出づ、遠山青々
對し田畦を布出る一の如き
げま春の長閑ぬる尾色を飾り出、おぞし浪打際ま立ち
差ぬやしの餌り悠きて入とそ足を入まま向け松原
を出けんとするみ出口ま墓石
眠きる櫛まとて、小如の如る石碑の立ちをしもあまで
中まそ口ま石をの久集めし
卯ぬのへちるもまりさまどぬ時墓前みそ花をさし
て参るとまり、昼ま多く都人の、研きみ磨きたる石もて

いとも宏大なる石碑立ちきたり、甚後て、甚墓の傍りにま
ず典吉まいりそ、其の勝まる我何ぞやと
雖ども、鳴呼故の地不お眠きる母人て高照のけのま
お知らまず、只松尾海涛の音み送らきて、遠々彼の楽園
おやくとり着きけん、悔むれあき、女の床のやーき我、悲
むれあき、其名の顕まざりもち、たとへ王侯の位、ある人も、
枝山の勇まる人も、盖世の略まる人も、一度無常の風吹あで
昔ふの玉の床とても、かえ一塊の土饅頭のうち、八々の里程
をつぶんのみと吟えきなく久々一て畦路を歩行まる
きて屈曲一つて北行まる墓者の志野み逢ひ、
の枝、四つ五つ世貫も実せし、
舩頭歸るを我促おけまそ、直お
み尾中々嬉しかりけまど、おつとも苦みせず、岡本
氏と共み大声詩歌を放吟すず、傍を通る墓を者を軍
せる舟の方のへつてひつそとと静まり返りまる

の音にをどろく蛙の別有りけり」と記せる掛物を持来
りて掛けて笑ひたり、夜に入りても下讀をつゞけ、就眠
前にも『使徒行傳』を讀みぬ、
二拾二日火曜日 朝来曇、拾二時前より雨
此日学校に出づる例の如し、壱限の『文体論』今日終る、帰
寓後下讀せんとし、五時前井上を訪ふに不在なりければ
去つて篠原氏を訪ひ暫時談話す、帰りて又直ちに晩
食し、南洋学塾に行き『スチブンス傳』を講ず、八時
過帰寓、小倉君来り給ひしが、九時にて去り給ひければ
たゞ筆にて『近松の天神記』を讀みぬ、就眠前『使徒行傳』
を少々讀む、此日篠氏方にて英語談話会の者を組
織するため何かどの話ありぬ、此日東京の両親に
る要之川への書状を郵函に投じぬ、
二拾三日水曜日 朝来曇、且雨
此日学校に出づる例の如し、帰りて下讀、中村よ来りて
種々談話して去りぬ、四時過家を出で本町に出で筆
を買ひ、掛形に行き紙を求め、湯に入りぬ、今や来る壱
月拾七日以来今日迄入浴せざりしかば六拾七日間の垢を
洗ひ去りぬ、帰家後少々下讀をなしぬ、此日又早
稲田文学子第拾壱号』を去取り其の大半を讀む、夜
に入り小倉君を訪ひ暫時談話す、『使徒行傳』を讀む
二拾四日木曜日 朝来晴
此日学校に行くこと例の如くす、帰寓後 『都の花』と
讀む、夜になり六時過南洋学塾に行くに人一人
も居らず、帰りたるに小倉君来られ、余に既に書
の内の何を西洋紙に書きて呉れよと頼みたるが故
にそを写す、談話あり、八時頃家を出で中島町の
細川氏を訪ひ、新約全書馬太傳の講義を聞
きぬ、種々談話し午後拾時過帰寓す、就眠前
『使徒行傳』を少々讀みぬ

廿五日金曜日朝来晴天
本日学校へ出づる例のなれど、昨夜来の降雨
瑞歸篤し、依て時頃出校し、二校生を教へ、十時頃帰
氏を訪ひ、暫時談話して井上氏を訪ふ、不在
氏を訪ふ、これも不在、已を得ず帰篤、七ツ半
半ツ半、午後七時頃井上氏来訪、病中その事解
けざるを以て暫時待つ、山中氏来訪、井氏又未だ
帰宅せず、よりて廿六日の種崎行の打合を為して
野村氏訪ふ、これも不在、帰篤、夕食を終へ
ちづ地租改正なほ考へ、
読む、就眠前、家族
廿六日土曜日朝来暴風雨、晴雨定らず
学校を休む、田所岡本久米の三氏来
田所氏などあるも、井上氏来らず、一宮行の話が
まで、一宮行の古依纏り、井上氏九時頃
帰宅、

ろく
来る、午後小野屋より五合を両と高さて二合の
手紙を以て、雨降るもあでけまた止めんのとの海も
出つてあるゆえ井上氏来る、止の海、いよ〳〵勝を
制せんとまけるを折柄雨止みけまた、弁誕を思ひ立ち
お茶園場迄行きは所
かつて、井林まで行き、諸所を訪ひ、又色絶法
おりかけるも、下山し、舟を以て、田所氏を訪ふ
ふを以て、又、田所氏を訪ふ、大きな道ふて一周
等をまけまた、東の
太居らまたり、東の
所おて上陸し、雨を凌ぎて、七時頃雨
全く止みを以て、先刻借りし
手もちの重箱をお返す、昨日書する行の聖書の数句
を以て、又、種崎町へ行き、吉内氏を
訪ひ、時談話し、帰途目利安のこまを買ひ、雛

為子(?)

なれど眺め大鼓様を渡りて仰げば、いとゞ徒
き道山上に向ひて付き居りしが、木の根、笹所
とかすがりて登りし新開の道をたどりて
山を回りし瀬の方など眺め、弓之の遺墓をも
見て久保寺の無常観るを感じ、家に午後
六時頃雨に送られつゝ帰寓し、家にて之れ別
かれずる事も恐く、就眠前使徒行傳をよみ
讀みて眠る、
二拾九日火曜日　朝来晴、時々雨
此日午前八時過学校に出でたれども別に質問
もなかりければ午後帰寓、昼食後柏井氏
を訪ひて少時談話の後帰りしが、新聞など読み
研究をなし、夜に入りて使徒行傳を讀みて就眠
三十日水曜日　朝来晴　風甚
此日午前八時出校、国史、英作文の二課の試験を

東洋学塾へ行き八人午前傳を講じぬ

余氏来りて文法を講ず

なりし、帰家して居りたるに吉村前田両氏来、田所
氏来りて今日田所氏の息女初節句祝の事
の打合せをなし、久米氏も来宅して周旋する為め
に出で行き、余と国分氏と贈物を買ひ求めに出で行き
播磨屋町にて、押絵並に人形を五拾弐銭にて求め
二時過ぎ我田所家に持込みぬ、三時頃より人々
大勢集りて来りて酒を呑み、大分の騒ぎになりけ
れど、五時頃退出す、家も戸鎖してありけるまでに
亀君の方にありしが、大久と休屋氏来り居りし
て少時話して後、氏去りて後、余も帰りふせしも、甚暇
ありければ片岡健吉君近々上京の由にて、先刻暇乞に来
られし様なりける由を聞きたれば、早速出向きて、挨拶を為
さんと帰りてありけるに、九時過竹村森本の両人
酔ひて来りて新地行を頻に勧める様なる語気
ありしが、我は近辺を散歩す可き事に注意し天神

橋より東へ弐つ目の木戸を西へ北行して甲
州に出で堀端より帰路に就き八軒町に曲る
の近傍より竹村の放蕩を戒めたり、家に帰
れば芳男来て居て今夜は是非泊れやへ
議してきかざりしと思ひ、明日は竹笑にてやらん
との覚悟ありける由を語りて空しく帰りて、
寝たり、余も聖書をすこし読みて就眠

此日も父来弐来り共に

三十日木曜日 朝来晴
此日午前八時過出校 文法、二級の歴史を試験す、指
二時過帰寓 点数の調べなどに時を費し、
夜に入り、問題など作りて就眠前聖書を読み、
此日はしがらみ草紙来るを読み出す

四月

壱日金曜日 朝来曇、指二時前帰寓、夜
此日も午前八時出校、二級の課読、壱已級の会課終
物理を試験す、指一時過にやありけん、引退
よ張ぞし、名を書きしせ、校舎も一時見倒れんとせず
やと思ひしぞあらしありき、雨さへ降りて出でざりし
一時大三過 略する山ほどみて、あらき、午後二時帰
寓直ちに点数の調べに着手し、夜に入りて之
を了へ、指なし頃聖書を読みて祈り
就眠せり

二日土曜日 朝来晴、霞甚し、風あり
此日午前九時前出校、田所氏学校より昨夕、ある指
たるの女郎屋行に付き譴責を受けたる由の
話ありしに、其の件の黒示露せしを、氏は幹事
にでも告げるやと思ひわずらひし、大分思ひ悩むを
きぼくして居られたり、指二時過帰寓、二時
前松井氏を訪ひ井上氏とも方に不在なりければ
大園君も来て帰りて暫時雑話なしつゝ、あらしふ
井上氏来りけるに、今より書籍行に如何ところで

[illegible]井上氏と共に[illegible]
西行志[illegible]久米氏小児[illegible]
[illegible]まも日道たて[illegible]首を通[illegible]
小山をめぐり田甫の[illegible]
す、夜の二[illegible]午々酒[illegible]
通信の[illegible]より[illegible]
只一つ庄つすやかある[illegible]
し庄の里のまかたきあ[illegible]
[illegible]やや酒を秋[illegible]
時過[illegible]歸宅[illegible]
[illegible]小石木の下おでて[illegible]
天神の境内を行き[illegible]
見て歸宅や[illegible]
やてく只世[illegible]
默禱の後就眠

三日 曜日 朝来晴天 [illegible]
昨日朝井[illegible]
き坂本氏の[illegible]
[illegible]
[illegible]種々談話[illegible]
片岡氏を訪[illegible]
きて先内氏[illegible]
きて眼鏡[illegible]
て三[illegible]
[illegible]
君を訪[illegible]
四日 木曜日 朝来晴[illegible]
昨日生前八時出校[illegible]
[illegible]
きほ[illegible]

こしたの所を出でて公園の入口の所にて行くか日行の掛茶屋も大方
見世を片付け、即お茶屋より行き、柏井氏
の假橋を渡り、田甫の畔のみちを辿りて行き、小高き坂より行き、柏井氏
花九尺のうちの注連飾りありて人も居ず、
そこで静のまき花を買して、午頃女の迄着、午
別人のめ久高館より出来上りたるまで暫し
久米氏待ち居りけるまで、午前の通
とて吉野行を促す、即お伴して出行き、午前の通
生徒の一群先ず中村氏塾の女子ども、
四五生の大なる犬を追ふ人を見、
三河名所案内記に載せたる山家の
左、即ち寛永寺なるべし

[illegible]夜ふけるまで[illegible]唄ひ、拍子の処、
なり遠方、祈祷ある事
初日出の朝未明
当日生前の出校、定刻
授業、学校まで
三河地生徒
どおきまり
書良後出行きちかく
園を経へ、前町より行き
一面田をも抜けて、午後
を出でて、倉泉氏を同
行を促つ、午後も芸者
出でて、例の假橋を渡
被ぶり、歌ふ人もあり
思ひらんこの三河名

あさの

晩食の馳走まかなひ、松茸の名事かなひ、
手製なれど風べ八時頃
のふくの御馳走ふかく、高浜放生、松二子前
日大社を辞し、富の
妻と神々新る、敦
を談り給ふ
六日水曜日 朝来曇時々日光漏る
昨日朝大峰宿発、朝食
人と共に、門お色、
大梶角也北行し、
お多で江の口村を通る、田甫
子数通ふ立派形る敷
四物等の設けお
薬野駅を通
小至る、神さびて
神社

社の左手十三本の杉を植ありて、
掬ひ取ると思、右手の
ありて少し山へ上る
鄭重お就き、
君四郎を伴ふ、
お茶屋にて山吹墓、三の
貸す、二町程行て早稲田
停車場氏等と
三宇和駅着、
重書を少々讀み
七日木曜日
昨日朝来お雨
視せらるる事
中止画き、
告ぐる決

[illegible]居ると、十二時前迄、就寝す居ると、頭を洗
ひ[illegible]母と小倉君と
し拾ふ、午後より小倉君を
夜は[illegible]方小倉君を訪ひたるが、[illegible]
生憎外[illegible]駆[illegible]
うぎ氏が家[illegible]手紙
れ[illegible]過歸寓、[illegible]
午後[illegible]
[illegible]越へ川を渡らんと西行
乙二五郎のらが時計[illegible]
吉野へ行けど桜花早満開の有様[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

お訪ひて行き、柿山氏田中村の村長を訪ひて話
す、一見むさくるしき男なれども純白を根本の一つ
エマソンの論をなしてゐる、話題は財界の人の感を
ひくものなるを以て、柿山氏の感西
洋社交の説明を頻りなるを聞きぬ、とそこそこ
田道へ出でて行き前方に柿井氏を
同じおもおもしき行きぬ住還おもるやうとそよ
ふ柿井氏の宅に行きぬ、例の
家、私の二弐で小駄ばかりそ
俗にまで、着て靴足袋も草鞋を穿ちて居
る、おなおそ、いとしく田舎服、いのでそやん
と思ひてちるおみや柿井氏夫人やらん
とて先きへ通され向きあひて
指おかしくまり、五尺ほど餘る小児をそ
の人頁ひ行きぬ、其きよりも
きそ三人ありてあるも雑談す、柿山氏発句
を作るの柏井氏おかし折
児頂くでたらみの河岸に
小児の時戸田の侍をまそし
まそ女の川もそ今ずー伯父の
今そ精久其悔開除
おこのもとてそ居まで
並ぶ可き物あり、已きぬ
けて物の表玄関打出人
也人方そ歩き、行き過
土度ぐしいよう宇都の山路
る山道まさみけわーくやきらずめき七時元道
性の悪き者ー、とびせるー、さをこんぐー喘ぎ
つつ登るお漸々山頂に

で海面いとど晴れ渡りて遠近の山々の緑
も近きも遠きも皆かつどす白帆と入り映えばや綺も彼
も然も美しき眺めなり、おでん屋見とをてあり、その昼早
船まぐ、行交ふを見ると山を下る山松の枝さ
せてゐる、ずゐやとまもなくわが乗れる船織の如き波を
お指して行法師の森(法華寺)の森(柿本人麻呂)
のむらすき、なも法衣のゆく松ぎでとをの等
ら岩か突ひぬ、松島(まつしま)海岸
ホテル海に行交ふ海中か島あるて小やの島(こじま)居(ゐ)
の見ハテ松ケ枝(まつがえ)なおろく、その上ニの、まるお、桜
花のいまや散(ち)り初めんとのしお咲きぬるお其る
か黙綾(もみじ)るいとど遠景と見やる。西ニ折き行く
船あるて、上お指(さ)す、ゆく

ゐみさむこのらめ雪をふらす、又行くる
ホーテ柏井(かしわい)に長屋(ながや)あり、の通(とお)りを
又き折(おり)ると柏井氏(かしわいし)の家(いえ)あるお
ますの田(た)ぼをさまし
き着すま神社の桜今を盛(さかり)を描(えが)お見て
東(ひがし)行き、橋の下の茶屋(ちゃや)おて番茶数杯を飲し
菓子を食ひ、少憩の後(のち)、橋を渡(わた)り、松原(まつばら)おゆ、かを
渡(わた)て又行す、裏(うら)碧波(へきは)手々(てんでん)とおて車を、近く岸
辺(へん)お群(むら)るの白波(しらなみ)そ、おわか時(とき)ぬ白縞(しろじま)の
疑(うたが)れき、或(あるい)わか時(とき)ぬ白縞(しろじま)の
さを見て走(はし)華(はな)のこのお名(な)等(など)、杜鵑(ほととぎす)の声(こえ)を聞(き)
ざるぞ怨(うら)むる、岩間(いわま)を
根(ね)ざ久(ひさ)波(なみ)の花(はな)を愛(め)で杖(つえ)を曳(ひ)き
て駒(こま)ぐちいか北行(きたゆ)き
来(き)てさいみても遠く雪(ゆき)殿(どの)ぞくさの山々を見(み)え

[illegible]の[illegible]の松の根下にて、携へ来たる[illegible]を開き、[illegible]
三人打寄りて食す。[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の色[illegible]々なれ[illegible]
[illegible]名残[illegible]
す[illegible]
[illegible]お[illegible]
[illegible]
[illegible]

きの勝負あり、森の方負けしが、馬子の慢せ
て居らしにや、餘程無念に思ひし困難なる
様に見受けたり。帰宅後晩食し又窓に依
りて最後の勝負せし見るに赤き負けたり。我
目て見物人多く立ちて浮けの棚などに登りおきに
倒さきとこし負けのきのなれど全く人に困る
計りて僅の集所にて戦ひしが、我[redacted]を見下、
天覧の場合を思出でしが、げに様を構へ米
力を帯て悠々として、勝負の場にするはさ
其の勇ましさ何ともなく人の感せしにきて
涙もよふ程の人も多かる可し、
の長之御様さきぞて決して煙滅に帰せざ[redacted]術
やうあ[redacted]まてのしとぞ思ひて侍りし。七時過
柳井、梅山の二氏訪ひ来りけれぞ、共に伴ひて五台
山に行き、招魂山の境界より月を賞す風

光今謎き旭岡にそどらや西南の山や西路を
帯ぶるさま面白く、浅き森てなる漁歌を聞
き、松ケ根に腰打かけて我等も詩歌など
放吟す。暫時にして漸く遂去る後帰宅に[redacted]
る。新地あたりの女などさきに客を迎ふる
頃なりける。家に帰りし付きしも、暫時頃なとする
物の書を読み、祈祷をなす、例の如し
拾日 月曜日 朝来晴、午後晩に雲霞雨
廿日 朝早く久米氏来りしが、八時過学校に行きて一級
生来り居らざりければ、授業もせず授業頃学校
を出たるに、岡本、田所之両氏などに柱濱に行きて
と太多ふぞ 事も同行す可しとて、直ちに岡本氏
方に行く、船も今日なり、皆佐良島一旦料理なども
大分の高上げ取りけれど、餘り美味もなかりしかど
五もく、担桝さし身、お酒をもて饗主人兄元の

舟をも走
らまし、久米氏を待ち
ぬで、新地の前にて舟を止め得ず橋より先
地と酒を取り、急いで
旦那み旦那一旦法
の濱に舟を付け砂濱
舟に歸り浦戸の濱
数十歩、大岩の本
りけまた、余獨り丘を
ふ行ば道ふ種々の
ば白粉を裝ひ、一
吉三々五々手を携へ
ある書生多く書
金ありと思ふ妓を
掛けおきり、敵との

[illegible]上流へ行く人可き由を主代すきど阿本さ聞
のず、茶屋の中居さ
たきど、久米氏起きざきろ
ず上ぼるる小桟堤へ暗き
に得て竿取る由すの所
料理屋行の相談纏
ケ所七年由所の二氏
日々
ふて附き左ひ改へ
と云ふ処一番
婦方を改つて部屋
む二十二
位みやうんと見る
島田の髪をつのね
まりの我始めて、
[illegible]
(のぼ

むに握拇みまりれるのみ
さわりて持かせ招きー右のれ
で頼る年まれたまで
可き、其席を外さして
宅を取むる様みすまど
ひて、席おさまとて、
事にそをねらめで
名高貴と云ふ右んつらき
無垢女房の男をもこの
も良きやと思ひて
たどり、年氏服
妹まも三味線
久米氏頬
まま芸妓と
まと、他ますろ

る、時前日所を出で田所氏と共に小家浜まで
ぎ家中まで日吉より引き返し時過帰富す、廿三日
の土曜を終て小会君を休む、此の日の大弱
その一件なし、晩話し、必ず富士のへりて書
と頼み、祈祷を終り、秋暖なり、
嗚呼此の日我の一度驚異の思ひをなせる可き
ありし、我のめき道徳心の弱きを成る可き
る恐れ化石のざる様おすべき我の強
於ても、全く不注意の為に、
程の足踏みつまづき一度
のしそよろくのその前
一丈の美婦おらざるを、
一助石のめく鏡のめき
書机於ても、我ご
とつけて水ともなりて酒へ失せる可

らず、当日午前男へで一の
事ありで欠勤みの届きまで
の記しく後の筒とす
十二日火曜日朝来暴雪天雨降れ
昨日朝より前学校へ出づ、雪甚し例のめく、家歸
るた父未帰事一曲を請じてやる、午後下校
を終り父母と家を引き払ふ手続
氏を訪ふ、種々懇談し、夜小久保
生書をかゝ祷み祈祷
日の事頗ぶる気かの
十三日水曜日朝来大気
昨日学校へ出づる列のめ
大作の三弐の相手を
旅所の方へ行きて
氏を訪ふ、客あり種々
行の発車の時間
お急いけきで
命のうちに
あるよう祈
十二字より出

一を歸すも夜十八一小今会の病を介り歸宅
後十積み教授（聖書をかく積み祈祷
就眠せり）

十四日木曜日 朝来晴 稍寒雲

昨日朝学校小出で例刻小退出せり、寛さし
久米川村大伴家の相手を取り（処下積を少
なし一四時南洋学校に赴き、須氏宗四積本
を講じ、共に歸路寄宿舎に於ける氏を訪ひ
大歸る小倉氏を訪ひ不在にて空く歸る
宅に歸り、神事行燈を取り出して種々
雑話す、村井運次にて来り、午後六時過
歸去る晩食し、為て積を取り、聖書を積み祈祷して寝る

十五日金曜日 朝来晴

昨日の新聞を見るの事多の大火ありと明治記

ありき、焼失戸数五千軒に上り猛火
三川橋まで焼け時間ぐ午前一時頃
までかかりしとの事なり（午後
学校も事務を執る）十二時頃歸宅す、書信
数件の三人来り、書を書貰み書きます、廿日より
手積会を久米川積んでやる、梅山氏来りて明日
の演行を同行せんと約す、夕食
り名海苔の浄物瑞と大根を
のみ、下積を取りて寝る
外暖気ありぬ、午後より小倉氏を訪ふ不在
り、午九時を歸宅せり、外山氏来
み聖書をかく積みたる後夜九時文典を積く
のみにて寝る

十六日土曜日 朝来晴

昨日午前九一時学校を終り、歸富後久米川
のみにて食後直ちに家を出で

菜園場か行きて見回わすに棒山氏も見へず、
折のら河辺を行くと舟底ひきおこしむきて招く人あり、
我おまねくのやと思いて居る丹、振りるまきそで
車の垂を見る女の人のかたちのめも、綺麗
久見るに幸慶の婦人歳と廿きそ、ヨ分一郡駅
連れからと思いたるも、舟の出年かつきおよるわ
中々一面識ある村井氏ありけきそ、挨拶まて、棒山
氏やあると云ふのみで、棒山丸前の舟みく行きたりさ
まざも棒丸ずで女の舟ホ棄をれ居と云ふのみで即
お其舟を棄てして行く、蜜柑、菓子なとを買ふて昼食とっ
しらまけきそ、舟の先みあて、四方の風景あ
するわ、舟中楼けきそ、舟ホ多きこので山越おこて松
嶋めざ二時舟浦手小着きこのそ山越おこて松
島ホ出るおさ、みそ早舟ホ多数の人々集
也居るおさ、角織を一面ある者あるきそ一面年急を

ホまち者あり、婦人連れ目隠七ホ、ホ特ホ面
白ホそわ綱引きまそ、むあー、まく、の二氏面
大手別きて事ていふむ氏の方百廿人、ホ岡
を離さらふむ氏吉人、ホの上を引きホのら猫板
おやらず最後まで踏を堪つめ居、実
の元気ホそアングロノーマン人種の今日全世界ホ
横行するお得る所以ホらへのと、舟そばろ風景
ホり、あひんとそ、切女、むま、二氏ホ他吉人と
ホ就吉の下の岩石の所ホ行きて衣物ホぎて
潮ホ入る、初めて寒ホこのつけきどなホ
ホも感じずとき、一枚ホ一枚ホ脱ぎ捨て
元手ホ方ホ入れる」ホ入々帰ホ去りてけきそで、帰
ご路ホ就き、浦戸ホ着きまホ来ホ同所ホり舟ホ乗ホて
漕ぎ行きホ先きの人々ホ追ひ付き、ホホ後ホ漕
田氏と姫の婦人連の事ホ居る大屋根ホ着ホと

…碧氏在来
…る

…午前祈祷会
…氏宅に於て
…神癒みを感
…す

…山会衆と共
…りの和歌を
…詠りぬ

…台山の下みつけて招魂社の境内を行き晩景を望す、
…通なみ舟にて帰宅す、夢ぎ行く久、新地の女ども
…日物を荷ひて来る時つきて上陸す、八時頃舟
…茅園橋のつきて、上陸す、七時頃舟
…宅氏を訪ひ、種々語中、国庁式まりて少時休み、
…る濱田が国庁の前にて氏の薬店を連まて行き
…上云々の事を伝ふ、氏より其の話あり、我さきの
…少々雨へ午後四時前家を出で玉台山に行く、
…七時前の人々多く来りて賑ふ、山上より夜景の
…富を眺め、山をさまじ、夫より柳橋を渡り
…帰寓す、復氏之母を遣み就眠前聖書を
…遣み祈祷す、

廿九日 月曜日 朝来雨
昨朝八時頃寝起、学校へ行き課業を事故なく
終て十時過帰寓、寺時晩食を終へ、下遣を終へ
…ぬ、下遣を終へ晩景氏を訪ふて少時
…談話す、帰家後別に事故のけふ取り書を遣み
…寝ぬ、

廿九日 火曜日 朝来晴
昨日午前七時過寝起、学校へ出で授業する事例の
如し、帰寓後下遣を終へ、二時頃より南洋学塾
へ行き、ヘスケンが父の事を満ず、帰てぶけふ落合氏さ
ゐび、来る木曜日の温泉行の打合せ行き打合せを終へ
帰寓後晩食、昨日の下遣を終へ、就眠前
の聖書遣みて祈祷す、

三十日 水曜日 朝来晴 夜曇

皆学校へ参る事例の如く遠足の儀生徒中より起り
評議の為め二時頃迄残り居りまして、其の儀ら
ぎりけまで帰宅、夕食後
泉氏を訪ひ、日の温泉行き次の週まで延期する
の話をなの為め迄で通町を西行一、本町より出で
書店にて学全書廿三四冊を求め、種々本をひ
さこのして帰り、夕食後前野書を読み
終日小雨午後晴
二十一日木曜日朝来雨午後晴
けまで、手紙を二通でこのり認め、二時頃種崎町迄
行き同所の銀行より
書留郵便を以て送金
り、外にも来る、日人大
まで小倉君も来訪
都の花柳
早稲田文学
七号を借り
前首を読み
後ち校了

降小雨午前十時頃迄にて後、曇
後ち小雨午後十時頃迄にて後、曇
二十二日金曜日朝来晴
曇り、暖き飯を炊り
ー、生徒を率ひて某
ー十二時同所を発
ー、の、ち
桂園に行き、同所より某
種々の話をなす、二時過
まで、後、事務を執る
競走をなし、夕
動をなし、むあ
下の所より海水浴をなし、
と打ちて遊ぶ壮快
出でて、漕ぐ

の句みき妓を載する舟み行きつゝ青山氏
の家を指して歌ひつゝわれ拙ぶる月氏み對して今の
番形つけらゝ〳〵家み歸る自やゝ丸ル時頃ル
すき、我均生書を讀み、祈禱して寢ねる
二拾三日土曜日朝未晨雲、午後雨
廿四日午前拾時頃寢起、早稲田文学拾三号を讀む、
梅山氏まりけきそゞおらみ草花兵お文学生書六編
と貸す、大津来りて書を讀ごやり始め、午後ル
なりて学の大半を讀ミ終ふ、夜ル入浴、夕食後ル
散歩ゝ、谷内氏を訪ひ種々談話して歸る、就眠前
英書を讀み、祈禱を捧ぐ、就眠前歌留多會
廿五日日曜日朝未雨
廿六日月曜日朝未雨、午前九歌留と雪書を讀み
廿七日朝九時過ぎ起る、午後物理をかゝ讀み、三時過ぎ

七日午後ル今著
ミさを指事長校
ゝり始む

賀状投函の
爲ます為由を聞
きに

新市町み行き加藤の前を通る、澤瑠璃大まる
七るより始むるとの事ゝ、歸途足買い
で、足袋を足買い、歸途、武田氏を訪ひみ
添ふゝ、三時過ぎ歸宅、休憩
と信る、歸宅後文を讀み、就眠前新約全書
ゝ讀み、祈禱まるうる例のめゝ
廿八日火曜日朝未晨雪雨
廿九日水曜日朝九時過ぎ起る、午前十時頃
ゝ讀み、祈禱まるうる、午後ル雪
二拾五日月曜日朝未晨雨
廿六日学校ゝ始まる例の如ゝ、午後ル
と同じき為時間を増す、夜ル入浴、夕食後ル
軒事九我々教員、この不熱心であるを責めんと
するの如ゝ、三時過ぎ歸寓、久米まり、書を讀み
ゝやる、同人ゝ下湯みで神崎町み行きゝ五時過ぎ歸
宅、夕食を終ふゝ七時過ぎ家を出
で神崎町み行きゝ五月を投入れみ
ゝ、夜十九ゝて九時の大略を記
まる、就眠前聖書を

讀みて默禱す
廿六日火曜日　朝來曇且雨
翌日朝七時頃寝起、八時前学校に出づ、課業畢
りてすみ、指二時過、久米氏と共に歸寓す、川村導
於けまれ、行きまる、蝶花形、五日太平記の二書を氏
に貸す、大伴氏来りけまれば、第三を備してやる
午後四時過、南洋学塾に行き、ハスチングス傳
を備し、然して四時前、同所を出で本所を西行志、
金子橋に行きみまさ、訪ねて、かの時在住する家
をたづね、旧郎邸なりければ、縁故出でたし
勝りけるに、昔ありし假山、小池も[redacted]形容
ありて一帯の平地となり、樹木のまばらく植
へ付けられたる所にて、昔の面影尤もなく
ここに東の垣端の木にかけし見覚えあるのみ
餘りの変遷に、暗涙を呑みけるに、時読話

の様同人に金四拾を與へける所、其報として
みや、両志ねを買ひて来りけりまれば、之を
を寓に持ち歸りて味ひぬれ、久々にて能く旨く
感じき、家にて大下書きを少々なし、小倉君を
訪ひ種々談話し、然して経学研究會を開かんと云ふ事
を談じ、然して後時歸り、聖書を讀みて默禱
して後寝ねたり
廿七日水曜日　朝來曇且雨
翌日朝七時前寝起、学校に出で課業もすみ、會
議を開くるため清氏等の寓に来らるる、其人々大
久米、村田所、岡本、青山氏の清氏なりき、さて
時間を増す事なれども可決し、夫れ五時間だけ増
して時分を長く持つ事に取りぬれば、七時
加へる事にして、其代りに勤惰点と云ふ様なるを
設ける事に決す、五時過ぎ清氏去り、夫れより讀書

声、の人々流涕をつゝみ給らず丁度終り主允ありて耳
ざわり宜よおし、先づ当日の採決をもつて打止めありたきそれ迄は
より事をおこし騒動やしき十二時迄は時計
書をおくり摘み賦、初信
会の特筆すべき大、演台の間を舞台の如くし
立ちおのおの押れ当りたる人をのせて
多数の人々の演技の場なみそれの仕掛いとも
便利なる事なりとぞ感じ入る事なり
廿八日木曜日朝来雲日和
四日午前七時頃より出校する事例の如くな
午後三時頃より学舎設立のためとて休
村国注の両氏来り、地則の証拠を調べ為
村之年の二人来り、三時迄書を揃へてやる時

去りて書どもを読み散らしのち、暫時後書物の
取べ方をのへ相のよきをいひ付け為、其後少舎
廿九日金曜日朝来雷雨を告ぐ雨天中止
廿旦朝八時前学校へ出を出す其後我宮刀と
読のち読を拡頭より始め指時頃より終午
後二時頃迄に書を持参為総計
壱四八拾弐枚ありき久年氏
やる内人去り至夜の祈祷と題する文を読む
始む四時過簿記氏来
小会三年生徒を従へ為由葉を
中々名み甘ちゝ之待ちゝ
す氏と金壱円を貰す、公
ていて、年氏前作文を読む
を休ていて聖書を借を

の祈禱」の下書を終り、一且、歸宅、洋傘を持ち、八種崎町へ行き、谷内氏を訪ひ、共に新市町へ行き、共夜も中々の一夜を送り、演説終りて滿場三鼓のうちに散會、共より人力車にて歸宅、夕飯を喫し、新聞雜誌を讀み、十一時過ぎ就寢す。

廿一日、曇、洋傘を持ち、八時過ぎ、一且、歸宅、洋傘を持ち、八種崎町へ行き、谷内氏を訪ひて、共に新市町へ行き、共夜も中々の一夜を送り、演説終りて滿場三鼓のうちに散會、共より人力車にて歸宅、夕飯を喫し、新聞雜誌を讀み、十一時過ぎ就寢す。

廿二日、曇、洋傘を持ち、八時過ぎ、一且、歸宅、洋傘を持ち、八種崎町へ行き、谷内氏を訪ひて、共に新市町へ行き、共夜も中々の一夜を送り、演説終りて滿場三鼓のうちに散會、共より人力車にて歸宅、夕飯を喫し、新聞雜誌を讀み、十一時過ぎ就寢す。

廿三日、曇、洋傘を持ち、八時過ぎ、一且、歸宅、洋傘を持ち、八種崎町へ行き、谷内氏を訪ひて、共に新市町へ行き、共夜も中々の一夜を送り、演説終りて滿場三鼓のうちに散會、共より人力車にて歸宅、夕飯を喫し、新聞雜誌を讀み、十一時過ぎ就寢す。

廿四日、曇、洋傘を持ち、八時過ぎ、一且、歸宅、洋傘を持ち、八種崎町へ行き、谷内氏を訪ひて、共に新市町へ行き、共夜も中々の一夜を送り、演説終りて滿場三鼓のうちに散會、共より人力車にて歸宅、夕飯を喫し、新聞雜誌を讀み、十一時過ぎ就寢す。

廿五日、曇、洋傘を持ち、八時過ぎ、一且、歸宅、洋傘を持ち、八種崎町へ行き、谷内氏を訪ひて、共に新市町へ行き、共夜も中々の一夜を送り、演説終りて滿場三鼓のうちに散會、共より人力車にて歸宅、夕飯を喫し、新聞雜誌を讀み、十一時過ぎ就寢す。

廿六日、曇、洋傘を持ち、八時過ぎ、一且、歸宅、洋傘を持ち、八種崎町へ行き、谷内氏を訪ひて、共に新市町へ行き、共夜も中々の一夜を送り、演説終りて滿場三鼓のうちに散會、共より人力車にて歸宅、夕飯を喫し、新聞雜誌を讀み、十一時過ぎ就寢す。

廿七日、曇、洋傘を持ち、八時過ぎ、一且、歸宅、洋傘を持ち、八種崎町へ行き、谷内氏を訪ひて、共に新市町へ行き、共夜も中々の一夜を送り、演説終りて滿場三鼓のうちに散會、共より人力車にて歸宅、夕飯を喫し、新聞雜誌を讀み、十一時過ぎ就寢す。

廿八日、曇、洋傘を持ち、八時過ぎ、一且、歸宅、洋傘を持ち、八種崎町へ行き、谷内氏を訪ひて、共に新市町へ行き、共夜も中々の一夜を送り、演説終りて滿場三鼓のうちに散會、共より人力車にて歸宅、夕飯を喫し、新聞雜誌を讀み、十一時過ぎ就寢す。

廿九日、曇、洋傘を持ち、八時過ぎ、一且、歸宅、洋傘を持ち、八種崎町へ行き、谷内氏を訪ひて、共に新市町へ行き、共夜も中々の一夜を送り、演説終りて滿場三鼓のうちに散會、共より人力車にて歸宅、夕飯を喫し、新聞雜誌を讀み、十一時過ぎ就寢す。

卅日、曇、洋傘を持ち、八時過ぎ、一且、歸宅、洋傘を持ち、八種崎町へ行き、谷内氏を訪ひて、共に新市町へ行き、共夜も中々の一夜を送り、演説終りて滿場三鼓のうちに散會、共より人力車にて歸宅、夕飯を喫し、新聞雜誌を讀み、十一時過ぎ就寢す。

卅一日、曇、洋傘を持ち、八時過ぎ、一且、歸宅、洋傘を持ち、八種崎町へ行き、谷内氏を訪ひて、共に新市町へ行き、共夜も中々の一夜を送り、演説終りて滿場三鼓のうちに散會、共より人力車にて歸宅、夕飯を喫し、新聞雜誌を讀み、十一時過ぎ就寢す。

（以上、同文の繰り返し）

枕頭はなくらむ寝覚

一の巻、

岱雲